

Liebt er dich nicht, gar bald wird er lieben,
Folgsam gehorchend jeglichem Wink!

Komm auch jetzt und löse den Kummer,
Der mir lastend den Busen beengt,
Hilf mir erringen, nach was ich ringe,
Sei mir Gefährtin im lieblichen Streit!

黄金の寶座に坐せるアフロデテよ、腕肘をたくむ天の娘よ、高く殿めしき女神よ、此のとほるける胸を心づかひや愁にて重くする勿れ。……
(我がリイラ響く時はいつも)汝は愛らしき笑を湛へて來りぬ、神女よ、不死なる額の上に(笑を湛へて)、汝は問ひぬ、訴ふる女の苦は何、哀を求むる女の叫は何故と。 遮るる心が求むるは何、打つ胸の慕ふは誰、戀の網の中に和かにつつまんと(慕ふは)。汝サッポ、誰が汝をいためしか。 彼れは 汝より去るとも、直に汝に従はん、彼は贈物を輕んずるも、又自ら之をなさん、今彼は汝を愛せずとも、直に汝を愛せん、一々汝の思に従ひ瞬きに從て。(女神よ)今來て我が憂を解け、憂は我が胸を狭くす、吾が得んとするものを得せしめよ、戀の手に吾が助け人たれ。

あはれサッポーは花に戯るゝ蝶が、春暉西山に傾かんとして春光の遊らき行くを知らざるに似たり。 吁天女は終に俗世の人となりにけり。
抑も女詩人をして戀の奴とらしめしフオンとは何者ぞ。 彼は女詩人サッポーの名を耳にし、リイラを手にせる女神の如き莊麗なるサッポーが像を心裡に畫きて、見ぬ戀にあこがれにし可憐の壯年なり。 彼は故郷にありしときより、人のサッポーを語るを聞きては常に理想の中に天女を想ひ、獨居觀念の眼を閉しては、心に女神の端麗を畫きたり。 彼は當時を語りていへらく、

……………ich stand schweigend auf und ging hinaus
Ins einsam stille Reich der heiligen Nacht.
Dort, an den Pulsen der süß schlummernden Natur,
In ihres Zaubers magisch mächtig'n Kreisen,
Da breitet' ich die Arme nach dir aus;
Und wenn mir dann der Wolken Flockenschnee,
Des Zephyrs lauer Hauch, der Berge Duft,
Des bleichen Mondes silberweises Licht

In Eins verschmolzen um die Shirne floss,
Dann warst du mein, dann fühl' ich deine Nähe,
Und Sapphos Bild schwamm in den lichten Wolken!

……我は無言に立ち上りて、戸外獨り靈なる夜の淋しく静けき中に
出てぬ。彼處にて快く眠れる自然の脈膊の中に、其が靈感の幻の如き力
ある内に立ちて、汝が方に向て腕を擡げたりき。其時に當りて、露の如き
雲の塊、ツエフ、フェルの生温き微風、山々の香、蒼白き月の銀白なる光など一
に融合し來りて額の邊に流るる時には、汝は我物なりき、我は汝が邊にあ
りと感じ、サッポアの像は光雲の中に浮動したりき。

宗教家が天國を渴望するが如く、哲士が觀念世界を憶念するが如く、又
美術家が意中に雄作を結構して獨り陶然たるが如く、彼はサッポアを以
て自己の理想界となし、至幅の熱情と熱誠を以て之を翹望したりしな
り。恰も彼はオリンポの祭に競走の月桂冠を獲得意欣喜の中又己が
女神サッポアが織手金リートを携へ、雙肩長く紫袍を垂れて、高く壇上に
上り、一曲奏し終りて民衆喝采の中に詩樂の月桂冠を戴くを見て、思は

ず之に近きしより、アフロデテアの戯は終に女詩人をして一少年の爲
に戀の奴たらしめたり。彼は永く天上に見し光雲に乗ずるの身とな
りぬ。永く夢に見し理想は、今や現實となりぬ。

物思ひの絶えざるぞ人の常、昔日の理想終に永く理想なる能はざる
は世の常。フオンは夢想の天女を我物となしりぬ。天女永く終に
天女たるべきか。彼の心情は樂しきにも非ず、又樂しからざるにも非
ず、苦あるに非ず、苦なきにも非ず。夏の夜の源暑に悶ゆるが如く、又濃
霧の中に彷徨するが如く、現在に對する不満は夏雲の如く岫の一方に
現はれんとして、彼の心緒は亂れて麻の如し。

Was für ein kühnlich Wesen ist der Mensch,

Wenn, was als Hoffnung seine Sinne weckte,

Ihm als Erfüllung sie in Schlaf versenkt!

人間は如何に憐むべき者よ、希望として彼が心覺を醒せし者も、一旦到達
すれば之を眠に陥ると思へば。

フオンが心中は何となく満たざるを感じ、一つ到達し攫取し得し理

想の外に尙一つ何か己れの願望理想を作らずんば止まざらんとす。願望は其好仇を求めて止まず。

此時に當りて彼は薔薇の叢より一少女が婀娜たる乙女姿を一瞥し、其が可憐の述懐を聞き、其が誠の友なく誠の慰なき慙むべき心情に、痛く同情を惹起しぬ。彼は突然叢より躍り出て、

.....Hier ist ein Freund.

Es verbindet gleicher Schmerz wie gleiches Blut,

Und Trauernde sind überall sich verwandt.

.....友は此處にあり。等しき苦は等しき血の如く(人を)結合し、愁ふる者は何れの處にも相親しむ。

と呼びて少女を抱きぬ。

少女は即サッポーが最愛の侍女メリッタなりき。メリッタは幼時奴隸商人の手に捕へられしをサッポーに救はれ、女主の子の如く又妹の如くにして生長したり。レスボスの島は彼女が故郷に異ならず。サッポーは彼女が慈母なり、女主の寵愛と朋輩の尊敬は此可憐の美少女に集れり、

而も彼は尙此現在に不^せり。其記憶の中に理想化せられて存する家郷父母同胞は彼が刹那も忘るゝ能はざる所なり、其願望尙憬は常に此理想界に彷徨へり。幼かりし時長き波路をたどりて後にせし郷關は、何れの方にやある、何といふ國か、少女は少しも之を知らず。されどあはれ彼郷は樂しき國なりき、今此處に見ぬ木のみ茂りたりき、此島には匂はぬ花のみ芳しかりき。

In blauen Lüften glänzten schöne Sterne,

Und freundlich gute Menschen wohnten dort.

In vieler Kinder Mitle leb' ich da,

.....

So ging Alles schön und gut.

蒼き大空には(此處に於けるよりも)美しき星輝き、彼處には善良なる人々親しみて住みたりき。彼國にては、數多の兒童の中に我は目を送りき、此く萬の事は麗しく又善かりき。

奴隸商人の爲に此樂しき郷土を奪はれ、父母同胞の消息をも知らず、日となく夜となく、波に漂ひ、サッポーの慈悲に救はれしより、茲に十幾年。

而も尙、此幻の如き故土は樂しきにつけ悲しきにつけ、渴望追想の種とならざるなし、メリッタは現世にして而も現ならぬ此理想境にあこがれて、時に我が現在を悲めるなりけり。

フオンはメリッタに渴愛の對象を得、メリッタは情を同じくして己が爲に一掬の涙を渡ぐ信友をフオンに發見せり。メリッタが手にせし紅薔薇よりも尙赤き唇の熱き接吻は二人が情緒を結合しぬ。

サッポーは計らずも二人が此様を見て驚けり。戀の奴隸となりにし女詩人は既に失意の惡魔が毒氛に包まれんとす。彼は岩窟に入りて詩神に接せんとすれば、意馬馳せ心猿躍りて制し難きを如何にせん。己が戀人が可憐のメリッタと戯れし映象は拂へども眼前に髣髴し、拭へども心裡を去らず。然れどもフオンが愛己を去りてメリッタに移りしとも信じ難し。何心なく何事ともなく只一時の隅興よりフオンはメリッタを擁せしにあらざるなきを得んや、彼の一時の感情は雲の忽出て忽消ゆるが如き者ならんのみ。されど又男子愛情轉じ易き事秋空

の如き者あるを如何にせん。女詩人は戀情の爲に翻弄せられ惱亂せられ、心は荒海に漂へる棚無小舟に似たり。彼は薔薇の下に眠れるフオンの口より漏れ出づるメリッタなる聲を聞きては望の緒を絶ちぬ。誠フオンが愛は彼の少女に移れるなりけり。女詩人は失戀の深淵に陥らんとして、忽に自己の天職に思ひ到る。世界の女王をも其前に跪かしめ、ヘラス全土の人民をして狂喜して國の寶玉なりと云はしめたるサッポーが一少女一侍女の爲の故に此く迄煩悶すべきか。不忠漲り、僞信滔る此下界は我接むべき所に非ず、白雲の躑ける所是れ我家なり。天上の光明は斯くサッポーが智慧を照しぬ。されどメリッタが舉措喜ばしげに容貌を修め、衣裝を飾れるを聞きては嫉妬怨恨は再び其黒烟に、彼が一度輝きし慧光を包み了りぬ。天女は終に人間となり惡徳の夜叉となり了りぬ。メリッタの姿を見るにつけても嫉惡の念は高まるのみ。サッポーは卒に匕首を揚げて可憐無辜の少女を刺さんとして、フオンに隔てらる。

是に於てフアオンのサッポーに對して冷え渡りたる愛情は、轉じて嫌惡の情とならざるを得ず、メリッタに對する時尙淺き戀愛は扶弱憐愍の情と合して滿幅の熱火に化せり。

嗚呼人生現實の理想を容れざる何ぞ一に此に至るや。來て見れば左程にもなし富士の山理想の中に畫きし善美は之に近けば忽にして霧散す。フアオンが幾年か夢遊渴仰して光雲晃耀の彼方に望みし理想の天女は、突如として毒蛇夜叉となり了れり。吾人が渴望措く能はざる所の天國淨土も亦豈此に均しからざるを知らんや。天の聲を人界に傳へ、不滅の淨光を生死の冥界に播すべき詩人樂手も今や嫉妬の奴婢となり了れり。然らば吾人が大慈悲の救主と頼み、智慧圓滿の賢者と鑽仰する所の一切諸佛も、亦誠は惡魔サタンならざる事誰か能く之を保せんや。

讀で此に至りて誰か悵として愁へ且嘆せざらんや、グリルバルツェルは悲曲の最高頂點に此靈筆を驅て理想と現實とが背反離乖水火雷な

らざるを吾人直覺の前に表白せり。嗚呼理想卒に空想唇氣樓に出てざるが、現世穢土の外卒に彼岸淨土なきか。否々哲士プラトーンが説きし觀念世界、大聖釋迦が教へ賜ひし寂靜常樂の境、救主キリストが宣布したる神の御國、彼等豈盡く吾を欺かんや。遠く高く天上を望め、天の蒼空豈地の塵埃に汚れんや。

天使夜叉に化し、戀人は變じて仇敵となる。曲の第三齣は此紛擾葛藤の頂點をなし、而して第四第五の兩齣を以て女詩人の現世離脱に終れる悲曲的最後を導けり。

人間と俗化せし女詩人は他くまで人間の弱點に陥れり。フアオンの薄情を憤怨しながらも尙戀々として彼を斷念する能はず、終にメリッタを退けて、永くフアオンと共に世を送らんと望み、一僕に命じてメリッタをヒオスの島に拉し去らしめんとす。

サッポーに對する嫌惡の情愈熾にして、嫉妬を脱し、夜叉を離れたる自由郷に、楽しくメリッタと住はん事を唯一の希望とせるフアオンは、此狀を

見て赫として怒れり。僕を倒し、メリックを強ひて舟に載せ、レスボスの島を去らんとす。島は彼が地獄なり、海は彼が樂園なり。

Dort drüben abern alten, grauen Meer
Wohnt Sicherheit und Ruh' und Liebe!

.....
Fort, die Sterne blinken freundlich.

Die See rauscht auf, die lauen Lüfte wehn,
Und Amphitrite ist der Liebe hohl.

彼處なる碧き太古の海の上には、安全と静謐と戀愛と住めり、.....
遁れよ、星は親しげに閃けり、海は波ち、温き風は吹き來、隠れ場は戀に優し。

遁走者は一葉の舟に戀人と己が命を托し、我戀愛を容れざるレスボスを後にし、萬水を容れて餘ある洋々たるエーゲアの海に漕ぎ出でぬ。サッポーは之を拉し歸らん爲、部下の島民をして船を舫して之を追はしむ。フアオンに對しては、何が故に己に背きしかを詰りて一言の怨を吐露し、メリックに對しては、侍婢の身として、當時希臘にて奴隸の遁走し

たる者は死罪に行ひき、島を遁れし罪を正さん。サッポーは此の如き意志を以て之を追はしめしなり。憐むべし、彼は益明に女性の淺見にして又執念深き天性を彰はし來れり。

島民は二人の遁走者を掄し來り、フアオンはサッポーが肩を捕へて、温言失戀の女詩人を慰めんとし、妮々己れが過去の心事と経歴を説き始む。サッポーは今や過ぎにし戀人が腕に依り、昔を想ふて深く嗟嘆し、又稍己が卑陋なる嫉妬を悔ひ始めんとす。フアオン亦天女が舊の如き妙音

Veh mir! (アーン)

と叫ぶを聞きては、追懷の思に堪えざるが如し。彼は人ならぬ天女に見ぬ戀にあこがれ、永く理想を理想として保たず、人として之を我物となさんとしたるを悔ゆ。天女をして夜又たらしめ、又自己も此の如きの罪を犯し、事此に至る、一にフアオンが戀ふべからざる者を戀ひしに因らずとせんや。彼はサッポーに謂へり、

Ich liebte dich, so wie man Götter wohl,
Wie man das Gute liebet und das Schöne.

Mit Höhern, Suppho, halte du Gemeinschaft,
 Man steigt nicht ungestraft vom Götternahle
 Hernher in den Kreis der Sterblichen.
 Der Arm, in dem die goldne Leier ruhe,
 Er ist geweiht, er fusse Nichtes nicht.

神を慕たらん如く、善を愛し美を愛するが如く我は汝を戀ひたりき。サッ
 *ーよ汝は人ならぬ高きものと類を同じくす、神々の宴を去りて死ある
 者の内に降り來る者は貴なからめやほ。金のリーフが置かれし手は神
 聖なり、其は卑き者を擁くべくもあらず。

此く云ひ終て、彼はメリツタを靡さ、之と共にサッポーの前に脆き罪を謝し
 て云ひけらく、

Den Menschen Liebe und den Göttern Ehrfurcht,

Gib uns, was unser, und nimm hin was dein!

Bedenke, was du thust und wer du bist!

人には戀、神には畏敬、我等には我等の者を與へて汝は汝が者を取れ、汝が
 なす事の何たると汝が何人なるかを熟慮せよ。

戀は人間の事、此一言は如何にサッポーの心腸に徹しけん。詩人はムー

ザの御使なり、形骸を人間に寓すと雖ども、天の光、神の聲を宣流すべき
 靈なり。一念思ひて此に至て、サッポーが心胸は一樓の明月に嫉妬怨恨
 の邪雲忽に霽れ渡りぬ、彼は今や地上の人に非ず。

サッポーは突如として庭園を去りて、宮中に入れり、不動寂默大理石の
 神像の間に己も亦石像の如く蒼面凝視、柱に憑て立てり、眼は滔々脚下
 に躍れる海潮に凝注し、手は觸るゝに應じて花を把り金銀珠玉を執て
 海波に投じ去るのみ、忽にして美妙の音楽は石柱の間をたどりて起れ
 り。是れ柱に掛かりしリーラが海風に和して鳴りしなり。サッポーは
 眼を轉じて神の來りしかの如く呼吸を凝らして之を凝視したり。漸
 にして、一點の生氣は女詩人が頬邊に現はれ、口邊笑を含み來り、閉せし
 口を開き沈靜嚴肅なる聲は其口より迸り出でぬ、

Ruhest du mir, Freundin? Mahnst du mich?

O, ich versteh' dich, Freundin an die Wand!

Du mahnst mich an verlassne Zeit! Hab' Dank!

友よ、汝は我を招くか、汝は我を促すか。壁なる友よ、我は汝を了す。汝は

我が幾時か忘りしを促すならん、多謝す。

聲はサッポーの口より迸りぬ、されど辭は天女のなりき。彼はリーラを抱きて一曲を奏し始めたり。オリンポの月桂冠は再彼が頭を纏ひぬ。紫衣長く兩肩より垂れて、サッポーは高く女神アフロデテーの拜壇に上り。宛然是れ生けるアフロデテー。

フフォンとメリツタとは、壇下に立ちて再び罪を謝せんとす。サッポーは云ふ、

Nicht berühre mich!

Ich bin den Göttern heilig!

我にな觸れず、我は神々の爲に聖なり。

フフォン

Wenn du mich

Mit hohem Auge, Sappho, je betrachtest——

サッポーよ、汝が俯しき眼にて我を見ば——

サッポー

Du sprichst von Dingen, die vergangen sind.
Ich suchte dich und habe mich gefunden!
Du fasstest nicht mein Herz, so führe hin!
Auf festern Grund muss meine Hoffnung fassen.
汝の語る處は過ぎにし事なり、我は汝を求めて已を見出しぬ、汝は我心情を合せざるなり、行け我が希望は固き基に立つを要す。

フフォン

So hassest du mich also?

然らば汝は我を憎むなるか。

サッポー

Lieben! Hassest!

Gibt es kein Drittes mehr? Du warst mir wert

Und bist es noch und wirst mir's immer sein.

.....

愛、憎、此外に何物もなきか、汝は我が貴き者なりき、今も亦然り、何れの時にも此くあらん.....

愛、憎元是れ人間の事のみ、今やサッポーに於て何かあらん。此く言ひ了

れる時アフロディーの火は曙の空に映じて轉た紅なり。サッポーは衆を連れて、獨り壇上に立てり。壇を前み天を仰て曰く、

Erhabne, heilige Götter!

Ihr habt mit reichem Segen mich geschmückt!

In meine Hand gabt ihr des Sanges Bogen,

Der Dichtung vollen Köcher gabt ihr mir,

Ein Herz, zu fühlen, einen Geist, zu denken,

Und Kraft, zu bilden, was ich mir gedacht.

Ihr habt mit reichem Segen mich geschmückt,

Ich dank' euch!

Ihr habt mit Sieg diess schwache Haupt gekrönt

Und ausgesit in weitenfernte Lande

Der Dichterin Ruhm, Saat für die Ewigkeit!

Es tönt mein goldnes Lied von fremden Zungen,

Und mit der Erde nur wird Sappho untergehn.

Ich dank' euch!

Ihr habt der Dichterin vergönnt, zu nippen

An dieses Lebens süß umkränzlom Kelch!
Zu nippen nur, zu trinken nicht.
O, seht! Gehorsam eurem hohen Wink,
Setz' ich ihn hin, den süß umkränzlten Becher,
Und trinke nicht!

Vollendet hab' ich, was ihr mir geboten,

Darum versagt mir nicht den letzten Lohn!

Die euch gehören, kennen nicht die Schwäche,

Der Krankheit Natter kriecht sie nicht hinan,

In voller Kraft, in ihres Daseins Blüte

Nehmt ihr sie rasch hinauf in eure Wohnung——

Gönnt mir ein gleiches, kronenwertes Loos!——

O, gebt nicht zu, dass eure Priesterin,

Ein Ziel des Hohnes werde euer Feinde,

Ein Spott des Thoren, der sich weise dünkt.

Ihr bracht die Blüten, brechet auch den Stamm!

Lasst mich vollenden, so wie ich begonnen,

Erspart mir dieses Ringens blut'ge Qual.

Zu schwach fühl' ich mich, länger noch zu kämpfen,
Geh' mir den Sieg, erlasset mir den Kampf! —

崇き靈なる神々よ、

爾等は豊なる恵もて我をば飾り賜ひき、我が手には歌の弦を興ひ賜ひ、詩樂の籠の満てるを我に興へ、感ぜん心情を興へ、考へん精神を興へ、吾が考へしを結構せん力を興へ賜ひき。爾等は豊なる恵もて我を飾り賜ひき、我は爾等に謝し奉る。

爾等は勝利して此纖弱なる頭に冠し、遠く隔りたる國々迄も、女詩人の譽を撒き賜ひき、永劫時間の種子を我黄金の詩は知らぬ人々の口にも歌はれ、サッポーは只世界と共にのみ滅びん。

我は爾等に謝し奉る。

甘く花輪繞れる此生命の花を、嘗めん事、飲まずて只嘗めん事を、女詩人に恵み賜ひき。見そなはせ、爾等の高きより塵くに順ひて、我は甘く花輪繞れる盃を聚て、飲みはせじ。

我は爾等の命じ賜ひしを了りたり、されば最後の酬を我にな拒み賜ひそ。爾に順ふ者は弱きを知らず、病の蛇は彼等に潜み來らず、彼等の生存の榮

えの時に當りて爾等は力を極めて、迅速に彼等を爾の棲居に收め賜へり。我にも亦戴冠に値する同じき運命を興へよ。許し賜はされ、爾の祭婢が爾が敵の蔑視の的となり、自ら賢と思へる愚者の玩弄となるを。爾等は我が榮えを滅ぼしぬ、幹をも亦絶ち賜へ。我をして我が始めし如くに了らしめよ、我が爲に此辛勞の苦しき禍みを除き賜へ。我は尙永く爾はんに堪えざるを感ず。

我に勝を興へて、我に酬ふを免ぜよ。——

此く云ひ來りて彼が情緒は轉た昂れり、

Die Flamme lodert, und die Sonne steigt,

Ich fühl's, ich bin erhört! Habt Dank! ihr Götter! —

始は輝き渡り日は上らんとす、我は感ず、我が聴かれたるを、神々よ、謝し奉る。

天は詩人を容れたり、サッポーは現世に一片の望ある事なし、况や一時の痴情嫉妬に於てをや。二人を塵き、フアオンが額に接吻しては

Es küßel dich ein Freund aus fernem Welten,

遙なる世より友が汝を接吻するなり

メリッタを抱き寄せて

Die tote Mutter schickt dir diesen Kuss!

此接吻は死したる母が汝に贈るなり

サッポーは神靈に回れり。光輝彼を圍繞し、紫雲天より降りて彼を迎へり、彼は絶厓の尖頂に立て、雙手を開き、天を望み、妙音潮聲に和して

Den Menschen Liebe und den Göttern Ehrfurcht!

(Gienessl, was euch hilft, und danket mein!

So zähle fei die letzte Seindt des Lebens,

Ihr Götter, segnet sie und nehmt mich an!

人には戀、神には畏敬、汝等の爲に榮ゆるを享けよ、又我を思へ、我は此く此世の最後の罪過を拂ひたり、神々よ彼等を恵み、又我を容れよ。

言ひ未だ終らずして、天女は忽に身を岬頂に躍らして海に入りぬ、狂瀾激浪は彼を紫衣に捲き、須臾にして天女の形骸を千尋の蒼海に收めらんぬ。

嗚呼女詩人サッポーが精靈は浮世の塵に堪え得て天上の郷に歸れり。

彼女が骨骸は偽の穢土に埋めらるるに忍びずして、清淨無垢なる海濤の中に葬られたり。

觀來れば悲曲一篇、女詩人の一生是れ理想と現實が衝突の好活畫。

フアオンは理想の女神を獲て後、理想の實は現實不滿の前に夢散し、新しき理想を達せんとして茲に現世と葛藤を起しぬ。メリッタは女主慈懷の中に居ながらも、尙過去幼時の理想界を渴望するの餘り、思はずも美少年フアオンが情に迷ひて、終に恩人に背き、茲に世間の恩義と破裂を來しぬ。詩人サッポーは天女なり、現世の人に非ずして天上より降りし靈なり、而も肉躰ある人間としては戀愛の奴となり、母胎より生れ來りし女性としては嫉妬執念の熾に身を焦し、茲に彼が本然天賦の超世理想に對して大衝突をなしぬ。フアオンとメリッタに於ける現實と理想の衝突は現世が理想の放逸飛翔を約せしより起れり。彼等の希望理想は根底は肉躰を離れざるべし、然れども其渴愛の靈火は人の胸に宿れる精靈の點ずる所なり。人は常に現實に満足せず、有耶無耶の間に模糊

として理想を書き來りて之に到らんと煩悶す、而も現實の事物關係は此有耶無耶の境界を排して容れず。二人は此排斥に遇て將に無底の關中に陥らんとせり。サッポーが苦悶は詩人として現實の肉躰世間と衝突せしに起る。衝突して彼は始めて十分に自己本然の天職に悟徹せり、一度は人間となり、失戀煩悶の悲境に陥りて始めて自己の人間にあらざるを知りしなり。彼は神女として巨海の慈愍を其が人間に陥りしときの戀人と、及怨嫉の對象なりし侍女とに垂れ、現世を辭し、人類に別を告げ、在天の伴侶同類を呼びて終に天に上れり。

人は常に現世の繫縛に苦悶す、肉躰の束縛、心力の有限、何れか苦惱の種ならざる。病苦來り、老衰迫り、歡樂常に悲哀に轉じ易し。之に加ふるに祖先よりの遺傳は我を欲せざるに局し、社會の四圍は、願はざるに我を壓迫し、事常に志と違ひ易く、眇たる我は常に外界必至の運行に抗し得ず、耶蘇は之を罪惡と教へ、佛は之を無明と説き、希臘人は之を運命と觀じたり。運命か、罪障か、將迷妄か、吾之を知らず、只其勢滔々として

我が抗すべからざるを見るのみ、而も人は此束縛壓迫を脱せざれば止まず、超世無上の彼岸理想界を憧憬す。

ロイカデア岬頂の松風は其昔を語るも、エトギア海上の波濤は太古の聲をなすも、サッポーが紫衣金筆が翻て海波の間に入りにし姿は杏として尋ぬるに由なし。而れども、グリルパルツェルが靈筆女詩人の超世神聖なる最後を寫し來れば、寂光常樂の彼岸神國は吾人の前に髣髴たるを覺ゆ。

サッポーは現實理想衝突の紛亂を打破し、世間罪障の重きを委棄離脱し去て逝げり。光明は紫雲の一端より輝きて、ロイカデアの邊をや照しけん。

附言

サッポー入水の傳説并にサッポーが實際に就きては我師ケーベル先生の帝

國文學第二卷第二號なる「希臘古代の詩歌及音樂」の末項を参照し賜へ。本篇中 Dielung を常に詩樂と譯しぬ、希臘の古代にては音樂と詩歌とは別れ居らざりしを以てなり。されど固より譯當の譯とは思はず、此と同時に Dielerin (假に詩人と稱したり)も亦詩人にして同時に音樂家なり。其他山中の詞を譯して不釋當なるも多かるべし、讀者之を諒せよ。此曲を世に紹介せんとしたるは日一日の故に非ず、今漸く此一曲の形影を世に傳ふるを得たり。然れども豈此一篇を以てサッポー一曲を世に紹介し得たりと云はんや。只此を以て世人に少しく此一曲に注意を願ふのみ。若し其れ忠實の翻譯を以て此曲を我國の文界に移す人あらば、豈獨リクリルパルツェルが名の爲のみならんや。此曲に就きては此外場面、活動等に関して少しく論すべき事あれど、今は特に戯曲として之を論じたるに非れば之を省く、只其が舞臺の裝置を記せん。

「戶外、後方一面海面を示し、其の激漚き左の方に、断崖に綴く、汀にフフロデーの拜壇あり、右の方前面に岩窟の入口あり、灌木の蔽、雜木其前に繁る、少しく後方に、石段あり、サッポーが住宅に楳ける長廊下の極を示す、前方右

の方に、薔薇の叢あり、其前に斜草の地面」。

(廿九年二月)

詩眼に映ぜる救世の使命

(緒言)

慙むべきかな、蝨々苦毒の中に彷徨せる衆生。痛むべきかな、罪障に生れ、罪過に存らへ、冥より冥に入るの人間。情人と手を携へて花の雲に踏み迷ひ、軟風和光に浴びつゝも胡蝶と戯れを共にするの人は如何に此世をか観ぜん。三千里外の秋の色を今宵は見つゝ明かさんと、高樓酒を置きて酔眼圍繞の美姫を眺めつゝ、獨り占め得たる權と富とに得々たる人の眼には、如何に人間社會の映ずらん。永き春日は暮れぬ、されど彼等は燈下私語喃喃、胡蝶の夢の醒むべくもなし。琉璃の月も何時しか墨の雲に蔽はれぬ、月はなくとも榮華の酒と色とに長夜の幻迷はいやが上にも増長す。古の賢人は曾て歡樂極て悲哀多きを歌ひぬ。されど五尺の身軀と五十年の一生に浮華喜樂を追へるの衆民、幾何か深く人生悲痛の事あるを感じ、幾何か眞に超世無極の理想を觀得

せる人ありや。あはれ臭の中に在る者は臭を知らず、陋の中に長ぜし者は陋を厭はず、曾て光明を望まざる者奚ぞ暗中の苦を知らん。此を以て、遠く世の擾々に超越して、功利禍福以外光風霽月の境に逍遙し、又夙に無明迷妄を斷滅し盡して罪障幻妄の上に光明曜晃の中に遊べる人あらんか、彼は紛々たる人世の冥暗に對して如何の感慨を生ぜん。古より哲人多く現世の惡を論じて想を寂光の彼岸に馳せ、詩人多く地上の障礙を歌ひて高遠の理想界を憧憬す。

シルレルが理想を詠じて Die Ideale sind zerronnen (理想は消え失せぬ) と喝破せし者亦實に世間人生の實相を抽出し來て餘蘊なしといふべし。

語に云ふ Omnes ingeniosos melancholicos esse (一切の天才は憂鬱なり)と。余輩は信ず、眞摯なる者は少くとも沈痛なり、沈痛なる者は決して浮華飄々たるを得ず、然らば眞摯に世界と人生とを冥想し、或は之を論證し、或は之を歌詠せんとする者にして、特に天の賦與に依りて人生の奧秘

を直観するの天才にして憂鬱ならざる者なきは、固自然の理勢のみ。狭少の利樂是れ事として紛々擾々たる衆愚民は云ふを要せず。世には天賦の才智滑にして流るゝが如く、開溷敏達常に人生の嬉笑にのみ着目せるの人なきにあらず。吾人はカモエンス、モリエルが歡曲作家としての天才なるを疑はず、然れども吾人は彼等に待つに人生の深奥なる實相を發揮するを以てするを得じ。現世に滿たず、厭世多苦の觀念に動かさるゝは、天を樂み理想を渴仰するの動機にして、即哲學詩歌の源泉なり。厭離穢土欣求淨土なる宗教の發足點亦實に此を出でず。天才は多く生を多苦と觀じ、世に背く。其哲學者たる者は快刀鑿々細精の考察に依りて之を明にし、其詩人たる者は雄渾の調を以て沈痛の聲を歌ひ、天下の輿衆をして陶然として感得する所あらしむ、而して其宗教的熱涙を有する者は、迷惑裡に蠢動せる民衆の爲に万斛の血涙を灑ぎ、悲痛慙憐の情遣るに處なく、大勇猛を起して、世界を冥暗毒焰の中より救ひ出さずんば止まざらんとす。蓋し天才眞摯の人、自己の經

驗に依りて深く世の多苦を觀取するに及びては、實に世相の奥に闖入し個人的立脚地を超越したる者なり。個人的幸福主義の立脚地より世の多苦をいふ者は、眞に世の多苦を觀ぜしにあらず、自己の不如意に悲哀せるのみ。天才偉人は然らず、既に自己個人の中に厭離すべきの相あるを觀取すれば、即此に依りて現世の大宇宙其物亦厭離すべきに悟達す。彼は自己の多苦に依りて世界の苦痛を知り、世界の厭離すべきに依りて愈自己の解脱を要するを知る。彼は、自己を超越して世界が自己と共に解脱を要するを感得せるなり。是に於てか一人の自己を顧みず己を挺し身を棄て、多苦厭離すべきの世界を其罪障より解除し、其繫縛より解脱せんとす。彼の身は固より己の身にあらず、彼の個人は既に世界の中に沒了せり、一身の辛艱固より辭する所にあらず、一人の安危豈顧慮するに遑あらんや。此勇猛あり、彼が福音は四方後代に宣流し、万民は此悲壯を見、風を望て歸仰信賴せざるなし。一宗の風教此に成り、世界の救濟此に依りて立つ。

歴史上の救世主、先覺者詢に此般の天才狂熱の人に外ならず。今更喋々せずとも人は知らん、佛陀覺者此なり、基督救主此なり。彼等は國民の腐爛壞朽到底民衆安立の大本たる能はざるを看破し、固成の社會制度、外面の儀式虚禮の外に、真理の光明に依りて生民を暗冥迷惑の中に救ひ、其結果は國民宗教の洗滌を成し終りしのみならず、其潮流は滔々として種族國民の外に漲逸し、東西兩洋に偉大なる感動教化を及ぼしたり。此一事既に彼等二偉人をして神聖ならしめ、其宗徒をして彼等を人類以上の靈として、或は神子救主として、若くは世尊如來として崇拜せしむるに足れり。加之、其一是國大ならざるも釋種の覇者たる迦比羅伐卒堵に轉輪聖王たるべき儲君の位を棄て、聲色美人の誘惑を斷じて、家を出て幾年の苦行考察、正覺の道に到達し、五十餘年の年月を教化説法に委し、生者必滅の理を説きつゝ、祈連河畔に歿せしが如き、其事蹟、其性格宛然詩中の人なり。又其二の如き、身は邊陲の地に生れ、家は一工夫に過ぎざるも、自ら神の子、人を救ふの職を帶べりと信じて、人

を化し民を導き、威は秋霜の如く、恩は南風に似て、處々に行脚福音を傳へ、終に信仰の爲事業の爲に悲慘悲壯の最後を遂げしが如き、恰好の悲曲的人格なり。彼等の宗徒が其歴史的事實傳説を潤飾し、其人格一生を理想化せしは詢に故ありといふべし。

佛教若くは耶蘇教の宗徒が、其佛陀又は救主を詩に詠じ文に屬し、其他繪畫若くは彫刻、音樂等美術的製作に之が理想的表象を試みしこと、東西古今果して幾何ぞ。佛陀や、基督や、其の舊教權を打破して新福音を傳ふるに當りては、實に歴史上の人物なりき。然も、今に至りて其宗徒の眼に映せる彼の二人は既に歴史的の悉達、耶蘇にあらずして理想的神人、詩的救主にてあるなり。其眼に映ずるの教祖は、或は其骨を歴史事實に取れるも、其肉と皮とは殆ど是れ詩的構造の製作せる處なり。井上博士釋迦の傳を講ずるに當て、曾て論じて曰く、

古來一個の宗教を創立せる者は、大抵其信者が歴代附加せる幾多の怪誕たる説話の爲に圍繞せらるゝが故、歴史的人物なるよりは寧ろ天上より

降臨せる神靈と見做すべき性質を假有し、從て又其傳説の如きは、神怪なる口碑を以て充たされ、虚中實を含み、實中虚を混し、深渺として雲烟を披索するの觀なき能はず。

是れ實に此等の傳記を史實として研究する上に取りては、吾人に少なからざる殆ど絶望的の障礙を與ふるの因なり。然り而して此史的研究の一大妨害は、又一方に於て吾人が藝術の上より彼等の傳記を觀察するに當りては、滾々盡きざる興味と妙味とを與ふる所以なりとす。此故に吾人は今暫く歴史の見解地を去り、文學の立脚地よりして此理想化せられたる宗祖の傳記を見んと欲す。

凡そ宗教と美術の交渉は今更説く迄もなし。宗教の信仰は美術製作の上に明白なる影響を及ぼし、美術の印象が宗教感情に衷心の感動を與ふるは固より、宗教の宗義自家が帶ぶる所の美的風趣が如何なる魔力を有して一宗の精神に如何の効果を及ぼすかを考一考せば二者が甚深の契合自ら明なる者あらん。春の花爛熳として夕日はなやか

にさすの時、暮雲を傳ふてさこゆる遠寺の鐘に、花の瓣ひらくと散るを見て、生者必滅の理に、其昔入滅の佛身を蔽ひにし娑羅雙樹を思ひ起す人の心緒を想ひ見よ。又羅馬の古都に、夕の新月斜にカピトルの屋上に懸るの時、此世の者らしからぬ淡き影を長く地上に牽ける聖母が像前に跪きて、亡き母を懷ひながらアウ、マリアを微吟する孤兒の胸中に入りて其情を味へ。吾人は言語に絶する者の心中に充ち來るを禁ずる能はざるなり。又吾等は彼のゲーテがファウストを讀む毎に、ドクトルが深夜人靜るの後、徐に過去の徒勞を追懷し、浮世の塵を嘲りつゝ、目前己を迎ふる火車の展轉するを望みて、地獄の門を破らんと、將に毒酒を嘔み下さんとするの時、明け行くオステル祭日の曙と共に聞こゆる Christus ist erstanden (救主は復活せり)の聲に、自己も亦此歌を唱して此朝を迎へし幼時を思ひて、思はず毒酒の皿を遠くするの段に至りて、殆ど身の在る處を忘れんとす。又彼の天網島の曲を見て、浮世の波濤に堪え得ぬ情人が手に手を執りて、七つの鐘の六つ鳴り終りて残る一つ

を今生の鐘の鳴る音の聞き收めに、死出の旅路に立たんとするの一瞬、舞臺の彼方に歸命頂禮釋迦牟尼如來の聲幽凄に聞こえ渡るに接しては、胸中亦白刃に伏して冥途に發するの思なくんばならず。吾人は宗教と文學との冥契に至りては、殆ど口言ふ能はざる者あるを默會し、二者が人心を教化し感動する深遠の秘奥に至りては、終に致一の妙境を有するを信ず。

今試みんとする詩眼に映ぜる救世の使命は、殆ど此秘奥に闖入せんとする者なり。眞摯沈靜の考察に依りて世界存在の苦を洞察し、熱血憤猛此大苦界を救濟せんとするは、詢に天地の莊觀人類の奇絶なり。菩提攝理の權化たる大偉人、否超人間的人間が衆生救濟の責任を雙肩に擔ふ、洵に宗教中の大美なり。又一方より云はゞ自ら救世の天職を帶べりと信ぜる一人格が、一身を顧みずして絶大の同情慈悲を起して神の世界を回復せんとす、詢に文學中の大宗教なり。此故に文學の方面より宗教の理想を發揮し、宗教の方面より文學の超世的妙境を探求

せんと企つるは、決して無用の業にあらざるなり。

此の如く詩眼に映ぜる救世の偉業を稽査せんには、二面より攻撃あらん。即一は、教徒が神聖として尊崇する所の經典を捕へて之を一箇の文學的産物として評隲し、又宗徒が讃仰歸依する所の濟度者救世主の事蹟を詩的構想(Dichtung)として其の價值を論ずるが如きは、瀆聖の業なりとすると、一は又反對の方面よりして一教の宗徒が濟度者の事蹟を詠せるが如きは、其大本迷信に出でし者にして、決して詩人の構想と同一視すべき者にあらず、此等は文學的評論を下すべき外貌を有するも、其實は文學の産物にあらずとすにあり。

此の如きの非難は、共に宗教的感情と美的感情との契合、及其より生ずる人心想像の活動が致一の妙境を有するを知らざるに出づ。

文學批評の方法を以て經典の中に表はれたる詩的理想を伺ふは、即其の内に燃ゆるが如き信仰の存せしを研尋する者にして、文學的産物としての評隲は、決して宗教の信仰を蔑視する者にあらざるなり。其

の詩的構想は即其の信仰の靈火が淡々たる歴史的事實に満足せずして、飄逸想を理想の境に馳せしより生み出だされし者なり。經典に詩的評隲を下だすは何れの點より云ふも瀆聖の事にあらず、却て宗教心の好紹介にてあるなり。

宗教は迷信なりとするも、宗教詩人の構想が詩的ならざるの理ある事なし。此問題は殆ど明白の問題なり。若し此の如きの見地を抱くの人あらば、宗教心より出でし構想と美的動機に出でし構想と、其の想像力たるに於て幾何の差別ありて存するかを考へんには、事態自ら明ならん。若し宗教心の構想を以て基本なき迷信的空想なりと斷ぜんには、詩歌小説の構想は果して空中樓閣たらざるを得るか。此に事實的材料ありと云はゞ、彼にも歴史的骸骨のあるあり。宗教的熱情に出でし構想は決して天才が神來に依りて造り出すの構想と異なる者にあらず、彼を以て文學的產物となすに於て何の不可あらん。

但其れ宗教心より出でし構想なりとて、猥に荒誕無稽の空想を弄し、

徒に神怪を談ずるを能事となす者あらば、此の如きは詩と見做すの價値なきや謂ふを待たず。然れども文學中の產物と雖も亦兒雷耶物語、鼠小僧譚の如きは彼と同量に詩的理想化の產物と見る能はざるを思へ。

之を要するに、理想化せられたる一教祖の一生を詩として見るは、即宗教と文學が相投合せるの境を尋ぬるにあり。ゲーテが月にあてがれ、森の影、谷の崖が朦に霞める間を歩み、人の心情に浸み渡るが如き溪水の潺々深々を耳にしながら、心の隈に曇くな友情の甘さを味ひ、*Losst endlich auch einmal mei e Seele ganz* (汝月光復我が心を融かし去る)と歌ひて恍惚たりし時の心情には、其奥底にスピノザ主義の神秘基督教の信仰が基本をなせるを知らずや。又佛徒が彌陀の慈光に攝せられたりと信受して、報恩謝徳の熱涙に驅られ、世界の萬民に此法味を傳へんと奮起せる間には、大なる人情の光充滿して無限の慈悲、無限の趣味、戯曲が描寫すると同じき人道の横はるを見ずや。嗚呼數限なき例を擧げ

來て宗教と文學と致一の妙境を説かじ。拈華微笑の間にも悟らん人は悟り得ん、八萬四千の法門にも無縁の衆生は漏れんのみ。

(廿九年十二月)

阿彌陀佛の救世大發願

慈光はるかにかふらしめ、
法喜を得とぞのべたまふ。

光のいたるところには、
大安慰を降命せよ。

親鸞淨土和讃。

釋迦牟尼が諸行の無常に打たれし悲痛の世界觀と、其が勇猛精進の成道教化とは佛隨の一大宗教を發しぬ。少にしては一國の儲君として榮花を極め、一轉して出家捨行の一沙門となり、幾年修業の結果は終に苦集滅道の眞理に悟徹し、此の如き覺者としては大慈の血涙を盡々迷へる四民の上に垂れ、四十餘年の間萬民を訓化し、終に娑羅樹の下、逝く春と共に寂滅の相を示せし一牟尼の人格は、如何に其教徒を感動せしか。彼等は其遺物を奉祀しては其恩徳を感謝し、其丈六身のありし昔を想ひては泣然流涕、其徳化を追慕したり、此に於て佛隨の人格は佛徒信念の最大中心をなすに至れり。後世の佛徒は此中心人格の一生

を理想化し、其衆生濟度の行程を詩的に構想し、大なる宗教詩を作り出だしぬ。

然れども、宗教の發達は歴史的の一人格に就きて思念するに止まらず、進で佛隨其物の本性を考察し始めたり。佛隨の佛隨たるは抑何に由るか、佛隨の壽は果して丈六の身軀と共に盡さしか、抑又佛隨は何に由りて衆生の導師となり、萬民を涅槃の彼岸に導くを得るか。釋迦死してより佛徒の宗教的意識は續々此等の問題を喚起し來れり、而して此等の問題は自ら其解釋を哲學的に求め、宗教的意識は哲學的世界觀と合して、複雜又玄奧なる佛身 (Buddha-kāya) の論を生み出だせり。其結果は一言にして蔽はゞ、佛隨に就きて其本軀と其顯現を分ち、其本性は之を宇宙の眞性に觀じて、霍然寂靜の本軀と計し、其顯現は之を諸世尊出世の慈悲大願に認めて、圓融無礙の妙用を仰ぎたり。

此般の佛身論は釋迦滅後五百年の頃に大成し、最も明に馬鳴 (Aśvaghoṣa) に依りて發揮せられたり。彼は思へらく、佛の本軀たる法身が

衆生に對して其色相を顯現するは即其が慈悲の誓願に發す、佛は其因位にありて衆生の無明に迷ひ業障に障へられて苦海に沈淪せるを見、慨然之が度脫の大願を發し、自ら諸波羅密を修して衆生を攝化せりと。彼は論じて曰く、

如來有勝方便攝護信心……若人專念西方極樂世界阿彌陀佛所
修善根廻向願求生彼世界即得往生……若觀彼佛眞如法身勤修
習畢竟得往生正定。

(起信論下卷)

無量壽にして無量光を具へたる阿彌陀佛は法身攝化の妙用として又衆生濟度の大師として大乘佛教徒が信仰歸敬の中心となれり。釋迦中心の佛教は一轉して彌陀中心の佛教となり、此よりして彌陀淨土の觀想は宗教的熱情の源泉となり、念佛往生の信仰は信念に一層の興趣を加ふるに至れり。基督論が歩を進めて基督と神との同質を斷定し、神の子として基督が人の救主となりしより、基督教の信念と詩趣とに幽邃微妙の韻致を加へたると同じく、佛教の佛身論は終に阿彌陀救

濟の教を生み出だせり。

支那、日本に於ける佛教の感化は殆ど盡く彌陀攝化の信念に出づ。其宗教哲學上の研究は暫く措き、其が人心の心緒に振觸し衷情を感動したるの深大なるは特に記せざるべからず。暮れ行く春の夕日影はなやかに西天を彩どるを見ては、西方淨土の淨光莊嚴を想ひ、夙に凄え亘る空に閃々たる鏤の月西の山端に傾くを眺めては、西の御國に入らんとする光を羨み、或は溪聲に耳を澄ましては法身の說法を聞き、或は微風松樹を吹きて聲あるを極樂の軟風微妙の樂を傳ふと觀ぜしが如き、支那文學の或者、我邦王朝以下の文學は皆此般の感動に出でし者に外ならず。

年月をいかで我身におくりけん、きのふの人もけふはなき世に、
つきはてゝその入あひのほどなさをこの曉に思ひしりぬる、
と世事の無常流邁を嘆き、
罪人のしめる世もなく、もゆる火の薪とならんことぞかなしき、

と六道の苦艱を想ふの人は、西の山端に入る月を眺めては、

山の端にかゝる月をながむれば、我も心の西にいるかな、
と觀じ、藤波の紫にほふを見ては、

西をまつ心にふぢをかけてこそ、そのむらさきの雲をおもはめ、
と觀じ、夢さむる曉の鐘の音に大悲の弘誓をふさねたる南無の御名を唱へしなり。尊は帝者の母たり、位は門院の高きに居り、六十餘州を風靡したる平氏の威勢に榮花歡樂を極めしも、時至れば敵勢を背にして、都を落ち、身はさながら天人の五衰に遇ひ、一門西海の波に浮沈しては、潮水飲むを得て、餓鬼道に入り、都には夢にだに見ざりし荒磯に漂ひては、叫喚の罪人に等しく、管絃の聲ならで矢叫び劍戟の響には目のあたり修羅道の闘争を見、海に身を投げながら、はかなき命を助かりて、東夷の荒武者の間に入りては、畜生道の想をなして、辛に六道惡趣の苦を嘗め、眼に一門の滅亡と愛子眷族の非命の最後に遇ひて、深く人生の火宅に異ならず、身命の浮萍に外ならぬを觀ぜし人も、一念の窓の前に攝取

の光明を期し、十念の柴の扉に聖衆の來迎を待ち、極重惡人、無他方便、唯稱彌陀、得生極樂の誓願を便りにし、一心彌陀を念じて、主上を始め奉り、二位殿一門の人々、且つは我身の成等正覺を願ふ外なかりしにあらざるや。

一心三千の觀法に台嶺の月を眺めし人も、魚山律呂の溪聲に和して、念佛稱名し、念佛三昧院裏彌陀の淨土に生れん事を冀ひ、孫子の新衣を心中に畫きつゝ、南軒に絲を紡ぐ老婆も、蚊遣火の粗朶くすべつゝ、夏の夜の月を眺めて耕耘の勞を休へる老爺も、念佛衆生攝取不捨の慈願を仰ぎては、報謝の念佛に暗涙を催しぬ。

南都法相の談理に代はりて平安の大宮人を化導せしは台嶺の觀佛三昧を基とせし彌陀の佛教なりき。天台の末路が僅に祈禱々禳の物質的方便に依りて上流に媚びしときに、當りて、怨愴なる梵唄稱名に六十州の下層を慰め、又幽凄なる念佛合唱の功德に依りて都鄙遠近の民衆を誘化せしも、亦稱名大本の彌陀佛教なりき。此に次ぎて吉水の禪

房に易行の大道を唱導し、唐土我朝の智者たちが沙汰する所も、一文不知の尼入道が安立の地となすべき所の者も、此に外ならずと喝破して、腐敗鬱蒸の宗教界を一掃せしも亦實に歸敬信賴を主義とする彌陀の佛教なりき。

我邦人の宗教的意識は殆ど彌陀佛の獨占する所なりき。此感化發しては殿堂となり、繪畫となり、歌謠詩歌となり、戯曲小説の内容を動かし、人心活動のある所殆ど其影響を蒙らざるなし。彌陀佛救濟の教が此く偉大の感化を呈するに至りしは、固より幾多の年所を経て成りし者にして、其宗教的意義の發達開展頗る興味ある題目なり。然れども此等の宗教史上の問題は今の論ずべき限にあらざる、其の信仰若くは説話の結集を得しは實に淨土莊嚴 (Sukhāvati-vyūha) 經に始まる。此經又無量壽清淨平等經、大乘無量壽莊嚴經として知られ、我邦にありては康僧鎧の譯に成れる無量壽經 (Amitayus-sūtra) を以て最も汎く行はる。

吾人は敢て此經の本文批評に入らじ、然れども其説話の大躰が範を

釋迦の一生に取りしは視易き事實なり。而して其の歴史的事實の根據に立たざるを以て、其構想は釋迦の傳記に於けるよりも自在ならざるべからず。然れども北方佛教詩人の構想は殆ど普曜經、本行集經等に傾け盡して、此外に空想を馳するの餘地少くなれり、此に於てか淨土莊嚴經は其の主題なる淨土の叙述には力を盡せしも、其土成就の因たる阿彌陀佛の發願苦行に就きては甚しく空想を弄せざりき。此故に阿彌陀佛の救世に關する構想は稍抽象に過ぐるの觀なきにあらず、釋迦傳に於けるが如き變幻眼を眩するが如き者なく、又深く戲曲的技能を振へるの箇處もなし。

然れども其中自ら森大雄麗の風を備へ、其觀想や宏壯、其感情中に熱し來ては激越の聲をなし、其光芒外に發舒しては汪洋の調をなせり、其趣のある所我邦佛教の沈痛の觀想、咽塞の情緒、切々の聲調と甚相距る者あり、江南の橘江北に移して枳となれるの類。而も其感化の大本を釋ぬれば、彌陀佛教の我邦に於ける感化は殆ど此構想に依りて立ちしなり。

なり。

以下少しく其所説を叙せん。

經は先づ過去無數の諸佛を以て起り、世自在王佛 (Lokeśvararāja) に及ぼせり。其時一比丘法藏 (Dharmakāra) なる者あり、佛の威徳無限にして十方衆生を度するを見て、己亦佛となりて群生を濟度せんと決意す。即彼は佛の前に跪き、此大願を白す。曰く、

光顔巍巍	威神無極	如是燄明	無與等者	日月摩尼	珠光燄耀
悉皆隱蔽	猶若聚墨	如來容顏	超世無倫	正覺大音	響流十方
戒聞精進	三昧智慧	威徳無侶	殊勝希有	深誦善念	諸佛法海
窮深盡奧	究其涯底	無明愆怒	世尊永無	人雄師子	神徳無量
譬如恒沙	諸佛世界	復不可計	無數刹土	光照悉照	徧此諸國
如是精神	威神難量	令我作佛	國土第一	其衆奇妙	道場超絶
國如泥洹	而無等雙	我當哀愍	度脱一切	十方來生	心悅清淨
已到我國	快樂安穩	幸佛信明	是我眞證	發願於彼	力精所欲

功勳廣大 智慧深妙 光明威相 震動大千 願我作佛 齋聖法王
 過度生死 靡不解脫 布施調意 戒忍精進 如是三昧 智慧爲上
 吾誓得佛 普行此願 一切恐懼 爲作大安 假使有佛 百千億萬
 無量大聖 數如恒沙 供養一切 斯等諸佛 不如求道 堅正不却
 十方世界 智慧無礙 常命此尊 知我心行 假令身止 諸苦毒中
 我行精進 忍終不悔

(今此處には現存原文に最近と康僧鑑の譯を其の順序に従て掲ぐ、尙
 參照として法賢の譯を載す)

如來微妙色端嚴 一切世間無有等 光明無量照十方 日月火珠皆瞻曜
 願我得佛清淨聲 法音普及無邊界 宣揚戒定精進門 通達甚深微妙法
 智慧廣大深如海 內心清淨絕塵勞 超過無邊惡趣門 速到菩提究竟岸
 亦如過去無量佛 威光普照衆生界 爲被群生大導師 度脫老死令安穩
 常行布施及戒忍 精進定慧六波羅 未度有情令得度 已度之者使成佛
 我以一切仰供養 百千俱胝那由他 恒河沙數佛世尊 令我成就寂滅果
 復有十方諸佛刹 恒放光明照一切 殊勝莊嚴無等倫 願我成就刹利群品

所有無邊世界中 輪迴諸趣衆生類 速生我刹受快樂 不久俱成無上道
 願我精進恒決定 常運慈心救有情 度盡阿鼻苦衆生 所發弘誓永不斷

此の如くにして法藏比丘は最上の大願を發し無上正等正覺を成じ、
 之に依りて一切無邊世界に蠢々擾々たる諸趣の衆生を救はん事を決
 せり。方には是れ熱情中に漲り、迸ては鐵をも焦さん時、其言辭の誇張に
 して處々急激の調あるは、實に詩人の技量を見るに足る者あり。

染衣剃髮一杖一鉢の乞食比丘は光顏巍巍たる相好端嚴の佛の前に
 立つ。佛の光明は無量にして十方を遍照し、其法音無邊界に及て微妙
 の法を説き、一切を度脱し、一切衆生の渡海師大導師なり、彼は無限の光
 なり、洋々たる智海なり、眞の極、美の極なり。而して乞食僧は實に此無
 邊宏大の威神智慧を觀得し、渴仰する者、自己亦此と同じからんことを
 希求す。天下現在の不満に躍進理想界を捕捉せんとする者の意氣情
 緒盡く此雄壯華麗の光景の中に描寫せられたり。詩人が神來に接し
 て眼前髣髴の間に詩の天界を望む時も、哲學者が修得の悟道能く現象

世界の差別を超脱して靈活の本體界を觀取する時も、又宗教家が一方に群生の昏迷生死界に醜礙苦悶するを見て、慈愍の情に堪えずして、他方普曜妙樂の天國を望んで意氣熾熱なるの時も、皆此光景、金身の佛の前に比丘が急激狂熱、大弘誓を發すると同じき者あらん。

此に於て如來は比丘が熱意を喜び、之を奮激せしむる爲に八萬四千俱胝那由他の佛刹を説き、其功德莊嚴を語り來り、終に云て曰く、

善哉、善哉、汝之行願、思惟究竟、今正是時、爲衆解脫、

と。此一言簡にして短なりと雖も、讀者試に其舞臺を想像せよ。光明普照金身莊嚴の報身の如來が狂熱激發の一比丘が大發願を歎賞して、之を奮勵し之を鞭撻し、其が理想光明界の觀得に加ふるに、八萬四千俱胝那由他 *kohiṇyutaśaśarāṇi* 無量無邊の嚴淨佛刹を説き、滔々説き去りて終に今正に衆生濟度の時なるを喝破し、其衆生濟度の大任を果すべきを嚴令す、其威神儼として泰山よりも高し、恰も是れ、群臣百官綺羅殿上に連り、兵馬劍戟燦爛庭上に輝る間、天子堂を出て、節刀を將軍に

賜ふの光景。其の景物の華麗莊嚴は此の及ぶ所にあらず、而して其金佛身と破衣僧との對比は一層甚深に吾人をして其事業の鴻大と其前途の深遠を想像せしむるに足る者あり。印度詩人構想の雄大なる詢に意想の外に出づ。

將軍節刀を受けて階を下る、此一刹那、彼れの感激と感慨果して如何。今や法藏比丘は世自在王佛の報果を鑽仰して衆迷解脫の大悲願を發し、而して佛は之を激稱して今正是時爲衆解脫の一言を下せり。比丘が心情亦將に熾熱激發に破裂せんとす、即彼は重ねて衆生濟度の大悲願を宣説して曰く、

所有一切衆生及焰摩羅界三惡道中、皆生我刹、受我法化、……人天之衆、遠離諸根寂靜、……離顛倒想堅固修習、悉皆令得無上正覺、……一切皆得無邊光明而能照曜、百千俱胝那由他諸佛刹土、……我居寶刹、所有菩薩發勇猛心、運大神通、住無量無邊無數世界諸佛刹中、……身長十六由旬、得那羅延力、身相端嚴、光明照曜、善根具足、……爲諸衆生

通達法藏安立無邊一切智慧斷盡諸結悉得證成無上正覺
 我建超世願 必至無上道 斯願不滿足 誓不成等覺
 我於無量劫 不為大施主 普濟諸貧苦 誓不成等覺
 我至成佛道 名聲超十方 究竟靡不聞 誓不成等覺
 離欲深正念 淨慧修梵行 志求無上道 為諸天人師
 神力演大光 普照無際土 消除三垢冥 明濟衆厄難
 開彼智慧眼 滅此昏盲暗 閉塞諸惡道 通達善趣門
 功祚成滿足 威曜朗十方 日月戢重暉 天光隱不現
 為衆開法藏 廣施功德寶 常於大衆中 說法師子吼
 供養一切佛 具足衆德本 願慧悉成滿 得為三界尊
 如佛無量智 通達靡不遍 願我功德力 等此最勝尊
 斯願若尅果 大千應感動 虛空諸天人 當雨珍妙華
 此願說き終るや天地宇宙為に感動し天は妙華を散亂して比丘の上
 に雨らし地は震動して六合鼓動し微妙の音樂は汪洋として自然に空

中に響き、其中に聲あり。決定必成無上正覺。攝取濟度の大宇宙の偉業は此の如くにして其端緒を開けり。迷を悟に轉じ、惡を善に回へし、娑婆穢土を變じて寂光淨國となすの前途洋々たり。印度詩人の雄渾なる聲調と森大なる構想は此活劇を寫すに於て如何に其力量を現はせしかを見よ。而して此詩人の構想は詩的構想たるに止らずして實に東亞幾億の人心を感動し彼等蠢々の衆民をして其救世の洪水に浴せしめたり、今の日本の人民は如何に此構想に發したる宗教的意識に依りて其安立の地をなしつゝあるかを見よ。あはれ至る所慈光を被らしめ、光輝のある所盡く妙樂法喜を得せしむる大安慰は、法藏比丘の力なるか、將又眇たる一詩人の腦髓に發せしか。

(三十年二月)

抒情詩に於ける月

Nox erit, et coelo fulgebat luna sereno,

Inter minora sidera,

一輪の皓氷天空に懸かりては涼しきリユナ(Luna)と稱へられ、鎔銀波に落ち碎けて白玉を漣波に撒きては優しきデアナ(Diana)として歌はれし月の光。あはれ古往今來北の山にも南の磯にも、此月の光が無量の邊に不思議の幻力を逞うせしを思へば、そもリユナとは何物ぞ、人は何が故に此く迄デアナの色に酔ふか。

日暮れて更漸く老ひ、人界の喧擾死し盡して、淡き烟霞蒼白く天地を罩め、月光朧に森の梢より我を照らせり。人此境に處して誰か魂沈み神澄み恍として夢幻の境に徘徊せざらん。ゲーテが此時月に對ひて語りけん、

Füllst wieder Busch und Thal

Still mit Nebelglanz,

Löst endlich auch einmal

Meine Seele ganz;

靜かに霧の輝きもて、復汝は叢や谿間を籠め、終には又我が心をも全く融かし去る、

とは誠に此幻境に恍惚自失せる者の言なり。萬有も我も月の光に包まれては總て是れ現世世界の者にあらず。影あれど幻に似たり、聲あれどかすかに沈む。

Ich wandre durch die stille Nacht,

Da schleicht der Mond so heimlich sacht

Off aus der dunklen Wolkenhülle,

Und hin und her im Thal

Erwacht die Nachtigal,

Dann wieder alles grau und stille.

O wunderbarer Nachtgesang :
 Von fern im Land der Ströme Gang,
 Leis Schauern in den dunklen Bäumen—
 Wir'st die Gedanken mir,
 Mein irros Singen hier
 Ist wie ein Rufen nur aus Träumen. (Eichendorff, Nachts.)

夜の間さまよひあるけば、月は時々黒雲の隠れより音もせて密に
 忍び出づ、簾間には彼處此處ナハチガルの醒めたる聞こゆ、此くて
 復何物も薄暗く静になりゆく。

あはれ、くしき夜の歌、遠き彼方の邊より河水の歌さこえ、暗き樹の
 間に幽なる響きあり、吾が考へも破らる、吾が迷へる歌は此處には
 夢中の叫び聲に異ならず。(アイヘンドルフが「夜」)

Über die beglänzten Gipfel
 Fernher kommt es wie ein Grüßen,
 Flüsternd neigen sich die Wipfel,

Als ob sie sich allein wollten küssen.

Ist er so schön und milde!

Stimmen gehen durch die Nacht,
 Singen heimlich von dem Bilde—

Ach, ich bin so froh verwacht!

Plaudert nicht so laut ihr Quellen!

Wissen darf es nicht der Morgen!

In der Mondnacht lide' Wellen

Senk' ich still mein Glück und Sorgen.—

照らさるゝ頂を越えて我に言かくるに似たり、木々の梢は囁きつ
 つ傾く、己れ自ら接吻せんと思へるが如く。

歴しく柔きことよ、夜の中に聲すなり、ひそかに其光景を歌ふに似
 たり、あはれ吾が夜を送ることの嬉しさよ。

泉よ語るな、明日の日に此を知らしめじ、月の夜のやさしき波の中

に吾は静に吾が幸と慮りとを沈め去る。

(アイヘンドルフが「夜の聲」)

月光の景物は總て沈静 (Serenes, ruhig) なり幽微なり。若し事々の差別明に見え、物の活動駸々として進むを以て現世の相とすれば、月光の風物は明に現世を超越せり。周囲の事物日光に赫きて千差萬別、人の感覺知力を刺衝し、従て感動せしめ意欲を起さしむるは現實界の常態也。月光は淡き暗さの中に一切を融解して知と欲の對境を奪ひ去る、而も死灰冷燼の如くならずして暗さが中に光を藏し、淡さが中に何者か生けるあり。人の心は此間に處して表面上部に躍動せる活動を沈めて、感情の奥底獨り徐に呼吸す。月を見て心の水の澄む(林下集)とは、即ち對象なく意慾なく執着なき一般感情の狀を云へるなり。アイヘンドルフが「夜の聲」の中に

Und die Nachtigallen wie aus Träumen

Erwachen oft mit süßem Schall,

Erinnernd rührt sich in den Bäumen
Ein heimlich Flüster überall

ナハチガルは夢より醒めしが如く、甘き響もて、何處にも木々の間に思ひ出づる儘密なる囁きを觸る、

と吟じ、又「月夜」に野外の天地に

Die Luft ging durch die Felder,

Die Ähren vogten sacht,

Es rauschten leis die Wälder,

空氣は野をそよ吹きぬ、穂はそよ／＼揺きぬ、林はかすかに音しぬ、と咏ぜしが如く、月夜は何物をも沈静にし、晝の間には耳を刺激し心を動かすべき音響其物も、沈める月に澄める心には寂靜の調を加ふるの種ならぬはなし。ナハチガルも囁くなり、松風もかすかなり。若し其れ孤雁一聲天空を渡るを聞きては其聲は天界より落ち來るかと思はる。堅き地も高き天も月光には融け合ひぬ、高き山も茂き森も甘き

夢に睡れるに似たり。

Es war als hätte der Himmel

Die Erde still geküsst,

Die Berg' im Mondeschimmer

Wie in Gedanken stehn,

Und durch verworrene Trümmer

Die Quellen klagend gehen.

山々は月の光の中に思に沈める如くに立つ、散り亂れたる塊の間

を泉は訴へつゝ流る。

(アイヘンドルフ「夜」)

静なる月の光は柔和なり、朦朧なり、月は限なきをのみ見る者かはと云ひにし人は、げに月光の甘き味を吸ひし人なり、月光朧なる中に徘徊して人は一切の刺激を離れ外界生活を去りて内界生命の者となりたり、恰も幻化の界にあると同じく、又夢の世界にさまよふに同じ、此の如

きは即最も抒情的の境界なり。抒情詩人が多く月に對して内界感情の甘き流れを味ひ、恍として他界の人となりたるも此が爲なり。彼等の抒情詩中に多く静といひ幽かといひ、それとも見えす彼とも見え分かぬ世界に憧かれて、夢といひ幻と稱するは此が爲なり。沈思の詩人は常に月を詠じぬ、彼等が月光の幽なる中に最も柔和最も甘美なる者を味へばなり。霽れもせず曇りもはてぬ朧なる月夜に如く者なしと憧かれし人あるを見ずや。性質の嚴格なる詩人シルレルの如きは月を詠ぜし事なし。彼の如きは寧ろ認識の人にして感情の人にあらずればなり。

月は人に感情の生活を與へて胸中心情の奥底を誘出す。心理學者の語と借りて云はゞ、一般感情の内界的生活は識域を低下して日常生活に識域以下不識の境に彷徨する感情を意識界に現はし來ること、恰も水量減じて水底の木石現はれ來るに似たり。此を以て月光の中に幻夢の路をたどり、感情の中に何物ともなく憧るゝの人は、過にし事の

悲み悦び、一々胸中に浮び出て、一として感動感慨の種とならぬなし。
 ケーテは月に對して

Jeden Nachklang fühlt mein Herz

Froh und früher Zeit,

Wandle zwischen Freud' und Schmerz

In der Einsamkeit.

吾が心情は、浮き立ちし時、愛かりし時の餘響を一々覚え、獨りしあれば喜と傷みの間にさまよふ、と語りぬ。晝間擾々の人界に立ち交りて、彼に接し此に觸れ五官の活動止む時なく、意欲の奔逸制するに由なき時に當りては、人は殆ど現在の人間なり、過去の喜憂、高遠の感慨如何にして此現在のみの人心に起り來らんや。喧擾漸く去り、人界漸く遠く遠ざかり來りて人は始めて自己の我となり、紛々たる世間の我を脱け出て、眞の我に入る。

Das Leben draussen ist verrauscht,

Die Lichter löschen aus,
 Schauernd mein Herz am Fenster lauscher
 Still in die Nacht hinaus.

Da nun der laute Tag zerronnen
 Mit seiner Not und bunten Lust,
 Was hast du in dem Spiel gewonnen,
 Was blieb der müden Brust? —

Der Mond ist trostreich aufgegangen,
 Da unterging die Welt,
 Der Sterne heil'ge Bilder prangen
 So einsam hoch gestellt!

O Herr! auf dunkelschwankem Meere
 Fahr' ich im schwachen Boot,
 Treu folgend deinem goldenen Heere

Zum ew'gen Morgenrot.

(Eich. In der Nacht)

外に世のさがは鎮まりぬ、燈は消えぬ、窓に憑りつゝ、我が心はときめきて静に夜に憧れ出づ。

喧しき晝は其の苦み、其色多き樂と共に消え去りぬ、世の遊に何を得しか、疲れし胸に残れるは何。

月は慰をもたらしめて出てぬ、かくて世界は沈めり、星の聖なる像輝き、淋しげに空にかゝる。

主よ、黒く漂へる海の上に我は弱き小舟にて漂ふ、汝の金色の隊に従ひつつ、永遠の曙に向て。

胸に残れる心の奥に潜める感情は一に月光に誘はれ、發して喜愛交々至るの感慨となり、又轉じては静に過去を想ひ現未を考へ、想を天地人生に馳て、肅として沈思に沈ましめん。月光の人心は感情の壺に溶けたる沈思の状態なり、Contemplativの一語之を盡して餘あり。詩人

ガイベル曾て月夜海濱に逍遙して狭霧に隔てられし水天相接するの邊に落つる月の光を望み、足下に寄せ來る静けき磯の浪に耳を傾けつゝ、神昏に茫然自失して、くしき月の光が晝の我ならぬ我を作るを歌ひぬ。若し其れ現世に於て精靈の感化なる者ありとすれば、月光の中に沈思するの時は、確に此にして、鳩ならぬ月の蒼き光は其本體ならんのみ。賤が屋に精靈降る臘月とは何人の知言ぞや。月は花林を照らし、霞の如く、汀上の白砂看れども見えざるの境、誰か天地玄幽の靈に接せざる者あらんや。

心情の奥に根觸し優しき情に充ちたる此沈思の状態にありて、人の情は喜にあらず憂にあらず、感情の本質朦朧なればなり、利害以外の沈思(Uninteressirte Contemplation)意志を離れたる認識の主體(Das willenstreine Subjekt des Erkennens)なればなり。然れども感情の奥は人心生活の根柢にして、人生氣質の依て立つ所なり、其素質境遇に應じて其間に調子の異同なくんばあらず。月に對して笑ふ人はなし、月光に浴して躍る

人はなからん。笑はず躍らず、同じく沈思感觸の狀にありと雖も、或者は咽塞怨嗟涕泣せり、或者は迫らず睽かず、沈痛悲哀の中に自ら洋々たる望と玄妙の安慰を包む。

月見れば千々に物こそかなしけれ我が身ひとつの秋にはあらねど

と千々の哀情を催せし人の聲や切々たり、

Preitest über mein Gefühl

Lindernd deinen Blick,

Wie des Freundes Auge mild

Über mein Geschick.

吾が見る野の上に、優しく慰めつゝ友の眼の如く和に我が幸の上

に「汝は」汝が眼を注ぐ。

と月に對ひて語らひし心情には濃なる愛と慰の存するを見よ。若し余の見る所の狭少の觀察にして誤らざらんには、東亞の抒情詩人は月

に對して多くは悲傷憤憤の調をなし、歐洲の詩人は沈痛悲哀の中自ら寛和安舒の態度を有して惆悵の聲少きが如し。東亞の詩人は月と云へば好て満月を愛し、特に我邦にて月としいへば八月中秋の月をいへり、和歌俳句に於て月は言はずして秋の部に屬し、人は常に月に秋風鴻雁を聯想せり、此を以て其月多くは清澄皓々の月に對し、毎に想を悲傷に聯ね、從て其情は常に秋思の如く切迫に、其聲は秋虫の如く咽塞せり。歐洲の詩人は必しも月を秋に聯想せず、或は春の夜の月に憶かれ、或は戀の甘味を月下に想ひ、或は月に對して不平を訴へ、或は月光の下に天父の恩を謝するあり。新月鎌の如きを愛するあり。入る月を送りて恨たるあり、出づる月を迎へて微吟するあり。彼等の或者は月に親みて思想の友、夜の靜なるつれ合ひと呼びしすらあり。

我邦にありても古は月は必しも悲痛の情を伴なはざりき、

白露を玉になしたるなが月のありあけの月夜見れどあかぬかも

と月に樂みしもあり、

ふりさけて三日月みれば一目みし人の眉ひきおもほゆるかな

(萬葉)

と浮華の情を寓したるすらありき。蓋し太古人心の純朴なる其心情の生活尙僅かに外界の支配を受くるに止り、内界生活の活動に乏しきを以て、極めて抒情的なる月に對しても感慨を催すること少かりしならん。古今集の時代に至るも此調未だ失せず、

白雲にはねうちかはしとぶ雁の數さへ見ゆるあきの夜の月

久方の月のかつらも秋はなほもみぢすればやてりまざるらん

秋の月山べさやかにてらせるはあつる紅葉のかずを見よとか

の如き其感情の幼稚純朴にして微妙なる抒情の域に遠きを見るべし。此後にありても多くの歌人は大抵此と同一の思想を反復するに過ぎざりき。然れども支那の思想入り來り、其が月に對して秋思惆悵の觀想に接するに及びては、歌人にして此思想に打たれし者多きを加

へしが如し。特に唐詩は當時胡地に出戰する者多く、鴻雁明月に出征の夫を想ふの情、朔北廣原の月に家郷を思ふの情は、多情熱意時世に泣き人情に泣きし幾多の詩人に捕捉せられて、其詠に入り、月は益秋思惆悵の情と關聯せしに似たり。李白は

長安一片月 萬戶擣衣聲 秋風吹不盡 總是玉關情

何日平胡虜 良人罷遠征

と詠じて萬斛同情の涙を孤閨の人に注ぎぬ。秋天寒輪清くして、平原漠々千里清光の中にあるの時、徐に征衣を掠むる秋風を傳て來る胡茄胡角の蕭條淒涼の聲は、如何に多情の心緒に觸れけん。

吹笛秋山風月清 誰家巧作斷腸聲 風飄律呂相和切

月傍關山幾處明 胡騎中宵堪北走 武陵一曲想南征

故園楊柳今搖落 何得愁中却盡去

彼等の月は多く朔風の淒涼に聯り、出征の怨嗟と相關し、茲に切々咽塞の聲をなせり。

名も平安の都に背き、荒磯傳ひ福原の地に移りし後、新都の經營未だ成らず、荒寥寂寞轉た故き都の忍ばれて、秋の月を眺めんと百敷の大宮の邊り歸り見れば、何事も皆變り果て、稀に残る家は門前草深くして、庭上露しげし、蓬がそま、淺茅の原、鳥のふしども荒れはて、虫の聲々うらみつゝ、黃菊紫蘭の野邊となり果てしを見て、魂も銷え、咽ぶ琵琶の音に合せて

ふるき都に來てみれば

淺茅の原とぞあれにける

月のひかりは限なくて

秋風のみぞ身にはしむ

と詠ぜし人の情を想見せよ、殆ど邦人の月に對して悲み傷むの韻致を盡せり。而して此般の構想固より人情の自然に出づと雖も、豈些だにも支那思想の感化なしとせんや。

月に對して悵悵堪え難きの情は、佛教の無常悲觀亦與て力ありしは拒むべからざるの事實なり。東坡は佛道に於て悟達せし所ありき、而して彼は詠ずらく、

暮雲收盡益清寒

銀漢無聲轉玉盤

此生此夜不長好

明月明年何處見

而して彼は舟を赤壁に浮べ、明月大江に當りて江南江北の山川月光に包まるゝの時、古を想ひ今を嘆じ、逝く者の杳として夢の如く、大海の一粟、人生の須臾なるを悲み、無量の感慨に腸を斷ちぬ。

佛者の無常悲觀が最も吾が抒情詩人の心緒を動かせしは、蓋し落花の嘆、逝く春の傷みにてありき。而も彼等は秋月に對しても常に凄咽此情を漏らし、啾々悲傷の聲をなせり。

いづことて哀ならぬはなけれどもあれたる宿ぞ月はさみしき

(山家集)

ふくるまで詠ればこそかなしけれもひもいれし秋の夜のつき

(新古今)

ながむれば千々にも思ふ月に又わが身ひとつの峰のまつ風

(同)

秋の夜の露もくもらぬ月を見ておきどころなき我心かな

(詞 花)

特に彼等が身命の常なきを思ひて、想を月に寄せし聲を聞け、

虫の音もまれになりゆくあだし野のひとり秋なるつきのかげか

な (千 載)

秋に又あはんあはじめ知らぬ身は今宵ばかりの月をだに見ん

(詞 花)

何事もかはりのみゆく世の中におなじ影にてすめる月かな

(山 家 集)

いかで我が今宵の月を身にそへて死出の山路のひとを照らさん

(同)

鳥邊山わしの高根の末ならんけぶりをわけていづる月影

(同)

讀み來りて魂薄く氣消えなんと欲するに似たり。我邦人は月に對し

て神澄み情清さに止まらずして愛心恨々其間時に一種の怔忡を併發せる者なきにあらざるが如し、沈靜は沈鬱となり、沈鬱は鬱憂となり一種病的の怔忡をも伴生せしに似たり。

翻て歐洲の詩人を見れば、沈靜なる月を愛し、沈痛の中一種戀々の愛情を有し、傷まず怨まず。不平詩人バイロンが憤憂故國を去り、孤劍希臘の獨立軍に投ずるや、路上地中海の西の船路に月を眺めて、詠じて曰

The Moon is up; by Heaven, a lovely one!

Long streams of light o'er dancing waves expand;

Now lads on shore may sigh, and maids believe:

Such be our fate when we return to land!

.....

不平詩人尙故國と己の多幸を思へり、悵悵の中尙月に對して親めり。

右は亞弗利加、左は西班牙兩陸相對してマツリタニアの高峯月光の中に朦なり、彼は萬感胸に迫り來りて吟ずらく、

'Tis night, when Meditation bids us feel
 We once have loved, though love is at an end.
 The heart, lone mourner of its baffled zeal,
 Though friendless now, will dream it had a friend.

何等可憐の情緒を而して多涙の彼は月に對して如何にせしか、

Thus bending o'er the vessel's laving side,
 To gaze on Dian's wave-reflected sphere,
 The soul forgets her schemes of Hope and Pride,
 And flies unconscious o'er each backward year.
 None are so desolate but something dear,
 Dearer than self, possesses or possess'd
 A thought, and claims the homage of a tear;

落寞寂寥彼は泣然涕禁する能はざるの間に尙自然のチャームと語

り其内庫を伺ひて (To hold converse with Nature's charm, and view her stores unrolled) 濃厚の愛情を天然に捧げしなり。
 ゲーテは曾てフアウトに於て失望落膽のドクトルを遊惰を窓を漏れ來る月に對せしめ彼をして語らしむ。曰く

O sähest du, voller Mondenschein,
 Zum letzten Mal auf meine Pein,
 Den ich so manche Mitternacht
 An diesem Pult herangewacht;

あはれ満月の光汝が我が苦を見るも此が終なり思へば幾多の眞夜中に此机に對して守りし其月影云々。

ドクトルは知識欲の渴に堪え兼ねて魔術に入らんとし月に對して長嘆せり。燈火ほの暗き下に長髪豊髯のドクトル書冊藥品器具の中に圍まれて古きゴチックの窓より漏るゝ月光に對して此言を發す實

に是れ凄凉慘愴の極。ゲーテは曾て此の如きの月を畫きぬ。然れども彼は又曾て戀の奴なる若き男女をして月下梨樹の下に私語喃々せしめて、月の軟き光此男女を照すを寫しぬ (Hermann und Dorothea の Mel-pomene の巻)。此處の月光は「ロテアが甘し」(Süss) といひし如く詢に愛情の源泉にして又人生の柔和にして優麗なる性情を綿の如くに温く包める月なり。ゲーテは月に對して此兩極の情を畫けり、而して彼は實に月に對して此兩極の感情を併有し、凄愴の中に慰和の温さを寓せしなり。蓋し彼が神祕基督教の信仰は一種包含深遠の感情を馴致し、愛さの中にも妙樂 (Wonne in Wehnut) を味ひし彼は月に對しても複雑高遠なる情を起せしなり。月光は萬有を融解して自己亦其淡光の中に融化するの感あり、ゲーテは此に其神祕的合一の妙味を嘗めしなり。而も多情多恨なる彼は此中にありて萬感悲喜交胸に生じ、温き妙樂に依りて月光寂寥凄凉の情を接せしなり。彼が胸は月光の中に悲喜の間に彷徨し、友を想ひ、戀を想ひ、或は失戀の悲みと乾かぬ涙の甘さを感しぬ。

とを感しぬ。

Fliesse, fliesse, lieber Fluss!

Nimmer werd' ich froh;

So verrauschte Schmerz und Kuss,

Und die Treue so.

Ich besass es doch einmal,

Was so köstlich ist!

Dass man doch zu seiner Qual

Nimmer es vergisst!

流れよ流れよ、可愛の流れ、我は復浮き立つ事はあらず、戯と接吻も此く(流の潺々たる如く)過き行きぬ、加之信實も亦此く。

思へば我は此く貴き者を持ちし事ありしなり、苦しき時にも曾て之を忘れぬなり。

憂鬱の中一種の和樂を有せり、彼は尙潺々淙々たる涿水の流れに調

子を合せて歌へり、

Rausche, Fluss, das Thal entlang,

Ohne Rast und Ruh,

Rausche, flüstre meinem Gesang Melodien zu,

騒げ、流れ、谿間に沿ひて、息ひも休もなく、騒げ、我が歌に合せて歌ひ
叫け。

彼の心緒は月光に融け、谿水と共に遊べり。憂の中に喜悅あり、喜の
中に消すべからざる悲あり。彼は殆ど大宇宙と融化し、又之を攝化せ
り。宜なるかな、月に對する彼の自ら稱して妙樂 (Selig) といひしや。

アイヘンドルフは月の詩人なり、春夜月明微なるとき庭上の花漸く
開かんとするの香を想ひつゝ、鴻雁北に歸るを聞き、過ぎにし戀を想ひ
て吟ずらく、

Jauchzen möcht' ich, möchte weinen,

Ist mir's doch, als könnte's nicht sein!

Alte Wunder wieder scheinen
Mit dem Mondesglanz herein.

Und der Mond, die Sterne sagen's,

Und in Träumen rausch's der Hain,

Und die Nachtigallen schlagen's:

Sie ist deine, sie ist dein!

我は喜び歌はんと欲す、又泣かんと欲す、されど又さあるべからざる
に似たり、月の光の中に古の不思議復々胸に現れ來る。

月も、星も云ふ、夢の中なる豢も音す、ナハチカルも叫ぶ、彼女は汝が
物なり、彼女は汝が者なりと。

彼は月に對して多く此調を歌ひぬ。而して此の如き感情は獨逸詩
人の通性と稱するも敢て不可なきに似たり。泣く詩人ヘルチーは失
戀に惆悵遣る方なき時にすら、月光の中に逍遙して森影の小暗に少女
が常に坐りし椅子を求めつゝ、歌て曰く、

Dann, lieber Mond, dann nimm den Schleier wieder
 Und traur' um deinen Freund,
 Und weine durch den Wolkenflor hernieder,
 Wie dein Verlassner weint.

さらば親愛の月よさらば再び蔽紗を取り去れ取りて汝の友の爲に悲め雲の花を透して下界に泣け汝に捨てられし人が泣くが如く。

慟哭悲傷尙月を友とせり。此より三年の後(一七七五)の彼か詩は一層憂鬱の増長を示せり。彼は己の心が己に現世に死し去りしと絶叫し月の面蒼白にして憂鬱なりと叫び月は己が別れし戀人と同じく泣けるが如く観じて曰く

Wahrlich, Mond, sie blickt dich an!
 Denkt der Stunden heitiger Umarmung,
 Und du weinst vor Mitleid!

月よげに彼女は汝に對ひ聖なる抱合の時を思ひ續けん汝は同情

の爲に泣けり。

此に至りてヘルチーは東亞詩人と同しく咽塞の調をなせり而も尙怔忡の氣なし。

故中野逍遙は殆ど我邦のヘルチーなり其聲調感情の如何に彼に同じきかを見よ彼は歌へり、

願托秋天月 片々訴幽思 微風明月夜
 琴聲自遠至 聽之魂共銷

絶叫伸哀初地聲 烟月傷心渾幻夢 花風入思半痴情
 無妻頌苦樂 有弟隔幽明 哀月和吾恨 悲風吹我情

と之をクロップストックが善くこそ來つれ銀の月よ美しく靜なる夜の友汝は遁れ去るか急がされ止れ思想の友よと歌ひしに比して何等の懸隔ぞや。

同一の月光に對し同様の世界に逍遙して而も其感想此の如く異なり。彼は溫言此は唏噓彼は春夜の花香に似て此は秋天の孤雁に似たり。

り。東亞と西歐と月果して異なるか、抑も又彼の詩人は常に多幸、銷魂の種に乏しくして、我が詩人は毎に軼軻凄絶の事多きか。抑も亦彼等の信念東西其趣を異にし、彼等の理想歐亞其致を一にせざるが爲か。世の人願くは此間の問題を解釋せよ。

終に臨て月に關する抒情詩の最も余を感動せし者を録せんか、曰く張若虛の「春江花月夜」、曰くゲーテが「對月」(An den Mond)、曰くレーナウが「郵便夫」(Postillon)、余は此三詩を以て月に關する抒情詩否殆ど抒情詩全躰の三絶と稱するを敢てせん。一は春江朦朧の月に閨怨無限の情を寄せし者、一は月夜山谿に逍遙して戀人、朋友、天地に對して甚深の愛情を寓せし者、而して一は五月の靜夜月に乘じて憂鬱詩人が郊外にあくがれあるき、忽にして月夜沈々の無聲を破る郵便の胡角に、山上暮地の郵便夫を想ひつゝ、沈々たる夜に響き亘る角聲と共に凄愴の情を天地に寄せし者。今一々之を叙せず。ゲーテが「對月」の一斑は既に掲げたり、他は乞ふ各其集に就きて見よ。

(三十年三月)

鬱憂詩人の春愁

春霞たつを見すて、ゆく雁は

花なき里にすみやならへる。

古今集、伊勢

春來れば咲かざりし花も咲き出で、鳴かざりし鳥も歌ふと、古の人が歡みけん、春はげに一年陽華の時なり。笑ふ者は花のみかは、歌ふは鳥のみかは、朔風氷雪の冬を遁れて溫和軟風の陽春を迎へし、天地万物は皆熙々浮揚せり。地上の新草枯葉の間に頭を昂げては糸を垂れたる柳の緑と相笑み、花間の鳥は原頭の胡蝶と戯れ、和光薰風の中萬物踴躍し天地歡喜す。

Alles liebt und paart sich wieder,

Liebend steigt der Lenz hernieder,

Und umarmt die junge Flur.

何物も相愛し再び相伴ふ、春は愛情を注ぎつゝ降り來りて、若き野原を抱く。

新鮮快潤の春は一切を和樂にし一切を浮華にす。南風の薰せるは我民の恙を解き、春光懷に入て人皆浮動す。大宮人も羅綾の袖に花の雪を拂ひつゝ浮かれあるき、卑き賤の夫も襤褸の衣に櫻かざして跳れり、春光に浴び花に酔ひ蝶と戯れ鳥と共に歌ひ地を叩ては天に歌へり。人皆春に酔ふ、而して憂鬱の人は獨り醒む。彼等は萬象陽華の下に深奥の悲痛を認め、春光花鳥の中に三毒の苦惱を觀ず、彼等は特に此境に處して甚深の愁傷を抱く、外界の熙々浮動せるだけ彼等は落寞沈鬱なり。憂鬱性の内界は浮動發揚の外界に接して一層暗澹凄愴の情を増進す、是れ實に健康と病態とを問はず、憂鬱性なる精神の常態なりとす。

此に於て憂鬱詩人の或者は、浮揚歡樂の春に遇ひて獨り自ら自己の不遇不幸を悲み、自己の落寞を歌へり。

Alles fühlt der Liebe Segen,

Luftchen hauchen Lieb entgegen,

Alles strahlt in Liebespracht.

Nur ich Armer irr' alleine,

Bis das Mädchen das ich meine,

Mich durch Liebe glücklich macht.

何物も愛の恵みを味へり、小さき空氣も愛に對して囁き、何物も愛の華麗に輝く。只吾れのみ、憐れなる者のみ、獨り迷ふ、我が思ふ娘が愛にて吾れに幸を與ふる時迄は。

(ミツケル、春の思)

可_レ怜春還人未_レ還

双親重老隔千里

一弟留憂眠九泉

花風入思半痴情

青々猶繫李門柳

寄弔當年貞麗卿

(中野逍遙「傷春」哭花)

是皆春光の洋々却て銷魂の種を想起せしめて、悲哀の中に沈ましめし者なり。多情多恨の業平は曾て吟じて曰く

世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし
又或者は熙々の春に遇ひて直に春逝き花散し、華麗の風却て慘怛の
後景を有するを想て獨り自ら悵然たり。

(古今集)

Alle Blüte sinkt hinieden,

Grass und Menschen welken hin.

Und vielleicht mag über unsrem Grabe

Bald ein Blümlein duften und — verblüh'n.

何れの花も此處下界にては落ち去り、草も人も萎む。又恐くは遠
からずして吾等の墓の邊に、花が匂ひて……又枯れ萎みなん。

(ヒュンネル「春の歌」)

Der Schnee zerrinnt,

Der Mai beginnt,

Die Blüten keimen,

Schon auf den Bäumen,

Und Vögelschall tönt überall.

Wer weiss, wie bald

Die Glocke schallt,

Da wir des Maien

Uns nicht mehr freuen,

Wer weiss, wie bald die Glocke schallt.

雪は融け、五月は來ぬ、はや木々に花咲きそめぬ、何處にも鳥の聲す
なり。

たれか知る、いつ鐘鳴りて復た五月に得遇はずなるを。

(ヘルチ「春の歌」)

彼等は春に對して心氣性憂鬱の情を催せり、悲哀の中自ら苦悶畏怖
の情を含む。

春の日のひかりにあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき

(古今集、文屋康秀)

も、千鳥さへづる春はものごとにあらたまれども我ぞふりゆく
 の類亦實に是れなり。
 (同、讀人不知)

鬱憂の人は外界春景の浮動に適應する能はずして、獨り自ら悲痛哀
 戚の淵に沈む、此に於て彼等は勉めて不適合の外界に背かんとす。寂
 寞沈鬱は彼等の好て止住する所、濶活嬉笑は彼等の最も嫌惡忌避する
 所なり。中野逍遙は曾て帝都の春を避けて上信の間に遊び、百年多恨
 忍看花を微吟しつゝ、一感慨百八十里を踏破し來り、歸て都城の櫻花既
 に散り盡して墨堤東臺の樹下馬鞍寂寞たる處、感慨を述べて曰く、

吁吾眼昏眊日久、其不見城中之花者幸矣、不見城中之花、而反踏城外
 之春、感復如何也。

然れども鬱憂多恨の人は自ら春に背きしを知らず、却て春己を棄て
 花鳥吾に背くとす。吾が心界の沈鬱悲感に關せずして獨り嬉笑歡
 喜せる春光の天地は、鬱憂詩人の眼には最も同情なき者と映せん。同

情なき天地は己を棄て己を疎み己を虐待すと信じ、獨り自ら壅閉壅塞
 して落窶不安の中に彷徨し、外物の己に背きて歡喜せるを疾怨す。

Blumen, Vögel, duftend, singend,
 Seid doch nicht so ausgelassen,
 Ungestüm an's Herz mir dringend;
 Lasst allein mich zieh'n die Strassen!

.....
 Blumen, Vögel, rings im Haine,
 All' ihr frohen Bundesgenossen,
 Mahnt mich nicht, dass ich alleine
 Bin vom Frühling ausgeschlossen! (Lenau, Trauer)

花は薫りて鳥歌ふ、堪えぬ思ひの我がこゝろ、我をば放せ、花よ鳥、野
 路をたどらん、我れ獨り。
 花も鳥も樂しげにあたりの野邊に戯れて、顧みもせず、ひとり身を、
 春に疎まれし我をのみ。
 (レーナウ「春の悲み」)

春に遇て愁思長き鬱憂の人は終に多く春に背き春を厭ひ、而も春の己を疎外冷笑するを想ふて苦惱煩悶す。多情多涙の詩人は自ら超然として己に適應せず己に同情なく己に合はざる春の天地花鳥より、春光に酔て發揚せる俗人等を白眼視し、自ら持し自ら恃み悲壯崇高の觀想に浮世の春光を蔑視するの勇なきなり。情に弱く涙に脆き彼等は終に悵惘咽塞愁ひ且く泣き、天が己の愁思に同情して、其浮揚の風光を棄て、己を慰撫愛育せざるを怨みて此凄怨の聲をなす。

彼等既に自ら壅閉退守して悵惘憂愁し悲哀の妄想界に彷徨す、其煩惱の極は又終に自己の接する外界を觀じて一切の中に悲哀銷魂の種を見る。悲哀の眼に一切の悲哀を觀じ、苦痛の心境に宇宙の苦痛を映す。

Die Nachtigall klagt bang im Blitenschatten,

Wie um den Lieblich die verlass'ne Braut;

Der Abendstern blinkt auf die Veilchenmatten,

ナハチガルは沈み勝に花の影に訴ふ、棄てられし新婦がゆかしの人を求むる如く。夕の星は堇の草原の上に蒼く輝く。

(マツチソン「鬱憂」)

Winde hauchen hier so leise

Rätselstimmen tiefer Trauer;

Hier und dort die Blumenwaize

Zittert still im Abendsehauer. (Lenau, Asyl)

此處には、風もかすかに深き悲みの漏れ息の如くに囁く、此處彼處、花の孤は靜に、夕時雨の中に顫へり。(レーナウ「遁れ場」)

彼等が春に遇ひての愁思は、進で春の悲となり、萬有の苦となり、世界は吾れと共に病むと観ず。

秋風の蕭條、秋月の沈靜には萬人皆愁ふ。然れども鬱憂の人は其愁蕭條寂寞の外界に接するにあらずして却て己と合はざる浮揚熙熹の春日に遇て愁思長し。あはれ古往今來幾何か鬱憂の人多涙の詩人が

春に遇ひて一層の愁に沈み、甚深の恨に泣きけん。世人少しく思を沈めて彼等の心緒に感と同じくせよ。熙々たる春光の中に如何に憂愁悵悵の種あるやを見、而して此春愁傷春の中如何に甘く軟き人情微妙の味あるかを知るを得ん。

永き春日も暮れにけり、紅紫研を競ひし花も散りにけり。若緑影うす暗くしてナハチガル愁を訴へ、夏雲漸く蒸し來て杜鵑恨を吐くのは、軟柔多涙の鬱憂的精神の特に愁に堪え難きの時なり。落つる花、逝く春に對して、鬱憂詩人は如何に悵悵涕泣するか。春雨のふるは涙か、櫻花散りはて、後の若緑に愁思愈濃なるの時よ、早く來よ。

(三十年三月)

外篇第二 宗 教

世界は虚妄の世界なり、其間に起滅する千象萬化は幻術師の魔術に異ならず、眞實實在は超絶過境の梵の外一もあるなし、と論じて、幽玄深遠の彼岸を思ひ、現世の事物は一擲して顧みざりしは印度の宗教なり。宗教的妄信迷狂の國家社會を害する事多きは萬人の認る所なりとす。然れども吾人は宗教に妄信迷狂の弊ありとて直に宗教を無用とし、宗教は社會を殄滅する毒蛇なりとなす能はざるなり。人類が單に形而下物質的の生活のみを以て満足すべき者ならんには已まん、然れども人心が其正當の作用を營む以上は人に形而上需要の存するは疑ふべからざる所とす。三千歳の古にありて、吠隨の人民が風雨凄烈、黑雲空に漲り電光時に其間に閃く時には因隨羅が其敵と闘ふなりと觀じたる人神同形の天然觀は措て問はずとするも、希伯來の民をして接神神來の信仰を抱かしめ、支那の儒者をして理の極る所、心の考ふる能はざ

物質主義の宗教

*'Eγω ἐν αὐτοῖς,
καὶ συ ἐν ἐμοί,
ἵνα ὡς τετελειωμένοι εἰς ἐν.*

Joh. XVII. 23.

我れ彼等に居り、
彼等我れに居り、
此くて皆一つに
なりて完たから
ん。

約翰十七の二十三。

*Yo mān paçyati sarvatra,
sarvaṁ ca mayi paçyati,
tasya-ahaṁ na praṇaçyāmi,
sa ca me na praṇaçyati.*

Gitā VI. 30.

何れの處にも余
を見、
一切を余の中に
見る者、
其人を余は失は
ず、
又其人は余を失
はず。

神歌六の三十

る所は時に之を天道の二字に歸せしめたるは、如何に形而上的需要があらゆる人類といふ人類を驅りて、彼等を周る物質的現象以上に一大無限の存ずるを觀せしめしを見るに餘りあらん。又印度の哲學宗教が常に現象界の繫縛に對して解脱の到彼岸を以て人類究竟の目的となし、又は耶蘇教が贖罪救済を以て立教の大本となし、中世の歐洲學者が *nificatio dei* を唱道したるが如きは、皆人が此有限相對の現世を離れて、少しにても無限絶對の最上者に近づかんとするに急なるを見るべし。

若し人類が、假令暗々無識の中にたりとも、此無限者を覺知し、此に依りて救済解脱の希望を抱き、此に向て信心歸敬、以て己の心を安んずるの道となさざらんには如何。人をして常に満足を得せしめざるのみならず、殆ど何れの時にありても多數の人民をして自ら不遇と想ひ自ら數奇と觀じ、不滿不平ならしむるは社會の進行なり、一時一旦の得意満足も忽にして槿花一朝の榮に過ぎざるに至らしめ、變化法なく出沒

常なきが如く、人を翻弄し、絶望失意の波濤に漂はしむるは、人類の運命にあらずや。假令佛教者がいふ如く現世は火宅穢土ならずとするも、又厭世家が唱ふる如く、世は苦痛のみにて樂はなしとなすにあらざるも、幸福の寵兒が運命の恩澤に浴する間のみ、人生は常に綠草菜花の間、胡蝶の戯るゝが如き者にして、人の幸運快樂は永恒不變、望月の缺くる事なしと考ふるが如きは、吾人の到底許容すべき處にあらざるなり。悲曲に畫く所の悲惨の結局が深く人の情に無限の感慨を與へ、歡曲の圓圓に不如意の紛紜を脱して來る熙々たる歡樂が大に人の心に快味を起さしむるが如きは、皆人々に幾分か不遇憾柯の經驗あるに依らずんばならず。人は宗教的安心信仰なくて、いかて此の如きの世に處して、百難を排し千苦に耐へ、其なすべき處をなすを得んや。

宗教は形而上的需要より無限を覺知するに起り、困難を負擔排除するに終る。即解脱は宗教最終の目的にして、人性が自然に心靈的形而上的なるは其機關、安心立命は其方法、而して最大無限は其對象なりと

す。宗教は此故に徹頭徹尾心靈的なり、又、心靈的ならざるべからず。只人知未開の時に際しては宗教も所謂權道方便として、時に或は物質的の儀式を行ひ、或は歸敬の對象を表するに有形物を用ひざるを得ざる事あり。其低き者にては木片石塊を拜するもあらん、生物を屠り其肉其血を以て神を慰むべしとなすもあり。其進みたる者にては音樂繪畫の美を以て信仰を堅め歸敬を高めんとするもあり。皆宗教の形而上の心靈的の目的を達するに至るべき自然の階梯又は方便にして、物何れも始より圓滿完全を得、理想に違はざるを得る者なきを思は、此等は必しも俄に咎むべき者にあらざるなり。

然れども、吾人の留意すべきは宗教の理想目的は他くまで心靈的ならざるべからざるにあり。世に唯物、唯心の目あり、唯物論なる者は眼中物質的事物の外に一物なく、物質的快樂を以て唯一究竟の目的となす者なり。若し宗教を此唯物論に對せしめんには、宗教は哲學上に必しも唯心論なるを要せざるも、極力物質主義に反抗して、其の本領なる

心靈主義を擴張せざるべからず、宗教と物質主義とは氷炭相容れざる者なり。

然れども、茲に物質主義の宗教あらんには、人誰か其言辭觀念兩ながらの上に於て相矛盾せるに驚かざらんや。而して世實に此の如き宗教ありとすれば如何。此の如き宗教は宗教の資格なく、其本分を盡す能はざる者なりと斷ぜざるを得ず。

學術上の唯物論は我其宇宙の現象を説明するに物質主義のみに據らんとする者なるを知る。道德上の唯物論は人の行爲善惡を物質の上より見、肉體の快樂を崇尊する者なり。此等の唯物主義は或は理學研究の進歩を妨げ、或は人々をして自利のある所、德義、慈悲の何たるを忘れしめ、現社會を以て一種の修羅街となしたるにあり。

而して宗教上の唯物主義に至りては、其現象實にいふに忍びざる者あり。其毒害亦特に顯著猛烈なる者あり、使徒の祠前に疾病平愈を祈り、甚しきは一回の懺悔罪障を亡ぼすべしとし、幾何の喜捨金、一片の罪

障消滅狀を以て、幽府の門鎖を左右すべしと信じたる、羅馬聖教の弊風は、四百年の前既に宗教改革の怒濤に洗ひ去られぬ。一個の賤婦女優を將來りて、之を深帳の裏高壇の上に安して、幾多の信男善女其前に伏し、真理の女神、美麗の形像なりと拜したる馬鹿狂言は、遠き西歐の佛蘭西の昔なり、吾輩今更喋々此等の事を論ずるの要なし。

然るに吾人が今特に物質的宗教と稱して、敢て世に問はんとする所は何の爲ぞ。不幸にも吾邦に此思むべき恐るべき物質的宗教の存するありて、古より盛に物質主義を唱へ、其勢今に至りて衰へざる者あればなり、豈嘆すべきの至ならずや。

吾邦に於ける物質主義の宗教とは即佛教の唯物的迷信是なり。唯心的傾向の多き、過境的考察に耽りたる印度國民の中より出て、而も舊來婆羅門教の弊習を一掃せんとて起りたる、革命的洗滌的聖人なる釋迦の教が如何に末法の濁世なりとて、かく迄に宗教の本分を離れ教主の仇敵となり果てんとは、吾人の寧ろ怪疑に堪えざる處なり。然れ

ども千歳澄むことなき黄河も其濫觴の源泉に至らば清澄掬すべき者あらんと同じく、誠に已むを得ざる變遷なるか。否々吾人は佛教其者の爲には兎に角に吾邦家の爲め、吾人民の爲に大に憂ふべき者あり、決して之れを等閑に附すべからざるを見るなり。

我邦佛教の中に物質主義の起りしは其源何れの處、何れの時にあるやを知らず。其興隆の始より既に此臭味を帯びたるを見る。是れ佛教が朝廷、權門に夤緣して其隆盛を致し、榮華奢侈の貴人に弄ばれたるに因るならん。

最澄空海が傳へたる梵唄、聲明の學は魚山の松籟、律呂の溪聲に和して、七寶樹林の妙音を寫し、人心を感化したる事は大なるべく、我邦の宗教并に音樂上に慶すべき事變なりしなり。然れども悲ひかな此淨土の妙音も、其感化は浮華歡樂飽くなき貴人の耳に入りては、徒に世の無常を思はしめ、其結果、來世にも亦此世の快樂榮花を永續せんとの欲望を起さしめ、徒に寺塔の建立、經文の寫字を多くし、此功德に依りて、迦陵

頻迦歌ひ、金銀の羅網耀ける歡樂無憂の國に生れんとのみ信ぜしむるの結果を呈するに至りぬ。

印度にては議論を好み教理を争ひ、人と人と、寺と寺と盛に教儀上の議論を闘はし、時には王侯衆人の目前にて論争し、其結果或は一寺一派の興廢に關する事多かりき。此風は我邦にも傳はり、佛教の間に論判の行はれたる事も少からず。此争論や或は教理の進歩に助くる所ありしならん。然も其中の最重要と見做されたる彼の最勝講を見るに、是れ實に形式上の争論に止り、南都北嶺の所謂名僧碩徳なる者が金色燦然たる法衣を纏ひ、宮中に相見ゆるに過ぎざりしなり。彼因明を尊崇する事金玉の如くなれば、我は因明學ぶに足らずと答へ、經文中の難句を擧げて其解釋を求むれば、遁辭回避して之を斥け、凡そ此の如き見識に類する者を以て、争議を決し、教法の優劣を判じ得たりとなしたるに過ぎず。在昔提婆菩薩が市井に立ち、身命を賭して空有の議論を闘はしたると、其差果して幾何ぞ。

堂塔建築の事は藤原氏の勢盛なると共に益す興り、國分寺の造立は在昔阿育王の八萬塔を凌ぎ、十有六丈の大日佛の金像は壯大華麗、東海に耀き、遠く大唐の皇帝を驚かすに至る。其他興福、元興等無數の寺塔を建立したるは皆來世の幸福と一族一家の榮華長久を祈るが爲にあらざるなし。平安の朝に及びては文化の進歩と奢侈の進歩は益す、福社祈禱の事を盛にし、之を大にしては延暦寺、東寺、西寺の建立より、之を小にしては畿甸、六道の寺院築造は殆ど國力を擧て之に消耗し、下りて六勝寺の伽藍は東山三十六峰の麓に併立し、空を撞くの高塔は洛の中外に聳え、金碧燦爛たる寺觀は松林櫻花の間に隱見し、其壯嚴華麗誠に人の目を驚かし、又人をして此程の功德を積まば往生疑なしと思はしむるに足る者ありしならん。法成寺を興し、丈六の彌陀を安置し、奘輪の美を盡し、天下の莊田を寄せて此寺の永遠に存ぜん事を謀りしは藤氏一門祈禱の爲、阿彌陀峰の西に、今も尙京都に遊ぶ旅客の眼を第一に惹く蓮華王院の、一丁に餘る長堂を作り、身丈の佛像幾千を彫みて之に

安置せしは鳥羽法皇が親ら將來の冥福を祈らせ賜はんが爲にはあらずや。

天下災異あれば即僧侶をして讀經祈禱せしめ、國に疫病行はれ、地震海嘯の起るあり、水災、旱魃に苦しむは是れ僧侶を供養し、寺塔に布施せざるの結果、日月清明、氣候和順にして、五穀豐稔、天下に災異なきは、即布施祈禱の結果なるが如き思あるに至らしめしも、此時代にあり。貴婦人孕む事あるも即祈禱其安産を祈り、貴人疾病あれば、僧侶、驗者の類をして惡鬼を掃はしむ。人間萬事祈禱を以て願ふ所を達し、好まざる所を避くべく、祈禱の究竟は其に供する布施供養にあり。財ある者、權威ある者は思ふが儘に、僧都、阿闍梨など稱する威儀堂々たる高僧を聘して、如何なる災害、不幸をも驅逐するを得べく、實に地獄の沙汰のみならず、人間萬事財貨と威權とに歸するが如くなりしは、藤氏全盛時代の佛教なり。

佛教の物質主義、功德往生説は、寺塔建立、修驗祈禱の外に尙種々の雜

行を營ましめき。經文書寫は弘く又盛に行はれたる事にして、紺紙の上金泥もて恭しく、一部の經文を書寫すれば功德無上冥福疑なしと信じて、盛に法華、金光明等の經文を書寫し、獨り自ら有難しと歡喜する貴人幾何なりしか。終には功德積集の爲にとて一切藏經を書寫し盡したる痴人をも生ずるに至りぬ、京都に遊ぶ人は寺院に入りて其所謂寶物なる者を通覽せよ、幾多金字經卷の當時の遺物を見るを得ん。

見よ、我邦王朝時代の佛教が全く唯物的、物質主義なりしを。佛教の信者は何に依りて其宗教的安慰を得たるか、何を以て成佛の方法となしたる、堂塔の造營に非ずんば僧尼の供養布施、經文書寫に非ずんば祈禱修驗のみ、是れ皆唯物論を以て、宗教的主義となす者に非ずや。或は放生といひ、或は灌佛と稱するも、半は娛樂の上よりなすに非れば、皆此に依りて快樂幸福てふ報酬を得んとの望より出でたる唯物的快樂主義に非るなし。賢首大師が大哲心より編出したる華嚴の深奥なる哲理は南都に講ぜられたり、最澄が傳へたる一乘止觀、一念三千の妙法は

北嶺を源として洛の内外に唱へられたり。然れども此等の高妙なる教理も少数哲者の外には猶に小判と同一般にして、事々無碍融通といはゞ、一人がなしたる功德は萬人其果報を受くべしと誤られ、一念の中に十界十如を現すと聞きては、眼前に天人歡樂、地獄苛責の繪畫を浮べしならん。佛といはゞ、金色金光容貌端嚴の好男子、菩薩といはゞ細腰柳の如く天衣を風に翻す舞姫、羅漢とは是れ瘠身露肉の一乞食僧、當時の佛教者は一般に此の如き觀念を抱きしならん。彼等の間には法華八卷を誦したるも多々ありしならん、所謂御聽講の席には公達雲の如く上藹花の如く群りしならん。然れども彼等が妙法の經文より得たる所は何ぞ、又彼等が希有の法、最勝の教とて感涙に咽びしは抑何等の教なりしか。摩訶止觀に非ず、十如是に非ず、若復有人、受持讀誦解説書寫法華經乃至一句云々、是諸人等於未來世必得作佛、此の如きの句は彼等の最も喜びたる所なり。淨光莊嚴の淨土、六種震動、蓮華の遍雨、天鼓天樂の自鳴、此等の外に彼等を有難からしむべき者はなかりしなり。

浮華輕佻を棄て、眞法を聞かんとする者の如きは此時代には殆ど求むべからざりき。源氏物語に畫ける、宇治の隱遁親王の如きは固より、薰大將の如きすら、當時にありては稀有の求法者なりしならん。

世の歴史家は往々此時代の佛教を評して貴族的なりと云ふ、然れども余は斷然之を物質主義と云はんとす。物質主義なるが故に自ら快樂功利主義なり、解脱を現世功德の果に求め、成佛を永久快樂の爲めに庶幾するが如きは快樂主義、物質主義に非ずして何ぞや。此の如きの宗教は宗教の本分を忘れたる者なり、滔々たる俗僧徒に僧官位階の高下を争ひ、權門に出入して彼等の意に順ひ、宗教者の心靈的職務を盡す事をなさずして、徒に權家縉紳の欲を成さしめ、兼て自利を謀る、是れ所謂高僧阿闍梨の徒なり。此の如き信徒に弄ばれ、此の如き信者の機關に用ひらるゝ宗教は到底其病根を絶つ能はざるなり。此に於てか、革命洗滌の必要は起る。

藤氏の末葉、源平の萌芽を萌す頃に、近因は人に容れられず、世に平な

らざるが爲に、世を遁れ、麻布の緇衣に姿をやつし、一個の輕笠、一本の竹杖に身を托し、嘯風吟月六十餘州を遍歴して、生を天地の間に過したる者西行の如き者往々にして現はるゝに至りしは、其遠因を尋ねれば宗教革命的潮流の來るべき前徵にてありき。藤氏の威權地に落ち、平氏も跡を平安の京に止めず、源氏のみ鎌倉の一隅に勢を有する世となりては、人心の變動非常なる者あるに加へて、宗教洗滌の機運茲に熟し、一向專信の念佛宗も出て、妙法直入の日蓮宗も起れり。源空が黒谷の庵室に念佛を稱へたるに次ぎて、親鸞が他力往生、專信阿彌陀佛、雜行諸善亦無益を唱へたるは、實に王朝時代の物質的宗教主義を一洗して、眞に心靈的に眞に救世的なる宗教を唱へたる者なり。台嶺の反抗暴力にも關せず、此教が天下に歡迎せられ、潮の湧くが如き勢を以て四海に波及したるは決して偶然に非るなり。宗教史上の此一節、誠に三伏鑠金の夏を離れて、清風袖を掠むるの秋に入り、月明に、白露地に横る間に逍遙するの想ありといふべし。

王朝時代の物質主義なる病的宗教は此の如くにして、殆ど其生を絶ちぬ。爾來我邦の佛教は如何、特に現時に於ては如何。舊來の腐敗を一掃したる彼の親鸞宗の末流は如何。

佛教は其隆盛と物質主義と何等の宿縁あるにや、不立文字、直心入道、一切是空を唱ふる禪宗も、足利氏の尊信を得るに及びては、文字經典を貴重するは愚か、盛に法會儀式を營み、或は將軍家の爲に、時には北朝天子の爲に、其多福を祈りし事甚多きを致しぬ。黒谷の一禪房より流れ出て、聖光、善慧の二坊に依りて天下に流布せし平民的宗教も、見よ、徳川時代に入りては、純然たる物質主義の稱名功德宗となりしに非ずや。

今の明治の御代に入りては、佛教も一時は廢滅に歸せんかと訝からるゝ程に至りしも、歐化主義に對する反動と、哲學理論の流行は大に佛教の衰勢を挽回するを得るに至れり。何れの處にも維摩、碧巖の講演は開かれ、而して參聽の青年堵の如し、起信論の講義叙述は幾種か發行せられて、盡く世の歡迎を受けぬ。佛教の眞理は西洋哲學にも合へり

とか、萬法唯心の妙理はヘーゲルも三舎を避くべしとか、眞如生滅の論は絶對と相對の理を説き得て盡せりとか、曰く唯心論、曰く凡神論、何差別の平等のと、理論的、哲學的、而して屢牽強的の解釋は佛教教理の上に下され、耳新しき印度哲學の名さへ佛教の占有に歸し、吠檀多の高遠なる無宇宙論も、佛教の師傳なる僧徒の二元哲學も、吾邦にては殆ど印度哲學の名を剝奪せられたらんが如き勢あり。而して此の如き理論上の解釋研究は佛教の宗教に對して、幾何の影響を及ぼしたりや。天下六金色の旗下に集りたる雲霞の如き青年等は、維摩、起信の講演を聞き、て何の得る所ありしか。佛教の宗教は依然吳下の舊阿蒙のみ、否大に退歩したる跡を認めずんばならず。此く云へばとて、余輩は佛教哲理の眞面目の講求を不必要とするにあらず、否、天下の哲學者が擧て之が研究に身を委ね、釋迦が説きたる根本の戒律的佛教も、外國の影響を受けて印度の西北に起りたる所謂大乘佛教も、近くは支那に發達したる、華嚴、天台、禪那の諸教も皆盡く殘る限なく、研尋せられ、泰西の學者が研

究に苦む所の此廣濶なる佛教も、我日本の學者に稽査究明せられ、學術界に貢獻せられん事實に吾人の熱心に冀望する所なり。

佛教の理論釋義の問題は之れを他方に措き、宗教として、其が果して宗教の心靈的職務を盡したるや否やを見よ。衆生救濟は愚か、明治佛教の物質主義は殆ど王朝時代の物質主義をも凌駕し、人をして嘔吐を催さしむる者比々皆然り。明治佛教中最大の勢力を有し、又最も世人に望を置かるゝ者は實に眞宗なりとす、而して佛教諸派中最發達したる宗教的基本を有するも實に此一派なり。故に吾人が吾邦の宗教として意を留め、又其長短を發揮して、之れが發達改善を計るも、此一宗を主とすべきなり。此最も重んずべき、最も留意すべき眞宗は、今や益隆盛に赴き興隆の運に向ふも、其物質主義は少しも革まる所なし。

眞宗教理の中心は他力成佛なり。其他力とは即彌陀の願力なり、彌陀の願力とは即在昔法藏比丘が世自在王佛の前に大願を發し、自後超歲永劫の難行苦行に依りて得たる救濟の力なり、即衆生凡愚が自力を

用ひずして成佛し得るは法藏比丘が此贖罪的の苦行に基く者なり、是れ一箇の物質主義なり。

其他純粹の教理の上に批評すべき處甚多かるべし、其中に物質主義の存する者亦決して少なからざるべし。然れども今は其教理を批評するを目的とする者に非れば茲に之を論ぜざるべし。只讀者が眞宗の教理亦決して間然する所なき者に非るを知らるれば幸なり。

余は此より眞宗の教制、并に其一般信徒の迷信的信仰に就きて物質主義の存するを明かにし、洗滌的宗派なる親鸞宗の末流が滔々たる大江に濁流を湛ふるを示さん。

或人曾て吟じて曰く、祖宗號愚禿、子孫稱聖人、觀其日盛業、轉看貽謀教と。眞宗の教制は上人を中心とし又最上權の在る所となし、殆ど神聖犯すべからざるの觀あり、萬事の裁斷上人の貌坐より出て、聖人一たび宣言して、正教に非ずとすれば何れの新説も何れの妙論も、忽にして一門の異端視する所となり、異安心の三字は實に破門の宣言狀に同じき

効力を有するなり。彼等は親鸞以下の正流を承け其相承を傳ふる者なりといはん。其相承の何物たるやは門外漢の敢て知る所にあらざるも、心靈的の教理信仰を子々孫々に傳國の寶を授受するが如くに相續し、之に依りて教理の最上科條を定めんとするは純然たる物質主義に非ずして何ぞ。

京師元治の兵燹に罹りたる大本堂を再築するに當りて、天下幾萬の信男善女が其身の辛勞を厭はず、自己の利益快樂は盡く之を犠牲にして、之を此堂塔築造に貢獻せんとするは其信心の篤き、誠に人を感ぜしむるに足る者あり。然れども彼等は何の心を以て此舉をなすや、或は佛の恩澤に報ひん爲、若くは祖師の徳化に答へん爲なりと云はん。然れども其真相を見るに或は金額の多寡に應じて、時には法主聖人の拜謁を賜ひ、或は名號、或は祖師、中興の眞影、或は念珠、或は法服、其賜に各差異あり、信徒は少しにても金額の多く、少しにても鄭重の取扱を本山より受くるを榮譽とするなり。金員物品の淨捨に對して奇特殊勝の至

り尙法義相續云々の一受領兼勸誘状を賜はり、幾萬の本山參詣人が歸國後に誇示するやを見れば、其の淨捨する者の動機並に其受領の意志が如何に物質主義なるやを見るを得ん。

祭祀犠牲の供物を神前より下したる後に、其參列者に之を頒ち、又は之を食ひ之に依りて不死を得べしと信じたるは、印度にて古來の習慣なり。此遺信的習慣は我邦の佛教にも傳はりて、今の開明の時代にも尙盛に行はるゝなり。而も最進歩的の眞宗に於て、本山の法會に、一飯幾金の價を以て信徒に頒布せらるゝ、非時若くは佛前の供餅の片々が、百里の路を遠しとせずして、爺々婆々に歸國の土産とせられ、其見孫の間には有難涙を以て分たるゝは、是れ此古風の遺物にして、是亦純然たる物質主義に非ずや。

人己が尊敬する所の人、崇拜する所の碩學の肖像を楯間に懸けて、常に之が紀念追想の料となし、又は己が私淑する先輩の遺筆を貴重し、其徳光を追慕するが如きは、眞に人生の美德にして、深遠にして高尚なる

眞情掬すべき所ある行爲なりと信ず。况や宗教上の大徳恩人に於てをや。余は其肖像又は遺物の類を貴重するのみならず、之を尊敬し時には崇拜するをも俄に非なりとは云はず。然れども若し此肖像の類を得るに必ず某の規定に依りて畫かれ、某の約束に従て有効と認めらるゝが如き者を、其の定規約束が本山より出でたるの故を以て、直に神聖なりとするに至りては、其宗教信者のなすべき處なりや、又教化の任に當る者の坐視すべき者なりやを疑はざるべからず。獨り眞宗のみならず、其他の佛教宗派にても、佛像、祖師の畫像、或は繪卷、繪像の類より、中興若くは先徳の畫像等大小の崇拜の對象は、現今に於ては全く此の如き規約の下に立ちて、本山の收入を増すの一方となれるを視る。畫像の大小、裝飾の善否に應じて、神聖免許料を異にし、而して其免許料にて得たる允許と法主の手書の種類が、此物を神聖にし、崇拜に値するに至らしむる唯一の方法原因なるが如きは、豈物質主義の甚しき者に非ずや。

祖先を祭るも宜し、之が爲に善行を廻向する尙善し。然れども現今の佛者が死したる祖先近親の爲に廻向をなす方法動機如何を見よ。死者の爲に冥福を祈る方法は讀經に非ずんば彼の所謂施餓鬼なる者にして、幾金を投じ、幾多の僧侶を聘し、某の儀式を執行し、銅羅、妙鏡の類を鳴らし、食を散じ、水を撒じ、以て餓鬼に施し、此功德に依りて、死者の福徳を増さんと冀望するなり。又眞宗に於て最普通なるは三部妙典の讀誦なり、僧侶をして我聞如是乃至作禮而去を誦せしめば、施者は之に依りて死者の地獄にある者をも救ひ得んと信ずるなり。彼等の思想を尋求すれば、少しにても金額を多くし、儀式を鄭重にし、又は多く經を誦せしむるを以て功德多しとするにあり。此等の儀典が其教理上説明の如何に關せず、其現行の實際は全く物質主義なる事火を觀るよりも明なり。

布施を以て死者の冥福を祈るは尙恕すべし。之を以て自己往生の原料となさんとするに至りては實に甚しきの至と云ふべし。眞宗信

者の多數は實に、彼等の聖典に福德因縁を以て生れ得べき所にあらずとする、彼の西方淨土に生るゝに、彼等が開祖が堅く誠めたる物質的雜業雜修を以てせんとするに非ずや。而して自利義中の計算を離れて、此等雜行を制止せんと勉る僧侶亦決して多からざるなり、此の如く佛教の物質主義は日に月に熾ならんとす。

其他、僧侶の位階制服に關し、禮拜儀式に關し、一々現在佛教の物質主義に就きて細に列舉し來らば、其極言ふに忍びざる事をも擧げざるべからざるに至らん。然れども余輩は今好て人の惡を摘かんとするに非ず。若し右列舉したる所を以て世人に高尚なる哲理に立ち深大の理論に基くと稱する、且二千餘年來、雪山の下、黄河の濱、扶桑の東に光輝ある歴史を有する佛教も、其現在の宗教的動作に就きて見れば、彼は宗教の心靈的領域を離れて、世俗的物質的唯物的の迷區に彷徨せる者なる事を知らしむるを得れば足れり。

佛者は或は教理の上より或は經典に據りて、彼等の物質主義を回護

するならん。然れども彼等の唯物的傾向は彼等が回護の能く蔽ふ所に非ず。且つや大藏幾千卷の中より、搜索し來りて其非行の根據を、經律の中に求め得たりとするも、藏經の典證は眞理に於て何かあらん。彼等の物質的宗教は依然物質主義にして、宗教の宗教たる本能を盡せる者にあらざるなり。佛者にして早く内に自ら猛省して改むる所なくんば、彼等の宗教は到底王朝舊教の運命を免れざるべし、南都北嶺の物質主義は彼等の殷鑑なり。

此く云は、眞宗の徒は南都北嶺が念佛宗に倒されたるは、自力と他力の差異より生じ、時機相應と否との致す所なりと云はん。然り、天台、華嚴の自力修行は時機不相應なるが故に倒れ、念佛宗は時機相應なるが故に興りしなり。然れども此時機の問題は單に自力と他力の理論的關係に依りて定まりたるに非ず、要は物質主義と心靈主義との興廢に外ならざりき。見よ他力ならざるも禪宗は念佛宗と殆ど同時に掘起して、其所謂禪的趣味は天下の人心より、文學美術をも風靡したるに

非ずや。又見ずや日蓮大士は鎌倉の盛世に、房總の一隅より起り、國中の諸宗諸派を痛罵し去り、其英風は八州の野に凝りて、今尙關東平野題目の聲を聞かざる所なき隆運を維持す。而して日蓮宗は他力宗なりや將自力宗なりや。眞宗の徒は常に他力自力の目を立て、其開祖の布教を稱揚す、然れども他力と自力は末にして、物質主義と心靈主義は其本なり。眞宗興隆前の佛教が全く物質主義なりし事は先に既に記述せるが如し。物質的なるが故に信者の心靈を洗滌し其をして眞に信心安樂の境に至らしむる能はず。貴族等は此物質主義の宗教に向て自己の財富權威に依りて、其唯物的需要を充たし、此物質的方便に依りて、幾分か安心の地を得ん。一般平民の此需要要求に應ずるの力なき者に至りては如何、彼等には財貨なし、何を以てか此物質主義の宗教より、救濟安心を買ふを得んや、平民は自然の成行上無宗教無安立の民たらざるべからず。彼等が宗教に背けるに非ず、宗教彼等に背きしなり。天下幾百萬の貴族ならざる蒼生は到底之を以て安んずる能はず、

是に於て彼等不幸者の號哭に向て耳を傾け、彼等を救済し彼等を安慰すべき宗教は起らざるべからず。而して此物質上の資格なき薄命兒を救ふには、物質ならざる心靈に依らざるべからず。賢愚を問はず、學不學を措きて、萬人に共通なる者は人の精神なり、人の精神に宗教的需、形而上需要なきはなし。故に當年藤氏倒れ其信奉したりし、山門南都の物質的佛教従て其勢を失ひ、他教の乗すべき虚を生じ、之に加ふるに源平二氏遞興し、天下の人心動搖擾亂せる時に當りて、舊佛教に代り、貴族のみならず、一般人民の救済を計るべき宗教は必ずや此宗教的需、要に向て、心靈的の救済を興ふる者ならざるべからず。淨土念佛宗も此時機に相應して起り、禪那三昧宗も、日蓮題目宗も此急要に應じて生れたり。而して淨土宗の紀元に先つ六十年、叡岳の北麓、大原の幽村より融通念佛宗の起りて、上は上皇より下は洛中洛外の男女老幼を名帳結衆の中に加はらしめたるは、實に此將に來らんとする、心靈的大光明の曙光たりしを認めずんばあらず。當時天下は真正の精神的宗教の

起るを促して止まざりしの一端是に於て明に見るを得べし。

當時武士なる者は藤氏平氏に代はりて、天下を經理したる者にして頗る彼の貴公子豔華奢浮華の弊を惡む者、且つや彼等荒武者如何にして外面的諷詠に依り物質的典禮に依りて、其心を安んじ、其情を満足せしめ得んや、佛心宗の直截簡明なる悟道は、能く彼等素朴の心に向て心靈的需要を充たすを得たり。此故に鎌府以來禪は武人に安心の地を興へ、東西五山の隆なる前古比なきを致せり。上根上機は觀法觀念も然るべし、下根下機は唯信心肝要なりと絶叫したる日蓮題目宗、一念彌隨の願力に歸命したる時即成佛の時と心得よと教化し、至信信樂を行者の心得となしたる眞宗皆物質的舊教の缺を補ひ、天下雲の如き衆生を濟度するを得たり。

當時舊物質主義の舊教に代るべき者は、必しも他力宗なるを要せざりしなり。要は物質外形を離れて、衷心徹透の安慰を興ふるや否やにありしなり。故に文字を捨て、深く自心の悟徹を求めたる主觀主義も、

娑婆本來寂光の淨土に外ならざるの理を唱題但信に依りて、心中に顯現せんとしたる易行主義も、此の故に起りたり。而して他力往生を説き、超在の無限者を信ずる眞宗は此時に起り、其教理の優秀なる能く今日の隆盛を致したりといへども、若し眞宗にして他力的ならざるも、其念佛往生は能く當時に幾多の信徒を得たるなるべし、淨土時宗等其實例に非ずや。

此を以て余輩は明に、當時の宗教革命は舊教の物質主義を倒さんが爲に生れたる者にして、其興敗は物質主義と心靈主義との戦争に外ならざりしを見るを得べし。

・宗教的の革命、宗派の存亡が腐敗したる物質主義の非宗教的宗教と、新鮮の英氣を有する心靈主義の宗教との興敗に外ならざる事は、何れの國何れの時にも然らざるなし、獨り我國鎌倉時代のみに非るなり。釋迦の嚴肅なる戒律的世外教が起りたるは、娑羅門教の慘烈なる物質的苦行に對して洗滌をなさんが爲にはあらずや。近くはラ

ム、マフン、ロイが梵教會は新婆羅門の偶像的物質主義に對して、印度の人心を淨洗せんが爲に起りしにあらずや。耶蘇教と猶太教、耶蘇新教と羅馬舊教と、其他觀じ來らば、萬國の史乘は此に例證を供給して盡くるなからん。

此の如きは必然の勢にして、宗教が物質の末に走り、心靈の本を忘るるに至りては、即其癡疾起つ能はざるに至りし者にして、之に代はりて宗教の宗教たる官能を盡すべき新鮮の宗教が出て來るべきは、人類の性能上、又社會の存立上決して避くべからざるの勢とす。

印度の國を亡ぼしたる者は其宗教なり。世界を虛妄と觀じたる婆羅門教は、彼等の祖國を英國の爲に蹂躪せしめて如何ともする能はざりき。而して其が國家を亡ぼしたる所以は、其高遠の理を説く無宇宙論其者に非ずして、其流末の惡弊なる、肉體上の苦行禁欲を以て解脱の唯一原因と見たる、物質主義にてありき。

余輩が絶叫して物質主義の宗教が人生國家の爲には蟒蛇雷ならず

といふは實に此が爲なり。宗教をして真正の宗教たらしめよと喝破するも此が爲なり、豈他あらんや。

誇る勿れ、幾何の献金能く、宗教の王法爲本たる實を示したりといふなかれ、幾多の教堂説教場能く信男信女の安心を得せしむるに足ると。物質主義の上に立ち、唯物的の迷信に蔽はれたる宗教は到底宗教の本分を盡す能はざるなり。佛者よ、特に余輩が佛教中最も望を屬せざるべからざる眞宗の僧侶信徒諸氏よ、徒に偏見我執の爲に舊惡を改むを禪る事なく、速に其物質主義の惡弊を捨て、心靈的の教化を天下に宣布し、我日本國民の精神心靈をして、其國家新興の勢と共に、新鮮ならしむべし。若し徒に邪見我慢の爲に自己の大々的洗滌を行はずんば、終に自滅の不幸を招くか、若くは國家の罪人となるに至らん、佛教徒果して此言に依りて覺醒するや否や。

(廿八年四月)

邦人性格上の一大欠點

人誰か禍福の變轉に驚き命運の變化を歎せざらん。福祉を得て歎び、否運に接して悲むは人の常情のみ。然れども運命の怒濤に抗し、毅然として自己の位置を維持する事をなさず、徒に外界の變轉極なき境遇運命に翻弄せらるゝが如きは自ら自己の天職と能力を知らざる者にして、自棄の甚しき之に過ぎたるはなかるべし。人類自ら人生の當に勉むべき最高の究極目的と、又之に達すべき天賦の性能あるあり、拮据此性能を活動せしめ、自ら立つの氣象なき者は人にあらざるなり。

我日本民族古來感情に富むを以て著し。感情の激する所往々なし、難きの事を爲し、收め難きの功を收めたる事なきに非ず。我國史の花は一に我民族の感情發動に成りし者なり、其歴史の傳奇的に華麗にして、又美術的に情致あるは此が爲なり。最も感情的に熱血的なる我民族は又最も喜怒哀樂の變に富み、怒ては威嚴十萬の醜虜を退けたる大

將軍も笑ては温容稚兒をも親昵せしめたり。山なす敵陣を望みて馬蹄の塵と睥睨したる關東の荒武者も白面黛齒花の如き平家の公達を殺しては悲嘆の涙抑へ難く、黒谷の禪房に落飾して一生を念佛に送りしに非ずや。發しては千峰の雲と見まがふ吉野万朶の櫻は實に我民族の粹なる武士の理想なりき。然れども熱血的感情的なるは即ち外來の事物に感動し易きなり、運命の轉化に對して最も喜び又悲み易きなり。此に於て最も感情に富む我大和民族は又最も運命に退讓し易き人民たるに至れり。之を最も觀易きの例に見るも、一死君國に盡すの心に至りては我民族の最も他に向て誇るべき所、而も事一度意の如くならざらんか、君國の爲には千辛萬苦に耐え、再舉又再舉其目的を達せんとはせず、却て櫻花の小夜嵐に吹き散ると同じく、花々しく死して餘塵を止めざらんと勉むる者比々皆然るに非ずや。戰一度利あるや、士氣躍跳百嶮を苦とせずして敵を塵にせんとするも、事一度敗るゝや、速に死を決して一軍一族城を枕にして自盡するを名譽とす。小楠公

の四條駿に万古の恨を殘したるも此が爲のみ。鎌倉の故府が遊士をして當年の血痕を懐ひ古を忍ぶべき幾多の遺蹟を傳ふるも、此が爲に非ずや。吾人は一概に此等武夫の花々しき最後を非難せんとするに非ず、而も當年若し正行をして弟正儀の如く百難不撓事に當らしめば、南朝の行末は如何なりしかを思ひ、又尊氏をして弟直義に聽かずして徒に自盡せしめば、足利氏の天下は如何に終りしかを思はゞ、感慨轉た深からざるを得ざる者あるなり。

熱情的なる大和民族は往々にして運命に翻弄せられ、泣きては笑ひ、喜びては悲み、受動的に運命の感動を受けて激發するも、活動的に毅然不屈外來の命運に反抗し之と健闘し、以て此強敵を壓倒せん事を知らず、順境に處しては天神幸を吾に降すと謝するも、一度逆境に陥らば曲神の災厄終に免るべからずと觀じ了らんとす。喜悲轉顛順逆轉化の間に安立する所なく、從て豫言的の大希望を抱きて、浮世の波濤に對抗せんとせず、目前の禍福に目眩し心激し、爲に高大永遠彼岸の光明を望

て勇進猛憤するの氣象なし。是れ我民族性格上の一大缺點に非ずや。此性格の爲に我國家が幾何の進運を害し、幾何の強度を損するかを思はざり、國を愛ふる者の一日も黙視する能はざる所なり。

我大和民族は元來快濶暢達の氣象を有す。最古の文學に見るも、其嬉樂にして可笑の分子に富むを見るべし、洒々落々事に拘せず物に泥まず、深く憂へず甚しく悶せず。其云ふ所なす所皆な輕妙にして雅致を有せり、瀟洒輕滑能く樂み能く笑ふ、是れ我民族原始の性格なりき。

然れども原始の状態は、終に歴史の成行と外來の勢力との爲に變化を受けざるべからず。支那思想三韓を介して東漸し、之に次ぎて印度の思潮は滔々として我人心を感化刺激し、特に顯著なる痕跡を残して今日に至れり。支那の學風は極めて通俗なり、所説倫常の外に出でず、故に其影響春風の化育の如き者あり、其成果異常なる者なし。之に反して印度思想、特に盛に我邦に入り來りし印度教的の印度思想は極めて異常の者なりき。高妙遠大なる思想を傳へたと共に、又極めて深

厚異常の結果を與へたり。且隋唐以來我邦に入り來りし支那思想は皆多少印度思想の感化を受け、其風采を帯びたる者なりき。かゝれば印度思想の我人心に除くべからざる深大の印象を與へたるは怪しむに足らざるなり。

印度思潮元來の性質は如何なりしか。其我國に入り來りしは如何なる形態にてありしか。我民族古來の性格と化合して如何の成果を残したるか。

印度アールヤ人種は西より來りて、東恒河の河口を占め、南方ギンドゥヤの山脈を横斷して、コモリンの岬頭に蔓延するに至りし迄には、氣候風土の變化に絶大の影響を蒙りき。其の始、北緯卅五度の温帶地方に七河の流に羊を養ひし暢達嬉笑の印度アールヤと、後世印度洋の熱氣グールド連山の峰頭に凝て雲霧日光を遮り、淫雨連月開かず、簷頭雨滴獨聲あるとき、室内に獨坐して沈思默想世を夢幻と見たるアールヤ人種とを比し來らば、其豹變に一瞥を喫せざるべからざる者あらん。

日本に侵入したる印度思想は吠随思想にもあらず、又原始佛教純潔の德行教にもあらず。日本佛教に八宗十二宗の多きを致せしも皆龍樹を祖とし、又は彌随佛を拜せざるなし(法相を除く)。龍樹の佛教は半は是れ印度教なり、彌随佛は月氏族侵入に伴て印度に入りし神なり。然らば我邦の佛教は實に季世の印度思想なり、佛滅後少くも五百年以後の印度思潮は今日吾人が四周を圍繞せる者なり。

吠随の宗教思想は交替神教其特色をなす、吠随の諸神(Dogvali)崇拜は元光明の崇拜なり、廣濶なる蒼空の上に無限の廣袤を有する光明界は實に吠随時代の蠻民が其神位を認めたる處なり。然れとも其認めて神位とし崇拜したる光明は必しも單一の神位に非ず、曙光は烏舍師なる女神として讚嘆せられ、太陽は蘇利耶等の名を以て幾何かの神位として其作用の種々の方面を崇拜せられき。後世に至りては、驟雨電光の神なる因随羅も、暴風を表する婆樓那、マルツも皆空中の惡鬼即暗黒を追ふの光明なり。地上に於ける火なる阿姑尼も天上光明界の神位

の人界にある者として崇敬せられき。此故に此等諸神は其實體を探れば皆光明なるに係はらず、其が光明的神格の種々の方面を表するや、又各別種の神位として時に應じ宜きに從ひて崇拜せられざるべからず。此くて蠻人の崇拜は其時に應じて對象を異にすると共に、其時々に於ける崇拜の對象は其時々には最上の神位と見做されざるべからず。最上最高の神位は常住に一定せず、時に隨て常に轉換交替す、是を以て之を交替神教と稱す。

樂世的の吠随人民が交替神教的の崇拜を以て其安心を得たるは實に其濶達の氣象に因す。見よ其崇拜の圓滑に行はれ、其が誦せし讚歌の如何に和氣に富めるかを。連月雨なく人畜熱に苦しみ渴を病む時には、因随羅を呼びて黒雲油然として起り、電光其間に閃き豪雨之に伴ひ來らん事を望み、此雷神を最上の神と仰ぎ、又風威激烈に樹折け屋揚るの時に當りては風神バルジュヤを祈りて、我家畜を傷け我田園を荒す勿れといひしが如き、其一端を見るべきなり。

吠隨の交替神教は快濶なる人民の間には此の如く擲すべき可憐の情を以て、諸神の間に衝突なく、人の心中に矛盾を知らしめずして行はれたり。然れども風土の變は印度人をして冥想沈鬱の民たらしめたり。思考の進歩は多數の神位と差別的崇拜に矛盾を知らしむるに至れり、吠隨多の一元哲學は總べての差別相對を否定し唯平等なる唯一のみを以て實有と計するに至れり。然れども餘りに高遠なる思想は一般人民を満足せしむる能はず、特に對佛教策の爲に新婆羅門教には三種現躰の説を始めとし、幾多の人格的神位を新設するに至れり。阿育王以後の印度宗教は皆此崇拜より成る者之を印度教と稱す。印度教は既に太古純粹の交替神教に非ざれども、吠隨を以て無上の證典聖教とし且其交替神教的の觀念は人心の根底を去る能はず、印度教の特色には交替神教的の差別的多神崇拜をなせり。特に輪廻の信仰と因果應報の觀念との發達は、印度人をして人の禍福運命を必至的に觀せしめ、從て自ら禍福を作らんとせず、一に神力に依りて不幸を脱し厄運を

免れんとの信仰を鞏固にせしめたり。守護神司管神の觀念は此が爲に人心を風靡したり。諸天善神を拜するに各其記號と念誦の音とを造るに至れり。一災降れば此神を拜して其咒を誦し、一厄來れば彼天を祈りて其名を呼び、此の如くにして解脱幸福を求むる唯一の方法とするに至れり。事業を始めんとするやガネシヤを祈りて其知能の助力を望み、財寶を得ん爲にはクヴェラを祭り、收穫を増さんが爲には女神ラクシミーに祈請するが如きは其一例にして、印度人の祈願は皆運命時機の變轉に應じて交替神的に種々の多神を崇拜の對象となすにあり。

説きて此に至らば、印度教と我邦の佛教とが密接不可離の親和關係あるを見る事容易ならん。彌隨一佛を專信し但唱佛名に依りて成佛を得んとする顯教も決して他の佛菩薩を崇拜するを拒まず。大日説法を基本とせる密教は万有神的一切諸物を神位として崇拜し誦呪す。大黒天、歡喜天、多聞天等無數の諸天を便宜に應じて崇拜祈願する

は謂ふを待たず、虚空藏菩薩に一切知見を祈請し、觀世音には愛憐を垂れ賜へといひ、正覺を得ん爲には慈氏の出世を待つあり、其崇拜皆事に應じ時に臨みて轉換す。加之、此等諸天龍神の類より諸佛諸菩薩に至る迄皆各根本の差別を有し、各其司管する所を異にす、即是れ交替神的多神崇拜に非ずして何ぞや。

交替神的多神崇拜が佛教に依りて我邦に入るや、沈鬱なる厭世觀と宿命的の應報説とは此と共に我人心に深大の感化を與へたり。万葉の文學を考究したる者は容易に此觀念輸入の前後に於ける人心の變化を認め得ん、現世と呼ばれ現身マツミといはれし世界は空蟬ウツミと稱せられ、夢幻と觀ぜらるゝに至れり。奈良朝以後平安朝に至りては厭世觀は益長じぬ、

ねても見ゆ、ねても見えけり、大かたは

うつせみのよぞ夢にはありける。

世は夢幻なり、人は泡沫に異ならず。朝露電光に異ならぬ世に處し

て而も宿命的にして廻し難き憂苦に迫らるゝと信ずる人は、勢自ら頼むの力を失はざるべからず。邦人元來の洒落なる性質は特に特立不撓の質に乏しきに今又此虛弱なる厭世觀を以てし、又之に加ふるに貴人浮華壓くを知らざるの心を以てす。運命無常に抗するの氣象は愈益消耗し去りにき。舟を嵐峽の清流に浮べて管絃飲宴に日を暮らし、暮色花の雲を罩むるを惜みし雲客は、石山の秋の夕に天高く氣澄む時、孤水輪を天の一方に眺め、うら淋しき叢の虫の音を聞きては物の哀れを催し、涙羅綾の袖に潜然たるを止むる能はざりき。彼等は西方遼遠の淨土に生れて八功德の水を飲み、七色七光の蓮華に遊びて歡樂を盡さんと欲しては、彌陀佛の前に跪きて稱名念佛しぬ。然れども彼等若し迅風雷電に遭ひて危災眼前に迫れば、普門品を誦して觀音の慈愛を強請したり。朝に我幸福を春日龍神に謝したる者も、幸運一轉すれば、夕には大慈大悲の多聞天に參籠するの人なり。昨日迄は一念三千の妙觀に凝りし精進士も、今日は幸福の爲めには淵が瀬の辨才天を崇拜

せり。

當時佛教の感化は上流一部の外に出てざりき。而も此上流人士の信仰觀念は此の如くなりしとすれば、彼等が安立の地は如何にするも確乎不拔なるを得んや。瀾達事に泥着せず、沈思默考の風に乏しき大和民族は其崇拜にも不動の對象を得ず、運命の波濤は彼等をして飄々東岸又西岸、先には天を祈り今は地を祭るの宗教に依りて其安心の地となしたり。是に於てか、激し易きの感情は動搖止む時なく、動き易きの安心は常に運命に搖られて定る處なし、順境に處しては歡喜躍跳意氣入荒を吞むも、逆境に陥りては勇氣沮喪憂悶措く所を知らず自ら此否運を排せんと勉むるを知らざるの氣風は此の如き因に依りて益々馴致せられ愈増長したり。人心花にのみ成り行きて果は沈鬱となり、一轉して浮華となり、人民の感情信仰は投石の爲に生じたる水面の波紋の一時に深く激するも、直に消へて跡なきが如く、永劫に亘るの大希望大畫圖なく、沈勇剛毅事に動せざるの氣象なきは、是れ實に我大和民

族性格上の最大缺點なりと云はざるべからず。感情激變の甚しきは、永遠の企圖をなすに足らず、生存競争にも不利なるは云ふを待たずして明かなり。

此の如き性格の大缺點は我民族固有の氣風興りて力なきに非ず、而も其主因は之を印度思想の厭世的交替神教に歸せざるべからず。思ふに親鸞の唯信彌陀宗は、此缺點に向ては一箇の好藥劑たるを失はざるべし。然れども其感化は十分に叡岳南山の印度教的顯密兩教を壓倒して我民族の性格の上に顯著なる變化を興へず。且其彌陀佛を專信するといふも、主として極樂往生の爲にして若し現世の事物に至りては、念佛の現世利樂を説かざるに非るも、余輩は未だ之を以て不動の安立を興ふるに足るべしとは信ずる能はず、又其奏功が十分なりし事實を認むる能はず。

我民族性格上の缺點は此の如く、我宗教に因し其交替神教的の厭世觀に成りしとすれば、之が救治の策を講じ性格の革新をなさんとすれば、

先づ一般人民の信仰より着手せざるべからざらんのみ。

確立不拔なる信仰安立に依らずんば人奚ぞ運命の怒濤に抗し、昇沈泰否の變に揺かず、以て人の大能を現實にするを得んや。而して不拔の安立を興へんは、交替神教的の信仰の能する所に非ず、不變常住の基礎に立ち、專念敬虔の信仰を興ふべき宗教に非んば不可なり。

其如何なる宗教が最も我民族の性格を革新して沈毅ならしむるに足るか、之を論ぜんと欲せば、先づ運命罪惡の何たる、人世緊縛の意義を社會的并に個人的に明にし、次に宗教の此運命に抗し、又緊縛を脱するに缺くべからざるを審にし、以て如何なる宗教が此獨立と解脱をなさしむるに足るかに及ばざるべからず、此廣濶なる問題は筆を更めて更に世に問はん。

(廿八年八月)

信仰問題と歴史問題

宗教は依信に依りて立つ、依信の歸向する所の對象は其が絶對と觀じ最上と信ずる所の神格にあり。然れども人は此と共に依信歸敬の係る所を祖師先覺の教に繋がんと欲す。神に歸依し佛を崇拜せんとするも、其神其佛の果して拜すべきや否や、又虔信に値するや否や、如何の心と何等の行を以て之に對すべきや、皆一に教主祖師の教に依り、之に従はんとす。祖師は信仰の啓導者にして、又依信の憑據なり。宗教上の教導も實に此に依りて發し、心靈上の感化も祖師の人格之が主導者たる事は何れの宗派にも見る所なり。孔子の言行と教訓は如何に後代の儒者を導きたるか、日蓮の性格と行爲は如何に現今の宗徒に影響せるかを見れば、祖師の宗教に重きをなす事知るべきのみ。彌陀の弘誓が始めて釋迦の說法に依りて宣布せられ、エホバの救済が耶蘇の手を借りて傳へられしといふも實に此が爲のみ。宗徒既に重きを開祖

の上に置き、自己安立の依て立つ源を祖師の教に求めんとす、然らば彼等が聖典を解釋するに専ら其祖師の意を得んとし、正行正念一に教祖の教ふる所に背かざらんと勉め、其他儀禮敬拜の微に至る迄其古訓に遵はんとするは誠に自然の數なり。多數の宗派にありては其教主開祖たる者は事實上歴史的の人物なり、某の時代、某の國に出で、其幾十年の一生を衆生濟度、福音宣布に委ねたりといふ事歴明なる人物なり。而して其が宗徒たる者は皆、時間の上に於て、方處の上に於て、教祖と幾何の距離を有し、其間を聯ぬるに歴史的の發達事實を以てす。是に於て人心に安立を與ふべき無形にして彼岸的なる信仰問題は、時間と空間に律せられ有形の變遷に關する現世的の歴史問題と密接不離の交渉を有するに至る。

此故に宗徒が抱有する觀念信仰の正否は、其實の如何に關せず、兎にも角にも之を歴史上の傳來に溯り、之を教主聖典の教に徵せざるべからず。孔子は己が言を證するには必ず詩云書云を以てしたり、佛經は

盡く如是我聞を以て其所載眞に佛の金口より出で、誤なきを保せんとするに非ずや。婆羅門教徒が其聖典を聽聞即啓示文字 (Śruti) と記憶即著作文字 (Smṛti) に別ちて其正確の標目となしたるも此が爲のみ。傳來脈統の義、宗論の中に據しきは一に依信と祖師とが此關聯を有するに因るなり。

宗徒は其教主に背かず、彼等は思へらく、今の教は即祖師の教へし所なり、己が信仰は即祖師が抱きし信仰なり、己が行へる所、念へる所、皆祖師に戻らず、相承傳來一器の水を一器に移し來れりと。然れども奚ぞ知らん、彼等の有せる一器の水は既に幾多の年所を経、幾多の變質をなし來りし者なるを、彼等が點ずる所の一穗の燈火は既に祖師が燃せし火其者に非るを。歴史的の發達變遷は決して彼等が信ずる如き靜息不動を許さず、人文の進運、人心の變化は到底永く同一の信仰觀念を傳へ、又之に依りて誠の安立を得るを許さざるなり。人心の異なる其面の如く、其時と共に移り所と共に變ずる亦桑滄より甚しき者あり、此の

如く機根才識の異なるあり、流電石火の活動をなす人心に宿れる生命活氣ある信仰にして、豈永く一點に留り、數百年所を隔てたる祖師と信徒との間に同一の觀想を抱かしむる事あらんや。佛徒が如是我聞と號する其文字既に佛の眞意を載せ難く、特に幾譯を経たる此經文に依りて、千年の後萬里の外にありて、佛の眞意を得たりとなすは是れ空想の甚しき者なり。朱子は一に孔子に據りて言を立つ、而も其觀ぜし所孔子に異なり。約翰は専ら耶穌の福音を傳へんとせしも、其説きしは、彼が自己の哲學思想なりき。

所換り時移るに從ひ宗徒の信仰亦轉變遷移して、益す祖師と遠ざからんとす、而も宗徒は此の相距るを知らざるなり。移し移し來れる一器の水、一穗の燈は動かすに從ひ移すに從ひて變化せるも、漸々代々相傳へ相移し來りし相承者は終に之を悟らず、彼等の依信歸敬は依然として此傳統繼承に依りて、彼等が教祖の上に係れり。信仰觀念が當時の人心を満足せしめ、彼等に十分の安立を與ふる限は、此傳燈の信念は、

其事實上の確否如何に關せず、特に之を問ふを要せず、又從て之を問ふの人なきなり。然れども宗教信仰の機關は、時として、否屢腐敗に陥り易く、宗徒の道德亦墮落に傾き易し、僧侶腐敗して茲に感化の力を失ひ、德行墮落して茲に安立の基本を缺き、其極は終に不安不信據る所なく、落莫寂寥慰むる所を失ふに至らん。此の如きの状態は史上屢見ゆる所にして、之を列擧するの要なし。此時に當りても尙人心は決して宗教的安立の要求を放棄する者に非ず。信據なく安慰なければ、益安立決着を要求して止まざらんとす。此に於て安慰を求めて而も得ざる眞摯の精神は、感化力なき僧徒の説く所、敗徳の信徒が抱ける觀念に對して大に疑惑を増長せざるを得ず。既に疑惑疑問を湧起す、彼等は之を氷釋せずんば止まざるなり、而して之が氷釋の基本は之を何れの所にか求めん、教祖の教へし所、聖典の指す所の外なきは謂ふを待たず。されど今日正統の傳承を繼ぎ本流の水を汲めりと稱する僧侶の教ふる所、將た其なす所は果て彼等及自己が祖とする所の教主に違ふなき

や否や、現時自ら祖師の範に従へりと假托偽信して自ら欺ける信徒は教主の意に背戻せる事幾何ぞや、此の如きの問題は續々として此等精神の中に來らん。彼等の信仰教義に關する問題は此に於て一轉して、自己の現時と祖師の過去とを結合する事實に關する歴史問題となれるを見るべし。但此境にありて疑問の中に彷徨し安慰決着を求むる人にありては、己が信仰問題が一面にては歴史上の事實問題たるを知らざるのみ。若し其れ此時に當りて他方にありて文化教育の進歩は歴史的の精神を喚起し歴史的の探求を増進せる事あらんか、宗徒は己が信仰問題の真相に想ひ到り己が疑問と歴史問題とを結合すべきを知り、事實の利器を振て現今の不滿を醫し、歴史の教に依りて自己が奉ずる所の教義の原形真相を看破し以て自の不安を満足せしめんとす。信仰の疑問は事實の問題に依りて其勢を増し、滔々決河の勢を以て現時の非原形的狀勢を打破せんとす。是れ時の宗教が廢頽腐敗せるに對して起れる宗教改革信仰革新の運動が常に歴史問題の外装を帶び、

復古的精神を先鋒として起る所以なり。請ふ之を實例に徴せん。

世界史上最名あるルーテルの宗教改革は實に此の如きの形を以て起りし者なり。當時羅馬舊教の墮落腐敗は何人も明に認むる所、彼は人民に安慰を與へんが爲に存せず人心に畏怖を抱かしめん爲に在りしが如き觀あり。災厄行はるゝに當りて歐洲の人心は如何に疑懼恐怖の中に彷徨せしか。死は人の後に迫り病は人の前を脅かすに當りて、一般人心は如何に不隱恐慌の狀を呈したるか。死神は黒き衣を纏ひて市府山野に横行すと信ぜられたり、死の舞踏(Totentanz)黒死(Schwarzer Tod)等の題目が人口に膾炙し、畫に畫かれ、詩に歌はれしも此時代には暗中惡鬼の屋上を彷徨するを見たりといひ、畏怖耳より耳に、口より口に傳播し、人心は全く安慰を缺落したるは實に當時の狀態なりき。富者は諸靈跡を巡拜し諸聖徒に詣て、其一時の安心を買ひ得ん、金ある者は或は罪障消滅狀を購て、其罪業悔悟の苦惱の洩くするを得しな

らん、而も一般の民衆は到底真心の安靜を買ふに處なかりしなり。人は信仰を求めて止まず、心は安慰を要して益す動搖す。此時に當りて先達者慈眼を當時の憐むべく悲むべき實狀に注ぎたる者の念頭先づ思ひ到るべきは、如何にして自ら安立の地を得、又人をして各確信不動の安立を得せしめんかにあり。既に如何にして安立を得せしめんと問ふ、之に次ぎて來る問は、現時依信の本據源泉たる羅馬法王の宗教は果して原始耶蘇教の教に違ふ事なきやの疑問にあり。ルーテルが始めてウルテンベルグ寺院の門扉に貼し世に疾聲呼號したる四十餘條の告文は、實に此疑問に決定を發見し、羅馬の宗教が眞に古の耶蘇教にあらざるを看破したるに出でし者なり。故に彼が極力唱導せしは聖書を其古に回して解釋するにあり、傳説、教權を放棄するにありき。彼が羅馬法王に對する最鋭の攻撃は、法王が眞に使徒保羅の繼承者にあらざる事實にありき。彼は此論點を以つて一切の腐敗墮落を排せんとしたり。ルーテルは少くとも不識の間に信仰問題を提起するに歴

史問題を盾とせし者なり。且彼が弟子たるフラチウス(Placius)が歴史研究の結果として、今の法王は誠に古の純潔なる耶蘇教より變質墮落したる者なるを證せし一事が、如何にルーテルに確信を與へ、其事業を増進せしめたるかを思はゞ、ルーテルの改革は眞箇歴史問題と信仰問題を兼ねて起りし者なるを知るべし、否信仰問題が歴史問題に依りて成就したる者なるを見るべし。當時の信仰問題は單に信仰問題として立たず、歴史問題亦純ら歴史問題にはあらざりしなり。

其他世界史上宗教界の革新は皆此と同様の容貌を以て起らざるなし。チャンドルセンが梵教會は印度教の墮落惡弊に對して健全の信仰を呼號し、印度の古典と基督教の精神とを陶冶して起りし者なり。而して彼が依て起るの疑問とし、依て以て唱ふべき警醒の聲となせしは何物なりしか。彼は新來の基督教に負ふ所あるを拒まず、而も彼は基督教に基きて立てりとはいはず、一に吠隨の純白なる精神信仰を回復するを以て旗幟となせり。彼は稱すらく、一神教は吠隨の教ふる所な

り、早婚寡婦の酷法、壓車供血の殘忍は古婆羅門教の風に非ず、今日印度の慘狀を救ひ信仰の饑渴を醫するは只原始印度の宗教に依りて一神の教を立つるにあるのみと。センが唱へたる如く吠隨が果して此の如く一神の教を説きしか、古婆羅門教は眞に純白の道德教なりしやは措て問はず、彼れが新信仰を唱ふるに當りて復古的精神を以てし、信仰問題を解くに歴史問題を以てせしは明かなる事實に非ずや。龍樹は大乗の經典を龍宮に獲たりといひ、世親は其教を雪山の一隱者に傳はりしと稱す。彼等は小乗の教に満足せずして大乘無上の法を説かんとしたる者、而して其所説の根據は之を歴史の事實上釋迦世尊の所説なりとの一事に托せんとしたる者なり。

近くは之れを我邦の宗教史に見よ。淨土眞宗の起りしや、在來の思辨的否寧ろ物質的妄想的の顯教に満足せずして、易行唯信の教を道破したる者なるも、尙其根據は之を七祖の傳來并に三部妙典の所説に立てんと勉め、佛の正意を啓明承繼したる七高祖の事實的證明に據らん

たり。日蓮の法華題目宗亦然り、從來台教の法華解釋が釋迦の四十年にして始めて説破したる眞意を失へるを以て、其運動を起せり。

信仰問題の常に歴史問題に關聯するは誠に明白なり。二者は共に人心の不安不満が生む所の雙生兒なりといはざるべからず。

翻て之を我國宗教の狀勢に見るに、二者既に相提携し又相呼應して颯起しつゝあるを見るべし。現時の諸宗諸派が果して萬民に通じて満足なる安慰を與ふるに足れりや、識者を埃たざるも明白なる者あり。今の時は誠に信仰飢渴の時代なり、何人も既に其空腹を自覺し始めたるの時なり。特に物質的文明は人の物質的満足を増進したるに關せず、其精神的需要に對しては正反對の結果を呈せるの時にしあれば、信仰飢渴の感は愈激甚を加へんとす。況んや國民の政治的社會的進運は益人心に確乎不動の根底を要求して止まざるに於てをや。此の如く信仰安立の要求大旱の雲霓も管ならざる時に當りて、加之在來の宗教が之に對する十分の満足飽和を與へざる時に、信仰問題が提出せら

れて、何に依りて安立を得んか、何に對して歸敬を捧げんかの問題が、各個人の精神に惹起せらるゝに至りしは固より數の自然のみ。

加之、十九世紀の學術は歴史的研究を以て其旗幟となす者なり、歴史的精神の盛なるは今の時實に前古に秀でたり、信仰問題と共に既に歴史的問題の提起せられたる者あるも亦偶然にあらず。大乘非佛說論が既に旗幟堂々として提出せられ、一部人士は之を既決の問題と見做すに至れるを見ずや。又小乗と大乘との關係は諸人疑惑の間に包まらるゝにあらずや。此等は佛教に關する重大の問題なり、此等問題の提起せらるゝは既に其宗徒の間に於ける疑惑動搖の少々ならざるを證するに足る者あらん。勿論今日純粹の學術的歴史問題は無下に宗教問題と混淆する事はあらず、從て今日佛教史上の大疑問が湧起せるは、純ら信仰問題の爲に起れる事、古代の宗教に於けるが如き者にてはなく、他方にては純粹に學術研究上の要求より誘起せらるゝ事もあるべし。然れども今日の實狀を察するに、既に起れる歴史問題は單に學術

問題として出でたるに非ずして、大に宗教信仰上の關係より出でたるを認めずんばあらず。又假令始は學術研究の爲に起れりと許すも、今に至りては既に信仰問題と結合せるを見ん。大乘佛教を釋迦の所説に非ずとすれば、佛教の佛教たる所は何れにあるか、大乘佛徒の依信は何に繋ぐべきや、等の疑難は即此なるにあらずや。吾人は今日の宗教的歴史問題は一方に於ては學術探求の爲なるを認むると共に、他方にては其が信仰問題の反映なるを確信す。即今日の歴史問題は人心が宗教に對して要求する所の信仰安立に關聯して出でたる現象の一面なりとす。見よ今日佛教史の聲は最も何れの邊に高きか、革新的思想を有し自由の精神を有する信徒は即其主唱者其主導者にして、保守的頑迷なる老朽佛徒は即ち其の反對者に非ずや。此は固より西歐學術思想の影響に出でし者なるも、又真心信仰上の疑惑を抱き、在來の教義信仰并に道徳に慊然たる人々が此歴史問題を提起したるなり。

吾人熟思惟するに今日信仰問題は未だ解けざるなり、否信仰安立の

要求は愈増加し、而して在來の佛教は益現時の需要に遠からんとす。此より信仰に關する疑惑の脹膨すると同時に、教史に關する問題は、冷淡なる幾分か吾人に縁遠き大乘小乘等の區域を逸して、進んで直接に自己宗派教義の上に突入せん。換言すれば、今迄は單に教主の典據に依り、又傳説的相承に信憑して安立の基礎となしたる者も、終には此相承此典據の果して歴史的に正當なるや否や、又假令正當なりとするも、此歴史的事實は誠に吾人の依信に値し吾人の安立を與ふるに足るか、を疑ふに至るべし。然らば今後の宗教界に於ける歴史問題は事實問題の外装を脱して再び心情の域に進入し、教義の心髓を取るに至るべき運命を有する者なり。信仰問題は歴史問題を喚起し、轉々相誘て終に心情の問題とならん。特に人智の進歩は専ら前人の後塵を拜して安心する事なく、傳來を疑ひ、古説を検定し、一に自己の心情を標準として真心中情の安慰を求めずんば止まざらんとす。相承も此に至りては用なく傳來も今は益なし、人心の奥底は最終の判者とならん。歴史

的問題復古的精神は此が前程先驅として、不安不満の爲に起りし者のみ、云はゞ誠は信仰問題の器具なるのみ。見よ先に歴史問題の鋭鋒を振て起ちし耶蘇新教は、今や必しも原始耶蘇教を以て信仰の標的とはなさざるなり。彼教徒は理性の命ずる所感情の赴く所、傳來に據らず歴史に頼まず、獨立特行自己の安心を求むるなり、問題は純粹に宗教的となりしなり。

我宗教界は今後此純粹宗教問題の域に入る時あらん。此時に當りて先づ疑難若くは攻撃を蒙るべきは諸派の相承是なり。祖師以來一器相承けたりといふ法水は、天理教の神水と同一一般、真正宗教心の前には一文の價値なきに至らん。然れども其の此に至る迄には先づ今日の相承が果して祖師の眞意をよくも傳へ得たりや否やを問はん。刹那生死活潑々地の生命活氣を有する人心は到底死物に非ず、此生命の中に寓して特に生氣勃々たる理性感情は到底常住の形式的教義を以て満足し得る者に非ず。然らば當時にありて幾萬の民衆を感化し共

に安立を與へたる大偉人たる祖師其人の教も、今日にありては其儘の形状を以て昔日の勢力を有すべきに非ず。相承傳來の教權は先づ第一に其が祖師に従へりや否やの檢定を経たるの後は、直に人心進歩の爲に打破せられんのみ。教權打破の時期は尙甚近からざるべし、然れども早晚來るべきの賦命豫定を有する者なるを忘るべからず、大勢は天力なり、滔々として其行くべき所に行かんのみ。

是に於て余輩は諸宗の先達特に其教權の把持者に向て敢て望み、敢て忠言を呈せんと欲する者あり。古來宗教のみならず一切の境界に於て革命的激變の起るは一に教權の主其人が天然の大勢を願みず、人力を以て之を支障せんとし、爲に破裂決河の形勢をなすに出づ。若し先達の士をして世の進運に鑑み、人心の需要に稽へて、古來の傳説說義を固守するなく、應病與業の妙を盡さしめば、破裂的革新の不幸を見ざりしならん。昔日の革命は今日の殷鑑たり、今日諸派の教權把持者にして永く相承、而も原形の純白より變質せる相承を固守し、自ら自己が

教權の源泉たるの位置を私し、姑息の謀を以て仰信の大勢を壓抑せんか、破裂は終に來らざるべからず、異安心の一言、邪義の二字を振て、己に異なる者を打破全滅し得べしと信ずるは時勢を知らざるなり。今日は政府の力を以て異安心の徒を殄滅し得べきの時にあらず、況や相承の教權に於てをや。異安心を壓服し邪義を降伏するは一に心靈自由の力を借らざるべからず。人の理想を満足せしめ、情緒の餓飢を醫し、心情中心の安慰を與ふるの法を説かんか、誰か之に服歸せざらん。然らば諸宗諸派の先達者は宜しく、一步を自然の經過に進め、大勢天然の歸する所を考慮思察して其自勢に來るに先ちて之が先發啓導者となり、時に隨ひ勢に應し自由の福音を宣布し、不羈の人心に十分なる満足を與ふるに足らしめん計をなさざるべからず。然らんには宗教は永く宗教たるの本務を盡し、長へに正法をして天下を支配せしむるを得ん。之をなすの法は一に相承の教權を放棄し傳説の教義を離却し、自由不羈の人心に應すべき、運轉圓滑應化自在の法を立つるにあり。換

言すれば教條教規を確立固守するの愚をなさず、獨斷教義を信仰の基
本となすの妄を棄て、一に人の理性と心情に従て、而も之を啓導し敬虔
の則、道德の教を宣布するにあり。

(三十八年十二月)

眞宗及基督教の中心問題

宗教の中心は救済解脱の問題なり。即絶對の神格より離れたる有
限差別の衆生をして、絶對に歸せしめん事は宗教の第一義諦たり。諸
の宗教宗派は異種異色の神格を拜せり、千差萬別の儀式を營めり、其が
抱ける所の世界觀哲學的見解亦固より一ならず。而も救済解脱の問
題は、假令其解釋は派と共に人と共に異なるも、到底其中心として殘ら
ざるなし。光明現象の中に單一の神格を拜し、讚歌供禱に依りて神の
好意恩寵を得んと欲したる原始の天然教も、全能の天父が遣はせる神
の子に依りて宿罪の解除を得んと望む攝理の教も、詮し來れば終に是
れ宗教的主體なる有限者をして絶對の宗教的客體に歸入せしめん翹
望に出でざるなし。私利快樂の動機に出でたる蠻行醜穢の宗教も、利
他獻身の淨行を勵行する德行教も、左右支梧の苦界を脱して融通無礙
の自在境に入らん憶念に外ならず。

而して此解脱問題の解釋は即諸宗教の發達變遷する所以にして、又其適否興敗の依りて決する所なりとす。太古人心の純朴なるや、僅に讚歌供物神意を慰め其好意を博するを以て個人有限の枷鎖を脱却する方法と信じたり。或は知見を以て此問題を解釋せんとしたる哲學的宗教、或は修行を以て此希望に到達せんとしたる規律的宗教、其種一ならずと雖も、人文の開發は到底此の如きの單純なる解釋を以て満足すべくもあらず。絶對神位は至大至高なり、差別個人は薄弱微少なり。此二者の關聯は如何にしてなし得んか、又二者の合一即最終解脱は何物の力に依りて成らんか。東京と西京と相距る事百里、吾人東に立て西都をして己を引けよと呼ぶも何の益あらん、又一躍此間を行かんとするも豈得べけんや。况や神位と凡夫と其相距る東と西とのみにあらずるに於てをや。純朴の他力即神力解脱と自力即人力解脱は到底宗教的意識を満足せしむる能はず、百里を行く者は其道路に依らざるべからず、至高の神位と下劣の凡夫との間には自ら此が中間媒介

を要す。純朴の他力と自力は殆ど此中間を捨て、其兩極端を取りし者なり。此極端を捨てたる宗教的意識は、東西兩洋に於て期せずして中間の媒介を計するに至れり。教祖牟尼が寂滅の教理を奉じ、其遺法戒律に依りて安立解脱の根源となせし佛徒も、教主の死を距るに従ひては終に佛陀其の人の資格性能をも討議せざるべからざるに至りて、佛身の議論は教理の中心をなさんとするに至れり。此と共に哲學理論の發達は四諦涅槃の教の外に高遠なる眞如の論を提出し、絶對と個人との間隔は益相遠かり、愈此間の媒介たるべき人格を有する濟度者を要するに至れり。恰も好し、印度國內に發生したる化現の觀念と、西北種族の齋し來りし神話とは相合して、茲に佛三身の説明を完成せり。法藏比丘の一人物は即衆生濟度の源泉となり、其永劫修業の積集は西方淨土を報土とせる阿彌陀佛の不思議力となり、一切凡夫は即此一報身如來の不思議誓願に依りて安樂國土に往生すべしと信ずるに至れり。此教は支那を経て、我邦に十分の美果を結び、今や淨土眞宗の他力

教は其最高の開發を示せり。此教は實に人格的なる中間媒介者の他力を以て衆生解脱を解釋したる者なりとす。

基督教の興れる亦彌陀教と意義を同じくす。自己種族の最上神を唯一神格として其の恩寵を求めたるイスラエルの民も、種族の厄難已む時なく、世界の末日近きにあるを信じては、愈其罪惡の大なるを悟り、神より給はりたりといふなる律法すら、到底十分に人心安立の基本を作る能はざるに至れり。是に於てか至高の天父とイスラエルの民との間に立ちて其の祖先以來の宿罪を拂ひ、此の民を救ふの人出てん事は、國民翹望の集まる所となり、預言者の聲も農民の望も皆メシアスの出現に外ならざりき。ナザレの一豫言者の一生と其死とは、彼をして特殊の感動を其信奉者に起さしめ、ヨハネの宣傳とパウロの解説は終に彼をして猶太國民のメシアスたるのみならず、世界——猶太も希臘も——の救主たらしめたり。彼は神が人に遣はし賜へる神の子となり、神人となり、神と質を同じくすと議決せられ、彼れが十字架上の

死は萬民の罪を償へるの殉死となり、彼れが復活昇天は萬民解脱の可能を實にしたる者となれり。至大なる天父と罪多き罪人との距離は、神と人との性を兼ねたる神の子に依りて繋がれたり。

見るべし、基督の宗教と彌陀の宗教とは同一の方法見解を以て解脱の解釋をなせし者なるを。二者共に媒介者、神人の代表的行爲に依りて一切衆生の解脱を遂ぐべしとし、宗教的客體と宗教的主体との性を兼有せる中間者の他力に依りて宗教的主体を解脱せしめんとせしなり。彌陀の誓願と基督の死と其跡は異なりと雖も、其の廻向力の救ひたるは一なり。一は不思議の攝取に基き、他は天父の恩寵に出づと雖も、其の衆生以外の他力に出でたるは一なり。眞如法身と全能の天父と宗教的客體は異なりと雖も、其中間者に依りて絶対に歸入せんとするに至りては一なり。

太古の他力教は絶対の他力なりき、宗教的客體の力を以て直接に主體たる衆生に及ぼすべきものとなすに外ならず。されど一度自力の

境を過ぎて發達し來りし此二派の他力教は中間の他力なり、神人中間者の媒介に成れる他力救濟なり。今や世界の二大宗教は實に同じく此階段にあるなり、此解釋果して完全なるべきか。

彌陀の大悲願力は如何にして衆生に廻向せらるゝか。其名號は如何にして信ずる者を攝取するを得るか。單に不思議と云ひ去らば其れ迄なり、されど余輩は此至重の問題を單に不思議なる一語の咒文の中に葬りて等閑に附する能はざるなり。基督の死は何故に萬民の罪を拂ふに足るか。彼の昇天は單に一個の範例たるにはあらざるべし。其間有力なる救濟の能力具はる者なくんばならず。此能力は何に基きて生ずるか。全能なる天父の攝理恩寵、余輩は此一言を以て此問題を氷釋したりと首肯する能はざるなり。若し吾人は此問題を起すの力なく、宗教の發達又此疑點を氷釋する能はずとせば已まん、然れども二者既往の經歷と其宗義は明に既に此疑問の萌芽を含蓄し、而して退て我等精神の奥底を探れば其中には此美玉を發揮せしむるに足る者

あり。此重要問題豈研尋を経ずして已むべけんや。眞宗の徒は頻に其他力を稱して爲に衆生の方面を無視せんとす。其宗義が始め苦行修禪の自力に對して起りしを以て其反動として此の如きなるべきも、而も狼に他力を揚げて自力を抑へんとするは思はざるの甚しき者なり。若し衆生をして全く自己の本質能力なからしめんか、又其存在は全く虚妄にして一の眞實性なからんか、濟度も無用なり、解脱も不可能なり、彌陀の願力も何に向てか施し何に依りてか功を奏し得ん。衆生の方面に佛性なくば他力の方便も終に用ふるに處なからんのみ。涅槃にははずや一切衆生悉有佛性と、又華嚴にははずや事々融通無礙と、此形而上の基本ありて他力の解脱始めて解すべく又功を奏すべきのみ。衆生に佛性あり、他力の方便此に依りて人に入るべし。事々無礙なり、彌陀の願行此に於て信受の者を攝すべし、彌陀の他力は此形而上の基本を借るにあらずんば無意義のみ。淨土眞宗の彌陀教は佛性教に轉進せざるべからず。

基督救済の教亦精靈教に轉じて始めて其難關を通過し得ん。神人なる耶蘇は神と同質なりといふ然れども神と同質なる者獨り耶蘇に止るか。創世紀にいはずや、神其像の如くに人を創造り賜へり(一七)、又いはずや、エホバ神土の塵を以て人を造り、生氣を其鼻に嘘き入れたまへり、人即生靈となりぬと、然らば人亦何ぞ神に肖ざらんや。思ふに基督が神の子たるも、神人として神の靈之に宿れるが爲のみ。約翰は之を以てロゴスなりと解しぬ、ポウロは之を以て神の靈となせり。人亦神の精靈の其胸に宿れるあり、此點に於ては、何れの人か神子神人ならざらん、同じく一の靈なり(前十三)。是に於てか神子救主の讀罪亦萬民の間に其勢用を有すべきのみ。精靈の初めて結べる實を有てる我儕に非ずんば如何にして救主の贖によりて罪惡を離脱するを得べき。基督教はポウロが聖靈主義を擴張して完全の基本を得ん。基督の他力救済教は終に聖靈の自即他力教とならざるべからず。彌陀教と基督教と同一の難關に立ち且内に同一の利器を抱て之を過ぐべきの同

一運命に立てる事此の如し。然らば二者將來の轉歸亦トすべきのみ。二教の東亞の新興國に相遇ひて同一の主義に轉進せんとするは實に世界宗教史上の一大偉觀、吾人は宗教の爲又我邦の爲に大に之を祝せざるべからず。之を祝すると共に又此主義に注目して其將來の發達に對して大に爲すの覺悟なかるべからず。 (二十九年九月)

(附記、此小論に記したるキリスト教の進て向ふべき基本なる者は、三位一體の神祕に外ならず。當時余未だ此事を考へず、此を以てキリスト教の變化を必要と信じたり。今は此變化なる者が已にキリスト教の中に成就せるを見るが故に此一論は無用の論に似たれど、而も余のキリスト教に對する見解の一端を表する者として茲に撮録す。)

英雄出現の信仰と其勢力

回顧すれば吾が八九歳の頃なりけん。朝鮮に騒動ありとの報を小耳に挟み、清兵王宮に入り、大院君が血を吐けるなどの錦繪に心驚かされ、兒童等相集りては今にも朝鮮征伐起るなど噂しあひし時、我等の間に誰がいひ出せしか、朝鮮征伐起らば、加藤清正は今も尙何れかの山中に生存せるが故に、白髮の老將が三本(三叉)槍を提げて陣頭に向はんとの説は、祖國の大事を小さ胸に痛める少國民の耳より耳に傳はりて、如何に我が小さ心臓に喜悅の如く又戰慄畏敬の鼓動を嘖ちしか。其情今尙胸に印して忘れ難し。下て明治廿四年の春、吾が高等中學校の豫科に學びし時なりき、時の露國皇太子我邦に來遊せらるゝに先ちて、太子が先づ薩摩に上陸せらるゝの報あると共に、大西郷南洲は城山を免れて露國に在りしが、此度太子の來遊に伴て歸朝すべしとの風説は、堂々新聞紙にも傳へられき、二十歳に近き青年學生の間にも、全く此風説

を排斥冷笑する者は殆ど發見せざりき。愚にもつかぬ風説とは理性的に考へながら、心情の奥には何か老西郷の再現を望むが如く、此風説は眞にてあれかしなど思ひしは、人も我も同じかりき。少くとも此風説が事實となりて、瓢箪より駒の出づる事あらば如何に面白からん、或は如何に愉快ならんなどいふは、當時學生の間に行はれし談柄なりき。教育ある學生にして然り、況や當時余輩が朝鮮騒動を耳にせし位の少國民に於てをや。渴仰豫期憧憬好奇の情に充たされ、而も其中には空漠失望畏怖等反對なる感情の頭を搔ぐるあるは、英雄出現の信仰に關する人情の微妙なりとす。嗚呼此微妙の心情は如何にして生じ、又如何なる社會的勢力を有するか。今英雄出現の信仰に其心理的源泉を尋ねるに當りて、先づ出現再現信仰の事實を觀察し、併せて如何に此信仰が社會人心の實力となり、時代を動かすの原動力となり、終に信仰理想の架空的投影的英雄を事實に現せしかを明にするは、無用の業にあらざるべし。

英雄死して永く滅せずとは管に文人の言ひ草にあらず、又國危くして英雄を思ひ、家貧くして良妻を望むとは普通の人情にあらずや。英雄に對する欽仰追慕の情自ら此く思はしめ、英雄は死するも其魂魄、或は甚しきに至りては身體も其儘に何れの處にか生存せりとの信仰が民間に行はるゝ事多し。役行者が今尙英魂を金峰山に留め、其身體は處々に彷徨せりとして、白髮長髯の老翁が錫を手にし足駄を穿ちて現るゝ事ありとは、古來の信仰にて、稗史中之を材とせし者あり。弘法大師は高野の奥の院に入定して今尙其岩窟中に坐せり、故に其の光明眞言讀誦の聲が幽に奥院通夜の人の耳朶に觸るゝ事あり、又褊衣持鉢の僧として諸方に出現遊化すといふ。此等は單に説話にあらず、一部人民の間には信仰として行はれつゝあるなり。アイヌの間にて義經の再來を信ずるも此に同じ。瑞西にても其自由聯邦の創立者三人は、今尙四林處湖(或はグリトリ湖)上の一岩洞に眠り、聯邦に急あれば出現すといひ、獨逸にては、其神代の勇士ジークフリード其他の英雄はクロドゼ

グの山城に住して、國民危急の時には山を降り來るといへり。特に赤髯フリードリッヒ(Friedrich Barbarossa)が中世帝國時代の光榮を負て、今尙何れかの山中に眠り、獨逸帝國の鎮護たりとは、獨逸一船の信仰をなせりといふ。従て帝が眠れりといふ古跡處々にあり、某の山には大岩洞あり、光明常に夏日の如く、帝は其中に宮殿を有し、侍臣從騎其生時に異ならずといひ、或は帝は某の山の下、石の圓卓に憑て眠り、其髯は延びて圓卓を圍む事二周にして、尙一周すれば、帝は眠覺めて其盾を禿樹の先に掛けて下界に來らんと。此を以て十三四世紀十字軍の時には、帝が此の如くにして聖墓回復の軍に加はるべしと信じ、今も尙帝が出て來れば、獨逸帝國の光榮加はる時なりと信ずるもありと。清正再現の信仰は獨り我が邦の兒童に存するのみにあらざるを知るべし。

尙一例を擧ぐれば、此種信仰の著しくして人心を支配するの大なる事、支那の關帝信仰を最とす。關帝崇拜の山來する所極めて明瞭ならず。但關羽が先主劉備の勇將として魏吳の間に奮闘し、特に吳王孫權

を惡み、之が婚を請ふを容れず、孫權を亡すを以て終生の希望となしな
がら、不幸にして孫權の謀に敗死したりし事蹟は、弘く民衆の小説的好
奇心と心情的憐愍同情を買ひしや明なり。此を以て其英魂は永く死
せずして、某の山某の地に留れりとの信仰は、何れの頃よりか行はれけ
ん、今の民間説話に依れば、羽の死後三百餘年にして天台智者大師天台
山玉泉に止りて林間に靜坐せしに、此山の神、長髯の大丈夫となりて現
れ、大師に教を乞ひ、終に大師に歸依し、山を大師に致し、寺觀を建立して
永く天台山伽藍の守護神となりしと。其神は即ち關羽にして、其語に
「我乃關某、生於漢末、值世紛亂、九州瓜裂、曹操不仁、孫權自保、虎臣蜀主、同復
帝室、精誠激發、洞貫金玉、死有餘烈、故主此山」といひしといへば、民間の信
仰にては、山主伽藍神は即關羽なりと信ぜしなり。此信仰の起原出處
極めて不明瞭なるも、恐くは天台山にて關羽を山靈として、英魂永く伽
藍を守るべしとして奉祀せしならん。

此の如くにして、關羽の靈が鎮護し或は出現するとの信仰は、一部分

の信仰として行はれし如く、解州關聖廟の緣起世説に依れば、宋眞宗の
時(十世紀の始)關聖の出現ありしといへり。即解州の鹽田此頃惡靈蚩尤の
爲に枯らされしに依り、張天師なる巫をして荆門玉泉に鎮座せる蜀將
關某に祈らしめしに、一日黒雲鹽田の上に取り、電雷風雨あり、以後鹽田
舊に復するを得たりといへり。其より以後、宋代には關帝が出現して
人の疾苦を救ひ、正義に與して邪惡を討ちしとの説話多く現れしを見
れば、關帝出現の信仰漸く弘布せしを知るべし。其より明代に入れば、
關帝儀禮は一の宗教的儀禮として行はれ、永樂一年其廟を都城に建て、
其祠に黃龍旗を樹つるを許し、此より毎歲正旦、冬至、及朔望に之が祭祀
をなすに至りしと傳ふ。

嘉靖の頃(十六世紀)倭寇頻に支那の東岸を騷がすに當りては、關帝は國民
的災疫の守護神となり、倭寇を拒ぎ討つ軍中にて、關帝の靈が明軍を助
けしを見しといふ者屢なりしが如く、江南の沿岸には倭寇の鎮護とし
て關帝を勸請する者多かりき。其時の記事に、帝之廟盛於北而江南諸

那廟帝自今始江南古吳也といひ、帝本欲爲吳民斃賊而先斃於賊、實志以沒帝之精靈、宜其眷々於吳民矣といへるを見れば、此より以前北方には既に之を祀りしに、此頃より江南地方も亦帝を地方的守護神と仰ぎ、帝が吳民の爲に神力を以て倭寇を退くべしと信ぜしなり。

明より清の現時に至りて、關帝崇拜は益盛行し、支那人が帝を以て國民的英雄となし、決河疫癘、外寇より一家一人の禍福に至るまで皆帝の出現守護を仰ぐは、人の熟知する所なり。所謂る三界伏魔大帝神威遠震天尊顯靈英烈關聖帝君の崇拜は、英雄神靈は、何れの時、何れの處にも出現して、之に祈願するの信者崇拜者を助くべしとの信仰として、今の支那人の宗教心全體をなせりといふも過言にあらず。

支那の關帝に并て、一國民の信仰を支配せる英雄出現の信仰は、印度のヴィシヌが世の悪を平げん爲に、幾度となく人間に現はるゝとの信仰なり。ヴィシヌは元歴史上の人物にあらざるも、夙に英雄の神として崇拜せられしが、印度建國の勇士時代の英雄キリシナも此の化現なりと

いひ、東印度の武士社會に勇士の模範(吾邦の加藤清正、獨逸のロ、ランドの如く)と仰がれしラーマも亦此神なりとせられ、而して此英雄神は屢人間に現れて人類其他信者善人を救ふべしとは、今尙印度人全般の信仰を支配せり。故に彼等の間に宗教の教師にして徳化四方に及ぶ者あれば、其人は多くヴィシヌ化現の一なりと稱せられ、又將來にも此類の化現出現する事ありと信ぜり。民間の或説話に、或時一白象が河を渡りしに、鱷が水中にて其足に噛みつき、如何ともするに由なかりしかば、象は河水の逆華を其吻頭にて取り、之をヴィシヌに捧げしに、神は忽ち空中に現れ、鱷魚を討滅しぬと。無邪氣なる英雄出現の信仰が弘く民間に行はるゝの一端を見るべし。

英雄再現の信仰は民間宗教の一大勢力たるは此等の事例にても明なり。而も此の如きは獨り民間宗教といひ、或は迷信雜信といふ者の中に存するのみにあらず、世界の最大宗教といへる佛教及基督教の如きも、此信仰を有し、特に基督教の如きは此信仰を源頭として起りし宗

教なり。

釋迦が佛隨教主として五十年の教化說法を終りて長逝せしに當りて、彼は元より神力奇蹟を以て弟子を化せしにあらざるも、彼が覺者世尊として弟子に對するや、尋常一様師弟の關係にあらざりき。此を以て弟子は、渡場に船を失ひ、日中に太陽に離れ、道中に眼を失ひし感を抱きて其死を悲みぬ、此を以て彼等は師主佛隨の感化を其遺教に求め、其追慕を遺骨の崇拜に發表したり。勢此の如くなるを以て其時既に多少逝きし佛身の再現を望みしに似て、其大弟子たる迦葉が佛臨滅の時他出中なりしが、滅後歸來して佛の雙足を拜したりといひ、後世の傳説(大乘の涅槃經にあり)には、此時佛は金光の身を現じて說法したりといへり。然れども佛弟子の中には佛の再現を見たりし人もなかりしと見え、如來は死して後も其本躰ありやなしやといふは、問題として暫くは佛教信仰に一動力たりき。此の如き疑問と再現の希望とは終に相合して、釋迦佛の後には慈愛ある慈氏といふ佛即彌勒佛の出現ある

べしとの信仰憧憬となりぬ。即佛教中の傳説に據れば、優曇華といふは華なき木なるに其華開く事あれば、則其時は佛の出現あるべしといひ、或は釋迦死後千歲中にて慈氏の誕生あるべしといひ、又は十五億七千六十萬歳の後にありともいへり。此に於て釋迦第一の高弟迦葉は此慈氏佛の出世に値はん爲に鷄足山中の一洞に隠れ、今も尙此中にあるといひ、又は日本にて源光阿闍梨は遠州櫻が池に身を投じて龍となり、龍壽を保ちて慈氏の出現を待てりといふ如き説話をも生じぬ。其外日本の諺にも難有き事うれしき事の譬には、彌勒の出世に粟餅といへるが如き、若くは悲しき事憂ふべき時の抒情には、前佛(釋迦)既に去て後佛(彌勒)未だ世に出でずとの常套を用ふるが如き、皆慈氏出現若くは佛隨再現の希望或は信仰が佛者の間に一勢力として、印度より日本にも及べるを見るべし。西曆四世紀の南印度建築に、信者が舍利塔を禮拜せる所に、佛身が現れ出でたる彫刻あるを見れば、其頃には釋迦再現の信仰も行はれしなるべし。

基督に至りては、其教化の短く、其最後の悲壯なりしだけ、其れだけ弟子等の中には基督再現の熱望盛なりき、彼等は恰も牧者を失ひし羊群の如く、主メシアスの死後は如何にして救はれんかを愛へ、基督が再び生き來りて己等を嚮導せん事を渴望し、又其教敵は基督を戮して、彼が自ら死を救ふ能はざるを嘲りしかば、弟子等が主の再現を翹望するや、尋常一様の感動にあらざりき。且猶太の傳説として、救主聖者は死して後蘇生すべしと傳へ、其墓は其儘にて朽ちずといふなどの事ありしかば、此等の傳説豫言は弟子の渴仰を助けて、死後間もなく基督の出現即靈が現れて遺弟に説法したりとの信仰を生じぬ。即七日目にマクダラのマリア其他の婦人之を墓上に見るあり。其靈は彼等に再びガラリアに現るゝを告げて、又其十一弟子の前に現れ、彼等に「一切の國に福音を傳へよ世の終まで我は常に汝等と共にあらんと告げたりといひ、終には祭日に弟子たち數多集れる處に出現せりと傳ふ。其後ポロの如き、一度は基督の徒に仇せしも、後終に其靈が沙漠の天空の光と

して現れしを見てより、基督は己れに福音宣傳の任を命じぬと信じ、自ら其の使徒たるに至れり。以て當時救主再現の信仰渴望が如何に一般人心に感動動搖を興へ、英雄再現の甘く慕はしき夢に耽らしめしかを知るべし。

基督再現の信仰は此より一大宗教の源となり、神の子救主となりて福音の主とならんとすの豫言傳説は、皆此人の人格に凝集して、其一生は即神子が、其肉の形を殺す事に依りて人の罪を贖ひ、其靈を復活する事に依りて精神の救はるゝ實を示したる者と解釋せられぬ。二千年來世界の大半を支配せし大宗教は、其源實に此の如き英雄再現の信仰に發せしなり。此の如き事は、或一派の論者に云はしむれば、迷信空想取るに足らぬといふべけれど、空にせよ妄にせよ、此信仰なる心理的事實は人心の一大勢力として、此の如き宏大なる歴史的事實偉大なる感化の跡を示せしなり。蜃氣樓其物は空なりとも、其が發するは何か實在の根底ありとすれば、此一大蜃氣樓も亦單に空なり迷なりとて貶し去る

べきにあらず、其の由來經過を尋ねて、之が勢力感化の歴史を闡明せざるべからず。此等の研究は今此處に詳述せざるも、要は此信仰渴望が兎に角人心信仰の大勢力たりしを認むれば足れり。

基督再現の信仰は、基督教なる一大感化力の基を開きしも、尙一層其源に溯れば、此の如き信仰が基督の人物に附着し來り、彼が神の子人の罪を救ふ者と信ぜられ、大工の子にして猶太の王メシアたるよりも一層偉大なる救主と仰がるゝに至りしは、其因て來る所の悠遠なるを見る。即猶太民族の中には、其國民の運命が悲酸艱難の多かりしに係らず、其中に王者の後裔にして國民を救ひ、其守護神たるエホワの榮光を宣揚する英雄出て來らんと希望否確信行はれたりき。而して此豫言的憧憬希望的理想は、國民の否運、社會の廢頹に關せず、綿々人心の根底に潜める福音、希望の奥を照らせる光明として存し、如何なる困厄に遭ふも、如何に暴雄に虐待せらるゝも、民族擧りて他國に囚虜となるも、此希望確信は變らず、己等が神に忠に其命令法律を固守して正義に

背かざる限は、主神エホワは何時かは民族の榮光を輝かしむべしとの豫言的確信は、多くの豫言者即正義光榮の鼓舞者に依りて鼓吹せられ、終には一大英雄の現れて神の子として民を救ふべしとの默示は、屢其信界に現れぬ。基督の人物が神の子人の救主となりしは、實に此豫言的希望理想的確信の結晶したる者に外ならず。今余は此豫言の歴史につきては、叙述を省略すれども、此の如き泰否消長に動かず、境遇變遷に驚かず、確く信じ、熱く望み、忍耐して摯實にメシアス救主の觀念を鍛練開導して、終に之が結晶的人物を誘ひ出だし、屢氣樓を實物に化し、了りし熱誠不動に至りては、吾人の頗る敬服すべき所なるを大呼せん。

余輩は必しも釋迦の出現を待たず、メシアス出現の信仰に倣へとはいはず、又固より加藤清正の再來あるを信ぜず。只英雄渴仰の情は人の道徳的性格の最も天真なる發表にして、英雄の出現或は再現を望むは英雄崇拜の最も切實なる發表なるを見るなり。凡そ人は各自斷片的に英雄にして、其性格の一片一隅或は其奥底には何人も自家の長處

俊出の資を抱かざるなし。且人は同じく人類として、互に同情し互に其特長品性を敬慕し得べく、英雄俊傑と雖も、其が人類たる限に於ては、吾人亦之が意思性格を領會して其性格に同情し、又場合によりては、之が模倣を企つべし。是れ皆英雄渴仰が人心自然の性なる所以、又其が道徳上人々の性格を完成し品性を涵養するの要具たる所以なり。加之人は此の如く人として英雄を渴仰し把持し得るのみならず、既に國民社會の一員として時代時勢の子として生存するが故に、其國民の英雄過去の英雄につきて特に敬慕渴仰を注ぎ易く、從て自己時勢の傾向を察して、如何なる英雄が其時代社會に必須なるかを憧憬若くは考察し、終に某英雄の再來を翹足し、或は理想的英雄の出現を熱望企圖すべし。是れ英雄の再來出現が常に社會人心の一大原動力となりつゝある所以にあらずや。而して此希望は必しも空想にあらず、希望者の性格にして堅實堅固ならんには、終に所期の英雄をして出現せしむる時勢を作り出だし、若くは希望は希望を鼓吹奨勵して、一浪は一浪より高

く終に社會の大潮流たらしめて、英雄の出現を促す事あるべく、若くは又自ら終に其理想の英雄として終に渴仰を事實に轉ずる事もあり得べし。望が實となると否とは、其熱望憧憬の如何に依屬す。社會の隆否は一に人意理想の消長に係るの眞理を知らば、英雄出現の信仰が決して徒爾にして終らざるを知るに足らん。

世に理想を嘲り天職を空想と貶するの徒あり。彼等は理想天職を以て空に浮きたる者、所謂棚より牡丹餅的の希望となすの外、人意の固守執着が如何に人事を支配し、理想の自覺、天職の自信が如何に眞に天職を地上の者となし、理想を現實となし得るかを知らざるなり。余輩は斷言す、理想天職の自覺は、國民としても個人としても、人心生命の依て係る所の中心契機なり。人既に英雄を渴仰するの性格資性を有し、其再來或は出現を憧憬熱望するの素質傾向を有す、之を導き之を開發して、人々をして單に英雄の渴仰崇拜に終らず、自ら之が資性を開發せしめ、英雄の出現を翹足するのみならず、自ら之が出現を促し、又之れに

當るの努力をなさしむるは、人の天性を將て之が十分の天職を盡さしむる所以にあらずや。人々にして他人に對しても此覺悟を有し、自己も此自覺努力あらしめば、朝鮮騒動に三本槍の老將が山中より出て來るを望みし少國民の中より、眞に加藤清正を作り出だし、老西郷の歸來を待ちあこがれたる社會時代の中より、誠に第二の老否少壯有爲なる南洲を生ずるは、決して期し難き事にあらざるなり。

(三十二年七月)

我邦の英雄崇拜と倫理修養

人多く我邦人の宗教心に乏しきをいふ。所謂宗教心は只天上の神父を信ずるにありとし、若くは教會の信條に拘泥して他教徒を排斥するの熱情を以て、宗教心の唯一の發表となせば、日本人の宗教心に富まざるは明なり。而も若し人心が自己以上の勢力を憧憬渴仰して、特に人間の中に其崇拜渴仰の對象を求むる英雄崇拜をしも宗教となすべくんば、日本人は恐くは東亞一般に利益祈禱の宗教多き中にありて、最も眞摯なる英雄崇拜の人民と稱するを得べし。所謂る宗教の名義如何は暫く措きて、我邦の宗教が種々の方面を有し、或は加持祈禱の修法オッコルチズムに、或は念佛題目の熱情に、或は登山拜日の清淨表象儀禮に、多く咒法的儀禮宗教を發達したるも、其根本の最大特徴は英雄崇拜と祖先崇拜との合一に成りし者にして、其宗教が何れの發表方面に於ても、常に人間渴仰の風に富めるは頗る顯著なる者あり。皇太神はい

ふに及ばず、諸氏族の氏神より以下、天神といひ、諏訪明神といひ、其性徳の如何に係らず、皆人間の神として其神徳を仰がれし者なり。此を以て孔子を大聖とする儒教は最も我邦に歓迎せられ、佛教の如きも亦釋迦様なる聖人の崇拜、お祖師様なる豪傑の渴仰として、最も多く勢力を呈するを見る。

蓋し英雄崇拜は宗教心の最も道德的人間的に發表したる者にして、其が崇拜する所の英雄は其國民性格の反映なれば、之を活用利導せば其人格理想は國民道德の一養源、倫理教化の一勢力たらしむべし。國民性格の理想として投影したる英雄は、又國民性格の良陶冶者にして、其崇拜に現はるゝ眞摯なる性情は、之を啓發して道德宗教の向上路に至らしむべければなり。

英雄は固より國民の主觀的產物、投影たるに止まらず、其事實上の人物は誠に俊傑人に秀でたるの資なりと雖も、其人物は其國民時代を離れて空虚に遊離せる夢にあらずして、國民的性格其根底をなし、歴史其

因縁をなし、時代は其事業をなさしめて、茲に其偉業あり、他の碌々たる無数の民衆が益々平凡の一生を送る間に、英雄俊傑が獨り一世に擢てて偉業を奏し、國民の歴史に人格的勢力を及ぼすは、其人の根本性格若くは所謂天賦の人品が、國民の性情を代表提撕し、時代人心を啓發指導するに足る者あるに因る。英雄に此の素質と偉功とあり、人民には其徳に歸し其人を仰ぎ、神的人若くは神の人化として之を崇拜するの性情あり、此に於てか英雄崇拜起りて一般人心感化の大勢力となり、倫理教化の一要具となる。英雄崇拜は道德、宗教、教育に亘りたる大題目にして、特に我邦の如き此崇拜に富める國民の倫理問題に關しては、必や此問題に關して十分の批評研究なかるべからず。且余輩の見る所に依れば、道德的教化の中心は人格の内容を豊富にし、性格の發動をして時代社會の必要に適應せしめ、從て社會的個人的活動の増進進歩を促すにあり。恰も英雄は俊傑なる人格の最も能く自個を發現し、時代を幫助したる者なれば、其性格の尊崇を喚起する英雄崇拜の人情は道

徳的教化の大要具たるは、今更の喋々を要せざるべし。

然れども翻て諸國の宗教道德史上、英雄崇拜の依て起る所を察し、又其の行はるゝ所以の心理を觀るに、世の所謂英雄崇拜は余輩が道德的教化の要具として要求するの性格を有するや否や、甚だ疑ふべく、且現在の教育及宗教は、英雄崇拜の意義價値を領會せずして、之が利用啓道に留意せざるなり。余輩の見る所を概括して云へば、世間一般の英雄崇拜は、其俊傑なる人格の同情敬服より出づる崇拜なるよりは、寧ろ其偉功の華麗に眩暈して英雄の神力を咒物的に崇拜する者多く、學校教育の中にありては、英雄譚を以て被教育者の心情を感動するに重きを以て、其弊は英雄の名を咒符的に利用せんとする傾向多し。此を轉じて人格敬服、性格領會の英雄崇拜たらしむるは、今の急務なるを見るなり。

今此立言に先ちて尙一言注意を要するは、余輩の所論は英雄其物の事實的研究にあらずして、英雄俊傑に對する一般人心の態度を觀察し、

人情自然の發露たる英雄崇拜の意識人情を如何に處置啓導せんかといふにあり。英雄其物を成るとか、若くは一々の英雄につきて其英雄たる所以を發揮する、英雄其物が如きは、今の題目の興り知らざる所なり。

蓋し英雄崇拜は宗教的意識が道德的に發表したる成果の、最も原始的に又汎く行はるゝ者なり。此を以て其の對象たる英雄とは、吾人が今歴史的に英傑として數ふるが如き人物のみに限らず、家長、君主の如き、各其家族及社會にては英雄的尊敬を受けて、子弟或は臣民よりは異常の傑士と理想化して觀ぜらるゝ者、家族の祖先或は地方の功勞者其子孫郷民より神的人或は半人半神の靈として追慕せられ又崇拜祈願せらるゝ者、皆英雄崇拜の對象たるを失はず。此を以て吾人が今英雄崇拜と稱する *Heroen-kultus* 又 *Hero-worship* の原語なる希臘の *ἥρωας* とは一般に人間の靈神の謂にして、恰も支那にて一般に鬼神と稱し、我邦にて現人神或は權現と稱する者に同じかりき。されば諸國民

の英雄崇拜は元地方聚落都府の守護靈の崇拜に起りし者多く、既に地方の守護靈なるが故に、其神靈は祖先或は地方の開拓者と合一して、守護神崇拜は祖先或は功勞者崇拜となりて、此に英雄崇拜の源をなす。此より進みて、某の技藝智慧力量に各守護の神靈あるを信じ、或は其範圍に於ける英傑を神とするあり、此に於て守護神の崇拜は恰も技藝智能等抽象的性格の崇拜敬慕なるが如き觀を呈して、後世人物性格の尊敬としての英雄崇拜に端緒を開きしなり。而も其崇拜は守護靈神の崇拜としては、祭祀供犠を以て神靈の來格冥助を祈り、其神力咒力を自己に利用せんとせし咒法的崇拜たるを免れず、此特質は永く後世の英雄崇拜に遺留するに至れり。希臘にて、天神に對して地方的に地靈を祭り、日本にて産土神地神の鎮座を見るが如き、地方的守護神の始にして、日本にては此種の守護神崇拜は古史神代の中にて、既に密接に祖先崇拜若くは地方的首長或は功勞者の崇拜と合一せり。但し地方の首長或は功勞者は、大抵一種族部一部落の祖先にして、死後其靈は永く地方

を照護し種族を鎮守すべしとの信仰は、其氏人たり子孫たる者の常情として、人心道德の大勢力とならざるを得ず。即ち希臘にて諸の氏族 *Phylai* が各其祖神なるヘロスを奉祀して祖先の鎮護を仰ぐと共に、ヘロス英雄功勞者としての功德事業を追慕せし如く、我邦の祖神崇拜は、太古以來氏族の思想が發達せると共に盛に、氏神として氏子氏人の熱心に冥助を仰ぐ所となり、諸の國造、首人は其部下族人と共に祖神を奉祀し、後武門派を分て對立するに及びては、家の子郎黨は血統上は他の氏族なるにも係らず、各其所屬主將の氏神を氏神とし、祖神なるが如く、君主なるが如くに之を奉祀し、諸氏郎黨の村落郷黨には各氏神を祭るに至れり。されば元來は純粹に祖先崇拜に起りし氏神も、社會に現れし實狀としては守護神と混同したり。藤原氏が天兒屋命を奉祀したるが如きは、祖先崇拜として氏族の祖神を奉祀追慕せる者なるも、物部氏が石上の神劍を氏神とし、源氏が一時日本武尊を氏神とせしが如きは、武門武人としての理想的神靈を氏神とせし者にして、神徳の崇拜神

靈力の奉祀が祖先崇拜に密着し來れる者なり。

我邦の祖先崇拜は、一方にて此の如く神德靈力の崇拜に結合せしかば、此方面に於て又運命の守護神靈に關聯して、先の地方的或は民族的神靈は稍一般崇拜の風を帶ぶる者を生じたり。鎌足の産土神たる香取、鹿島二明神は、此因縁を以て永く藤原氏一門の守護神として氏神に合祀せられ、義家が宇佐八幡宮の神前に加冠して其武運が繁榮なりし吉例は、又八幡宮をして殆ど源氏一門の守護神たらしめ、後世は明に之を氏神と稱したり。平氏は清盛の崇敬ありし因縁を以て嚴島明神を氏神とし、東國兵起るに及びては神力に依りて叛賊を平げん爲に、日吉神社に氏神氏子の關係を結ばん願文を納めぬ。知るべし、氏神の概念は、祖先追慕及神德崇拜より一進して運命守護の爲に崇拜する神となり、春日の神威と藤氏の光榮と、八幡大菩薩と源氏とは其運命を一にするに至りしを。此に於て、氏神は又危急の時に祈願を捧げ冥助を祈るべき神靈となり、白鳩を以て八幡宮の神託となす源氏の大將あり、氏神

の白鷺飛ぶを見、運命を堵して勝利を得し武人あり、國難には氏神祖廟に祈るは古來の常習なりき。希臘に於ける波斯戦争の時にも、英雄氏神の崇拜祈願盛に起り、幾多のヘロス神が陣頭に立ちて希臘軍を助けしといふは、恰も此に同じく、周武王が文王の木主を奉じて紂を討ち、我邦の武士が祖先の武士魂籠れる甲冑に身をかため、父祖の大和魂宿れる太刀打ちかざし、氏の紋所を背に掲げて戦陣に臨むは、皆是れ祖先氏神を運命守護の神として奉祀せる宗教的意識の發表にあらずや。

祖先崇拜、氏神奉祀の中には、此の如く神力神德の祈願崇拜を含蓄したりしかば、一般民俗の間にては漸次氏族家門の觀念を失ふに従て、氏神とは單に守護神の義となり祖先崇拜の方面を離れ、産土鎮守の地方的崇拜より一轉して一般に運命禍福の神たるに至れり。此如き風は多少武門の中にも發生せざりしにあらざるも、武士は家門の觀念に富めるを以て、其氏神は尙氏の祖神たる特色を脱せざりしに、民間の氏神に至りては、名のみ氏神にして其實全く失はるゝに至れり。即何れの

地方に至るも、疫病退治の爲に奉祀したる牛頭天王を氏神とし、水難防拒の冥助に勧請したる諏訪明神を氏神とし、其他池の鎮守なる辨天殿鳥、福德の祈禱を捧ぐる稻荷等を氏神とする者、比々皆然り。此に於て氏神の崇拜は其元來の性質を失ひ、其名を保存せる状態より尙一層進で全く其名をも失ひ、全く運命の神として某々の英雄を崇拜し、其神徳靈力に祈願する者を生ずるに至れり。是れ希臘にて氏の祖神 *heroes* を離れて單にヘロスと唱へて崇拜せし神靈に同じく、彼にありてはヘロス即英雄崇拜なる概稱を得しも、我邦にては此の如き概稱なく、只權現と稱する總稱稍此に近きも、而も此種英雄崇拜の重要な神格なる天神、清正公、弘法の如きは權現の名を得ざるが故に、今は之を英雄崇拜と總稱して尙其性質成立を明にせん。

蓋し何れの國の何れの神も、皆運命禍福の神たる性質を有せざるなれば、今氏神が其性質を轉じて運命禍福の神として崇拜せらるゝに至りしといふのみにては、其概念餘りに漠然たり。茲に概念の明確の

爲に、尙一層氏神より轉じて英雄神となりし諸神が崇拜せらるゝ所以を求むるに、其等運命禍福の神たるには、各過去の事蹟或は説話に基きて其神の性質を定め、其神徳を崇拜祈願するは其特色なり。即此等の神は始より天上の神、超天然の神靈ならず、皆曾て歴史的に某の時代方處に生存したりし人間にして、其生時の事歴功徳或は威力は、以て神として人間の尊敬のみならず、祈願崇拜を買ひ運命禍福を左右すべしとの信仰あるを以て此等の崇拜は即英雄崇拜となれるなり。

此種呪力的英雄の崇拜せらるゝ者、我邦の民間に甚だ多く、古希臘民間のヘロス崇拜、中世紀基督教の聖徒崇拜に似たる者あり。關東の山岳に日本武尊を奉祀せる者、妙義、古峯の如きは、民間にて尊が天狗となりて靈力を有する者として祈願する所なり。役行者亦其神靈を諸處に留めて福德の祈願に應ずと信ぜられ、岩窟洞穴に多く其像を祭り、弘法大師は至る所に奉祀せられて、眼病疫病等一切諸種の祈願をなせり。此等は人事禍福の祈願神としては不動、藥師に異ならざるも、人間とし

て生存せし時に既に靈力を現して人間を利したりとの信仰あり、人間より神となりしとして崇拜せらるゝ者にして、其が人間として具象的に事業をなしたる英雄神なりとの信仰は、俗人の具象的信願を維ぐに足る者あり。されば從來は此の如き人間の神靈ならずして崇拜せられし靈神も、一は司祭的牽強と一は此の如き具象的信願の需要とより、英雄神靈と解釋せられて崇拜せらるゝあり。温泉ある處には湯の神靈を祭るを常とするも、單に湯の神としては如何なる神なるやを知らず漠然に失するを以て、之を具象的人間的に解釋して少名彦となせる者多し。東北地方にては出産の神靈、乳兒の司管として恐るべき老婆ありとて、之を姥神と稱せしが、宮城野なる大銀杏樹の姥神は聖武天皇の乳母此地に死して、墓邊此大樹を殘せし者なりと解釋せり、其他山神を大山祇産神を韋提希夫人、御靈を桶逸成、大黒を大國主と説明して崇拜せるが如き、皆信仰の需要に出てし、オイヘメロス主義と稱すべく、英雄崇拜と咒力崇拜との人心に於て密着せるを示せり。

菅原道眞の如き、人物として敬慕追敬して純粹なる英雄崇拜の對象たるべき人も、天満宮或は天神として崇拜せらるゝや、又咒力的英雄崇拜となれるは顯著なる者あり。即天神が弘く崇拜せらるゝは、菅公の人物才徳を敬慕する爲なるよりは、尊る公が晩年に藤原氏を怨みて天拜山に雷となりしといひ、或は又比叡山なる律師の下に現れ、柘榴果を食ひ火を吐き當今を怨み奉ると叫び、雷となりて内裏に落ちたりといふ點に依りて、此の如き神靈咒力の神として畏敬せらるゝ者多く、所謂火雷天神として祀らるゝなり。現に北野天満宮の如きは、其奉祀の始は下京に住せる一婢女文子の夢に現れしに始まりといひ、今下京間の町に文子天神現存せり、北野の社内へ藤原時平の子孫たる徳大寺氏に關係ある者の入る事あれば直に落雷あるべしとは近頃も實際の信仰として存せり。此を以て今天神を崇拜する者は、此の如き威烈の神として之に禍福運命の事を祈願する者多く、偶兒童等が書道の神として之を尊崇する者あれば、其は菅公の才徳を追敬するの意にあらずし

て、其神靈加護に依りて書方の熟練を祈る者多く、咒力的英雄崇拜の特色を脱せず、此關係に於ては和歌三神として祭らるゝ人丸、赤人、衣通姫も、亦和歌の靈として咒力的に崇拜せらる事、菅公の書道に於けると相異ならず。

菅公に次ぎて義經、清正等の崇拜多きも、彼に於けると同じく、其人物事業の追慕に依りて崇拜せらるゝにあらず。義經は少時、天狗に學びて不思議の力を有したりとの信仰を以て、其咒力の崇拜弘く行はれ、清正も毒を被て而も百日の生存をなしたる咒力の神として、癩病其他疾病を醫するの神となれり。所謂清正公の崇拜は、殆ど歴史上の人物たる清正と離れて靈神となれる感あるにあらずや。此點に於て支那人の關帝崇拜亦之に酷似せり。

此の如く觀察し來れば、英雄崇拜なる者は、其根底に於ては曾て人間として生存し、才徳あり功績あり餘澤子孫後世に及ぶ人々の崇拜に外ならざるも、其成分は時の變遷人心の需要と共に複雑なるを知るべし。

即英雄として崇拜せらるゝ者は、地方の守護神、開拓祖神を始とし、祖先も君主も、事實上の俊傑もあり、時には其功績人物の追慕の情より發し、道徳的模範として崇拜せらるゝあるも、多くは功績威力の驚歎より一轉して靈神となり、咒力的崇拜祈願の對象たる者多きは今日の實情なり。此を以て吾人が廣義に英雄崇拜なる概念の下に包括すべき神々には、鎮守、氏神、御靈、權現等あり。其中今日の氏神(鎮守産土神と混一せり)は、殆んど土地の開拓者或は氏族の祖先として紀念追慕せらるゝにあらず、單に町村の社として定期祭禮の場處として存在するのみ、殆ど人心教化の上に實力を有せず、といふも不可なし。之に反して御靈神即清正公、天神の如きは、信奉者多く、地方階級の區別を超えて多く崇拜せらるゝも、其が信仰の實力は全く咒力の信仰に存し、人事禍福の神靈たるのみ。只其が基礎を歴史上の人物に求むるは、邦人の具象的趣好の需要に出でて、此の如き神靈奇蹟ありしとの信仰に支へられて其咒力を祈願せるなり。此故に清正公、天神が多く崇拜せらるゝも、其歴史

上の事績人物才徳の以て道德的標本として教化の具たらしむべき者は、今日の英雄崇拜には認められずといふも不可なきを見る。

今日は村々町々に氏神なきの地なく、其社殿の營繕、祭祀神職の奉養に費す所少なからざるべく、天神、權現の類にして四方の崇拜を受くる者亦少々にあらず、信者の之に賽し之を祀る爲めに費す所莫大なる者あらん。而して此等は單に町村の鎮守集會所として、平時は兒守頑童の遊戯所たる外何等の効力なく、又咒力崇拜の英雄神は人の自立の志を害し、咒力神靈の迷信害用をなさしむる者多しとすれば、此の如き英雄崇拜は人心教化の大職務に益なくして、國家の徒費をなさしむる者といふも可ならん。此等英雄崇拜にして教化の實力たる素質なき者ならば止まん、然れども英雄崇拜は元國民性情の反映、理想の投映にして、且又人心が俊傑を敬し、性格人格の優秀なる者を欣慕する眞摯掬すべき人情に出て、若し之れを利導して教化の要具となさば、國民の倫理教化上利益尠小ならざる者あらん。之を棄て、顧みざるは、社會道德

上の一缺點、倫理の發達を冀ふ者の責免るべからず。

一般俗人が、自己には如何なる關係あるやを知らざる鎮守氏神に對して、何等の思想をも抱かず、之に反して禍福左右の咒力ありと傳へられ、其歴史には不思議の奇蹟ありしと聞く咒力的英雄神に祈願するは、自然の勢のみ。而も此の如き咒力的英雄崇拜の中にも、眞摯なる英俊欣慕の種子存すればこそ、其崇拜を歴史的人物に求むるなれ、是れ咒力的英雄祈願も、之を利導啓發すれば眞摯なる英雄人格の道德的尊崇たらしめ、此に依りて倫理修養の一助たらしむべき萌芽にあらずや。人にして偉人俊傑の事業功績を歎美すると共に、其の人物性格を欣慕し、其に近似せんとの情なからしめば、何れの英雄崇拜も起る能はざるべく、假令咒力の方面よりせる私利的英雄崇拜なりとも、既に此の如き崇拜が存在せるは、即人情自然の發露にして、其咒力を利用せんとの衝動的慾求は、其性格人物を渴仰するの情に結合すればこそ、其咒力の存在を歴史的偉人に求めんとするなれ。されば土地の開拓者、氏の祖神の